片思いのススメ

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
片思いのススメ

【Ｎコード】
Ｎ３４７３Ｉ

【作者名】
ゆいまる

【あらすじ】
これは、片思いばかりしてきた恋愛研究部、通称コイケンのメンバーが、恋を成就させるまでの、汗と涙の物語りである。
※オムニバス形式です※
恋愛研究部。通称コイケン。
部則：
一、恋愛については嘘を他部員につかない事。
一、他部員の恋愛成就に全力でヘルプする事。
一、部員だれか彼氏出来れば解散。

メンバー：
部長…万年Ｎｏ２、
お嬢…自信過剰、
むっちゃん…コンプレックスの塊、
乙女ちゃん…ゲイ、
亮太…朴念仁

プライドが邪魔する恋　1

ハッキリ言って、私に彼氏が出来ない理由がわからない。
読者モデルするくらいの可愛さだし、だからって頭が特別悪いわけじゃない。たぶん、私に釣り合う人がいなくて、男子が勝手に私を諦めてるだけなんだろうけど。それこそ馬鹿だ。私みたいな女子と付き合えるチャンスなんて、奴等には一生ないだろうに断るなんて。
まぁ、いいわ。そんな卑屈な連中はこっちから願い下げ。きっと、私にはクラスの男子より、お金持ちで大人な人が似合うのよ。私は絶対、自分を安売りなんかしない。

恋愛研究部。略してコイケン。活動は週一のミーティングが中心だけど、実質は毎日に近い。何故なら、恋愛そのものが部活だから。
「はい。じゃあ、皆揃ったぁ？」
部長の弥生が、思い思いに過ごしていた部員達をグルリと見回した。私はちょうど塗り終わったネイルに息を吹き掛ける。
「綺麗な色ね。新色？」
隣りに座ってた乙女ちゃんが話しかけてきた。乙女ちゃんと言っても、彼はれっきとした男だけど、ここにいる誰より心は乙女だ。本名は猛なんて厳つい名前で、陸上部と掛け持ちの彼は、私達以外と居る時は『乙女』を隠す、インハイ有力選手だったりする。
「そうそう。今度、塗ってあげようか？」
私のそんな言葉に、乙女ちゃんは一瞬顔を輝かせたけど、すぐにそれを曇らせて首を横に振った。
「ううん、いい。他に見られたら、おかしいでしょ？」
寂しそうな顔。そして、傷ついたのは自分のくせに私に気を使って笑う。
「あ、でも、今度買い物一緒に行こう？」

「そうね。私、乙女ちゃんの趣味、かなりイケてるから、参考にしたいもの」
「あら、モデルさんに言われるなんて、光栄だわ」
乙女ちゃんはそう言って微笑んだ。私はこんな乙女ちゃんが大好きだ。
「そこ。お喋り止めて。ミーティング始めるよ」
恋愛万年Ｎｏ．２の弥生部長の声が飛んできた。
私達は顔を見合わせ、肩を竦めた。
「じゃあ、むっちゃんから順に報告～」
部長の声に睦月は大きな体を縮こませ、俯いたまま小さな声で何か言った。
「三田、聞こえないぞ」
顧問の保健医、百崎先生が野次を飛ばした。先生は、私でも認める美人だけど、サバサバしていて男っぽい。
むっちゃんは、厚い前髪のカーテンの奥の眼鏡の向こうから、目だけ上げた。
「すみません。あの、ですから、今週も……その……」
「声かけられなかったの？」
私はいい加減イライラして口を挟んだ。むっちゃんは、正直苦手だ。ブサイクだから自信ないって、そりゃ、むっちゃんのガタイと顔じゃ仕方ないけどさ。この暗い性格はどうにかならないのかしら。むっちゃんは頷くと、また下を向いた。
私は呆れ顔でむっちゃんを睨み付ける。
これで、むっちゃんは半年も好きな相手に声すらかけないでいる事になる。
「ばっかみたい。『おはよ』くらい、なんて事ないじゃん」
私は前髪をかきあげた。
「そんな……むっちゃんなりに頑張ってるんだよ？」
お人好し部長が助け船。
「人それぞれだろ」

部長の隣りにいた亮太が、やる気なさげに呟いた。そもそも、私はこいつがコイケンにいる意味がわからない。部活のための数合わせの割に、ミーティングには真面目に参加する。
私は二人に言われてムッとした。私が間違ってるとは思えない。
「まぁ、お嬢のいいたい事も正しい」
乙女ちゃんが援護してくれた。けど、肘をついて顎をちょこんと組んだ手の甲に乗せると
「でも、私は、むっちゃんの気持ち、わかるなぁ」
そう言って、私とむっちゃんに微笑んだ。
私は少し気持ちが柔らかくなって、苛立ちを溜め息にして吐き捨てた。
話は乙女ちゃんに移された。
乙女ちゃんは一つ上の、陸上部三年の先輩に恋してる。今年卒業だから、時間があまりない。
乙女ちゃんは、少し嬉しそうに
「来週から、インハイ予選に向けて、個人的に見てくれるって」
そう言って小首を傾げた。私達は拍手する。自分の恋を誰にも話せて来れなかった乙女ちゃんは、コイケンでは本当に楽しそう。
「次、お嬢は？」
私の番。実はとっておきの話があるんだよね。
私は勿体ぶって、自分の髪を指先に巻いて弄びながら
「えとぉ」
チラリ皆を見る。焦れったそうな部長の顔が一番面白い。私は弛む口元を必死に隠し、力いっぱいクールを装う。
「告られた」
「「えぇっ～！」」
あぁ、気持ち良い！　皆の驚く様を、私は優越感いっぱいに横目で確認する。でも、動揺はみせない。
「何よ。私が告られるくらい、普通でしょ？」
ふふっと含む笑い。小気味良さにかなり気分が良い。

「相手は？」
部長がやけに必死に訊いて来た。亮太以外は興味津々、身なんか乗り出しちゃって。
「まぁ、大した奴じゃないんだけどぉ」
私はまるで皆のリアクションなんか意に介してない様に、塗り立ての爪を眺めた。
この私が告白ごときで浮かれてるなんて、あってはいけない。
「雑誌のカメラマンみたいな～」
「大人ぁ？」
部長の尊敬のまなざしが気持ち良い。
結局、この日は私の話で持ち切りで終わった。
そう、私はこうでなくっちゃね。

プライドが邪魔する恋　2

私は帰りはいつも一人だ。女子高生なら大抵決まった連れはいるもんだけど、モデルの仕事とかもちょこちょこあるし、何より、私には知られたくない現実がある。

私は不機嫌に顔をしかめると、足早に校門に向かった。

ふと、誰かの人影が見えて、目を細める。

もしかしたら七瀬さんかも！

私は一気に盛り上がる鼓動に、耳まで赤くした。

七瀬さんは、昨日、私に告白してくれたカメラマンの……助手。確かに告られはしたけど、近付いたのは私の方だ。

背が高くて、優しくて気が利く。たまにする煙草の匂いと無精髭が、たまらなく大人な感じがして、一目惚れ。強引にメルアドを聞き出したのは一か月も前の事だった。

実はまだ、返事はしてない。すぐに返事するなんて、安っぽい事なんて出来ない。本当はすごく嬉しかったんだけど……。

私は逸る気持ちを押さえ、まるで気付いてない様子で校門に向かった。

「皐月さんっ」

影が飛び出し、道を塞いだ。私はその声に顔を引きつらせる。

「げっ。六本木」

そこにいたのは、あのうるわしの七瀬さんじゃなく、チビでソバカス面、しかも一年の六本木。

私は後ずさる。

「何よ」

「今日こそ、皐月先輩と一緒に帰りたいと」

モジモジする六本木。ハッキリいって趣味じゃない。私は奴が話終わる前に歩き出した。

「あっ、待って！」
「キモい！　あんた、ストーカーじゃん」
私は小馬鹿にして鼻で笑う。
「すみません。でも、今日は、どうしても差しあげたい物が……」
何か差し出すけど、私は一瞥もせずに振り払った。その拍子に六本木は何かを落とす。ばらっと地面にそれは散らばり、奴は慌ててしゃがみこんだ。後味は悪いがこれで振り切れる。
「つきまとわないでくれる？」
私はその何かを拾う六本木を見下ろした。
鏡見た事ないの？　こんなので私と付き合いたいなんて、私に失礼だわ。
「しつこいアンタが悪いんだからね」
「皐月ちゃん？　どうかしたの？」
背中からの声に、私の耳がまた赤くなった。私は思いっきり女王様から姫モードに切り換える。
「七瀬さん」
七瀬さんは格好良い車からこちらを見ていた。
「そろそろ会いたいなぁって思って」
嬉しい事を言ってくれる。
私は少し俯く。
「車、乗らない？」
七瀬さんの少し不安げな声が可愛い。私は極上の笑みを作ると頷き、車に乗り込んだ。
「彼はいいの？」
「いいのいいの」
所詮レベルが違う。
私は七瀬さんの肩に寄り掛かり、無様に這い付くばる六本木を見捨てて行った。
始めて一人で乗る、大人の車に少し緊張していた。
「お腹すいてない？」

七瀬さんは、いつもの様に優しい。
私は軽く首を横に振った。お腹は空いていたが、なんだか言うのが恥ずかしい。
「どっか、ゆっくり話したいんだけど。制服じゃ、行ける場所決まってくるか」
困った顔。それでも、優柔不断にこちらに振ってこない所が、また好き。意外に助手席が運転席に近いのに、ドキドキする。シフトレバーに置かれた手が、大きくて、綺麗。七瀬さんはチラリと時計を見た。
「夜景でも見に行こうか」
サラリと出た言葉は、かなり魅力的で、私は頷いた。
「行ってもいいですよ。どうせ暇だったし」
私は精一杯背伸びして澄ました顔で答えた。
七瀬さんは、苦笑すると、洋楽のナンバーを流した。いつもの楽しい会話が弾みだす。
知らない街に、明りが灯り始めた。車は山道をのぼって行く。光はやがて、小さな血に降りて来た星空の様に眼下に広がり始めた。
「すごっ」
口の中で呟いた時だった。
七瀬さんは車を止める。車から降りなくても、綺麗な夜景が見れた。
「綺麗」
呟く私に、七瀬さんも夜景を見ながら
「気に入って貰えたみたいで良かった」
ハンドルに上半身を預けた姿勢。そのまま、私を振り返る。
途切れる、和やかな空気。私は気付かないふりで、夜景ばかり目に映すけど、七瀬さんの視線が気になって、何も見ていないのと同じだった。
「返事、まだ待たなきゃダメかな」
七瀬さんの声。心臓が飛び出しそう。まるで鼓動が体全体で鳴り

響き、七瀬さんにも聞こえてしまうんじゃないかとさえ心配してしまった。
ここで素直に頷けば、全ては上手くいく。大好きな七瀬さんの彼女になれる。部員の誰かの恋が実れば即解散のコイケンメンバーには悪いけど、社会人な彼氏なら自慢出来る。私に断る理由はない。けど……。
私、まだ、七瀬さんから何も貰ってない！　奢りも数回安い店でだけだし。何か、それって、安くあげられてない？
「本当に、私の事？」
「好きだよ」
七瀬さんの手が、私の手に重なった。私は一度目を瞑ると、そっと答えを告げた。
「七瀬さんの事、もう少し知ってから返事します」
私のプライドは、貢がない相手に頷く事を許さなかった。

プライドが邪魔する恋　3

それから七瀬さんは、私を家まで送ってくれた。
走り去る車のランプに、ちゃんと気持ちを伝えなかった事を少し後悔し始める。
私は自分の家だと行ったマンションから、再び歩き出した。そう、実は私の家は、今いる様な高級マンションじゃない。
通りを一本戻る。
「……」
錆び付いた階段。剥げたペンキ。木造のボロ文化住宅。これが、本当の私の家。
階段を昇ると、貧乏たらしい音が跳ね返ってくる。私は誰もいないか確認して、家の鍵を開けて体を滑り込ませた。
「お姉ちゃんお帰り！」
途端、チビ達がタックル。わらわら群がるチビは総勢四人。内一組双子。
「遅かったね」
台所に立つ母親が、二つの鍋をかき混ぜながらそう言った。
子沢山に、おさがり着回しの自前カットの子ども達。シールだらけの家具、破けたままの障子。何から何まで全てが貧乏臭い。こんなの私に似合わない。
私は「悪い？」それだけ言って、居間に向かった。
早くこんな生活抜け出したい。心からそう思った。

次の日は雑誌の撮影だった。
色んな洋服が着れて華やかなスポットに照らされる。皆に注目されて、ちやほやされ、知らない子達からファンレターだって最近は貰ったりする。
この世界こそ、私に相応しい。あんな貧乏じみた暮らしなんて…

…。
「せ～んぱい」
「六本木」
しまった。ぼんやりしてたから、こいつがいるのに気がつかなかった。
こいつといると、ブサイクが伝染りそうだ。
私は無視を決め込んで歩き出した。
「もう休み時間、終わりですよ～。どこに行くんです？」
教室を出た私を追いかける。
「うるさいっ。何なのよ」
廊下で振り返ると、六本木はソバカスだらけの顔に満面の笑みを浮かべた。
「やっと止まってくれた。先輩。先輩の妹さん、第二小ですよね」
「そうだけど？」
なんだ、ストーカーは家族まで調べあげるのか。
「僕の弟が同じクラスで、こないだお宅にお邪魔したんですよ」
「ふ～ん」
だからなんだ。弟が家に来たくらいで……って！
私は六本木の肩を掴んだ。奴はニヤリと笑い。
「それで、僕も一緒にお邪魔したので……」
「アンタ！　家に上がったの！？」
コクンと頷く六本木。茫然とする私。
「先輩。皆がいるので、恥ずかしいですよ」
そばかすが赤らんだ。私は慌て手を離す。六本木は優越感を露に
「僕、写真部じゃないですかぁ。で、先輩の家も撮ったんで……」
「なんですって！」
私は顔を引きつらせる。六本木はそんな私をクスクス笑い。
「昨日渡そうとしていたのは、その写真なんです。僕達、時間が……」
その時、チャイムが鳴った。生徒達がガヤガヤ教室に戻って行く。

「あ、先輩。僕、その写真持ってますから、今度あげますね」
そう明るい声で手を振り、学年が違う六本木は急ぎ足で去って行ってしまった。
私は立ち尽くす。
これは脅迫だ。無邪気な六本木の笑顔が、いつも以上に気味悪く思えた。

プライドが邪魔する恋　4

「今日はこれから撮影なんだぁ。すごいよね～。街でスカウトされて、毎月載るモデルなんてさ」
部長がジュースのストローをくわえた。
彼女は、私が載る雑誌の愛読者だ。もともと、クラスが違う私達が仲良くなったのだってそれがきっかけだった。
私達は今、私のマネージャーさんと待ち合わせのマックにいる。
彼女は他の女子と違って、いつも素直に羨ましがってくれる。一緒にいて本当に気持ち良い。他の女子ときたら、私の美貌と才能を妬んで陰口ばかり。くだらない。私にしたら、努力もしないで僻んでるアンタらの方がどうかしてる。
そんな中、部長はいつも褒めてくれて、私の話も聞いてくれる良い奴だ。
今日は乙女ちゃんは部活でいないのが残念だけど、二番目に信用してる部長に相談する事にした。
「あのさ、一年の六本木、知ってるでしょ？」
「お嬢のおっかけの？　なら、うちの学年で知らない人いないよぉ。ね、むっちゃん」
あ、あまりに空気でいるの忘れてた。むっちゃんは俯いたまま、小さく「うん」と肯定した。
「そいつがさぁ」
言いかけて、止まった。そういや、コイケンの連中にも家の事は話してない。
「どしたの？」
首を傾げる部長。私は行き詰まり、
「えと、えとぉ」
視線を彷徨わす。どう、説明すれば……。その時だった。
携帯の着信音が鳴る。この可愛らしいラブラブな曲は、七瀬さん

だ！
その電子音に、条件反射の様に鼓動が高鳴りだす。
「ちょっと、ごめんね」
私は二人にそう言うと、少し震える指で七瀬さんからの電話をとった。
電話の着信だけで、体中がドキドキして、くすぐったい気持ちになる。すぐにとらないのは、私の悪いクセだけど、七瀬さんの場合は、焦らしてるんじゃない。声を聞くまでに、落ち着く必要があるのだ。
私は部長やむっちゃんにわからない様に、小さく深呼吸すると、携帯を耳にあてた。
「はい」
「あ、皐月ちゃん。俺なんだけどさ」
いつもの決まったフレーズの出だしに、思わず笑みが零れる。
七瀬さんの、好きな人の、声。私にしか聞こえない、声。
私は嬉しくて、何度も頷きながら聞いた。
「じゃ、また後で」
電話を切るのがいつも切ない。私は切れてからも、少しの間、まだ七瀬さんを感じていたくて、いつも携帯を離せない。
ドキドキが遠ざかる。私はゆっくり携帯を置いた。
「今の、例の人？」
「うん」
私は誇らしげに頷くと、カラカラになった喉にお茶を流し込んだ。
「何か、友達の仕事でモデルがドタキャンとかでね、代わり頼めないかって。ギャラはちゃんと出すし……」
私はわざとそこで言葉を切る。
「出すし？」
珍しくむっちゃんが訊いた。私は弛む口を隠すように手で押さえながら。
「私に会いたいって」

「いや～っ」
部長が自分の事の様にはしゃいだ。
「お嬢……」
むっちゃんが呼んだ。
私は顔を向ける。
「その人、本当に大丈夫？」
カチンときた。私は眉をしかめ、むっちゃんを睨み付ける。
「どう言う事よ」
むっちゃんは目を逸らして
「……大人って、わからないから」
「騙されてるって事？」
私は目を見ないむっちゃんに腹が立った。私が、大人の男性から告られるのが、妙だとでもいいたいの？　それとも、私に見る目がないっていいたいの？　いずれにしても、むっちゃんに言われる筋合いは無い。
「あのね、七瀬さんは……」
私は鞄から七瀬さんの名刺を取り出して、むっちゃんの前に叩き付けた。
「ちゃんとした人なの！　コイケンメンバーにそんな事言われるなんて思わなかった」
怒りが治まらない私を、部長が止める。
「落ち着いてよ。むっちゃんは、お嬢を心配して……」
ちょうどその時、マックにマネージャーさんが入ってきた。
私はもう一度むっちゃんを睨むと、自分の荷物を引っ掴んで
「じゃあね」
出て行った。

プライドが邪魔する恋　5

いつもの雑誌の仕事を終えて、私は急いで着替えた。
仕事と言っても、メインのモデルさん達と違い、私は二、三着。それでも、少しずつ注目されて来てるって、編集者の人は励ましてくれる。私は絶対のし上がってやるんだ。せっかく、貧乏から抜け出すチャンスを掴んだんだもの。その為なら、どんな努力だってやってやる。
「お疲れ様でしたぁ」
私は一度スタジオに戻り、頭を下げると、すぐに携帯を取り出しながら走った。
七瀬さんが一階で待ってるはずだ。リダイアルでかかるナンバー。七瀬さんは、私の特別な人。
「はい」
ワンコールで出た。もしかして、待っててくれたのかな。
「皐月です。今、終わりました」
「そっか、俺はロビーにいるから」
急いでロビーに向かう。早く、とにかく早く会いたい。
むっちゃんにあんな事言われたから、余計に安心したかった。
七瀬さんに限って、悪い人なわけない。私は何故か胸に引っ掛かりを感じながら急いだ。
「急でごめんね。行こうか」
ロビーにいた七瀬さんはどこか落ち着きがない様子だった。周囲を見回し、ちょっと苛立った感じにも思える忙しない動きで私の手を強引に引っ張る。
「あの……」
いつもと微妙に雰囲気が違う気がした。
じっと見てみる。隣にはいつもの七瀬さん。外にはいつもの車。何にも不安に思うことはないはずなのに。

「乗って」
「あのっ」
私が躊躇した時だった。
「待って！」
聞き覚えのある声。振り返って私は驚き目をむいた。
「六本木！」
六本木が自転車を蹴倒さん勢いで降りて、こちらに走ってくるのが見えたのだ。私は驚きと同時に、こんな所まで追いかけて来てるのに、ゾッとした。
「先輩離れて！」
六本木は言うが早いか、あろう事か七瀬さんに掴みかかった。私はムッとして、引き離そうと、六本木の腕を掴んだ。
「どうしてここにいるのよ！」
七瀬さんも驚いて、ひいている。
「何だお前っ」
「……」
何か六本木が七瀬さんに耳打ちした。サッと七瀬さんの顔色が変わった、次の瞬間。
「くそガキが！」
私は目を疑った。
七瀬さんの拳が翻り、六本木の貧弱な体は、私が掴んでた腕が引き剥がされる程の力で、後方に吹っ飛んだのだ。
六本木の体が地面に打ち付けられる。
そして、六本木が簡単に動かなくなってしまった。
「い、いや～っ！
私は叫んで顔を覆った。いくら何でもやり過ぎた。暴力振るうなんて。知らない顔の七瀬さんに、私は愕然とした。
「いいからっ、おいで」
人が集まりかける。七瀬さんは私を車に押し込むと、逃げる様にその場を後にした。

「くそっ」
苛だちを露に、七瀬さんは運転しながら煙草に火をつける。
怖い。私の好きな七瀬さんじゃない。一体どうしちゃったの？
私はすっかり冷たくなった自分の手を、膝の上で握り締め、混乱する頭を整理しようと外を見た。
外の景色が飛ぶ様に消えていく。私、どこに連れてかれるんだろう。
隣りにいるのは、好きな人のはずなのに、心細くて怖くて仕方なかった。
しばらく走ってから、七瀬さんは車のアッシュトレイにまだ吸いかけの煙草を揉み消した。外はだんだん知らない住宅街になって来る。
車が出てから無言だった七瀬さんが、いきなり口を開いた。
「皐月ちゃん、経験くらいあるよね？」
「はい？」
突然の質問に、私は目が点になる。七瀬さんは軽薄な笑いを飛ばすと
「またぁ、純情振らなくても、最近は初体験中学ですませるのが普通でしょ」
信じられなかった。私は七瀬さんが、こんな俗っぽい人なんて思ってもみなかった。
自慢じゃないが、私はファーストキスだってまだ。自分を安売りしない。
「あの、帰ります。下ろしてください」
私は完全に失望して、豹変した七瀬を見つめた。
怒りより哀しかった。そんな風に見られてたなんて。
けど、七瀬は鼻で笑うとまるで私の話なんて聞いてないみたい。
「あ～もしかして、皐月ちゃん、本気でまだ？　ならちょっと可哀相だなぁ」

肩を震わせて笑う。車は、知らないマンションの地下駐車場に吸い込まれていく。
「ふざけないで！　車止めなさい！」
私は恐怖をかき消す様に、声を上げた。途端、車が急停止。反動で、私はシートに体を思いっきりぶつけた。
「いったぁ」
「生意気な所も良いよね」
七瀬が私に覆い被さる。私は息を飲んで身を固くする。七瀬はそんな私を楽しそうに眺めると、スルリと私の頬を撫でた。
「本気であの貧乏から抜け出たいんなら、今の仕事より、もっといい仕事を紹介してやるよ。嘘ついて他人ん家で下ろされなくてすむぜ」
七瀬は喉を鳴して笑う。奴は私の事調べてる。そして、たぶん私を……。
私は自分の馬鹿さ加減に目を固く瞑った。ようやく、今、わかった。むっちゃんの言ってた事が正しかったってコト。そして私は、肩書きだけで人を判断してた大馬鹿者だったってコトを。

プライドが邪魔する恋　6

七瀬は私を車から引き摺り下ろすと、無理矢理マンションへ連れ込もうとした。
私はあらん限りの力で抵抗する。
「ふざけるな！」
七瀬の怒声。竦みそうになったけど、こんな所でこんな風になんて……絶対いや！
車が一台入って来た。ヘッドライトが駐車場内を照らし、横切っていく。しめた。ここの住人かもしれない。なら、大声さえ出せば！
「たすっ」
瞬間、私の口が後ろから塞がれた。
「遅いから何してるのかと思ったぜ」
知らない声。私はジタバタしながら相手の顔を見た。
私を後ろから組み伏せる男は、かなり屈強な角刈り。空手をやってる亮太よりも太そうな腕だ。
「暴れるからてこずってよぉ」
七瀬が私にめちゃめちゃにされた服の襟を正す。
「皆待ってるぜ。さっき車入って来たろ、さっさと行こうぜ」
角刈りはそう言いながら、私の口にガムテープを貼ると、ひょいと私を抱えあげた。
七瀬は私の顔を覗きこむ。
「ったく、てこずらせやがって」
その顔は、醜く苛立ちに歪み、私の好きな七瀬さんじゃなかった。
部屋はマンションの一階だったらしい。角刈りが玄関をくぐると、あと二人知らない男が出て来た。
角刈りは乱暴に私を寝室のベッドの上に放り投げる。
私は慌てて上半身を起こし、周囲を見回した。そこには照明やカ

メラがこっちをじっと見つめていた。
私、どうなっちゃうんだろう。
恐怖で泣き出しそうになるのを堪え、唇をキツく噛み七瀬を睨み付ける。何か他の奴と話してた七瀬は、私の視線に気付き、冷笑を浮かべた。
ベッドが軋んだ。七瀬が膝まづいてベッドに昇ってきたのだ。
一歩近付く毎に、私は一歩後ずさる。
「こないで。大声だすわよ」
そう言う声が震えて情けない。
「どうぞ。ここは防音は完璧だからなぁ。声、出せば出す程こちらは嬉しいね」
七瀬の手が伸びる。私は息を飲み、目を閉じた。
七瀬は、そんな私をからかう様に、指を私の髪に絡めた。
「説明いらないよな？　お前だって、俺に気があったんだろ？」
そうだった自分が恥ずかしい。七瀬はうっすら開けた目のすぐ傍まで来ていた。
「初体験に同情して、始めは俺がシテやるよ」
冗談めかして七瀬が私の耳たぶを甘噛みした。途端に言いようもない不快感が、湿った呼気と、ぬめっとした舌の感触と共に背中を這いずり、私は思わず身を強張らす。
「アンタ、なんか……」
強がる唇が震え、涙が頬を伝った。
こんな奴に、こんな所で……。悔しさと恐怖、哀しみ、怒り、色んなものがパンクしそうだ。
「どうせ逃げられないんだから、楽しもうぜ」
ドアが閉められ、鍵がかけられる音がする。男達の粘着質な熱のこもった視線が一気に向けられ、私の中に絶望が生まれた。
「じゃ、回すぜ」
男の声がした。
部屋にいた二人の一方はカメラ、他方は照明を担当らしい。角刈

りはいない。見張りだろうか。
絶望した頭は、やけに冷静だ。ただ、体はまだ触られるのを強く拒んでいて、震えが止められなかった。
私のたった一つの体。『初めて』は大切な人とって決めてたのに。
涙がいくつもこぼれ出した。身動き出来ない私の、心と体の精一杯の抵抗の様だった。
「いいねぇ。いつもの小生意気が涙なんて」
七瀬は卑しい笑みを作ると、私にゆっくり近付き、ブラウスに手が伸びた。
私が、汚される……。
私は観念して、ぎゅっと目を固く瞑った。

プライドが邪魔する恋　7

その時だった。玄関からもの凄い音がしたのは。
物が倒れ、争い合う音と声。七瀬も含め、その場にいた全員が玄関を振り返る。
「お嬢～っ。いるんでしょ！」
まず聞こえたのは部長の声。
「なんだ！」
七瀬以外が外に出て行こうとドアを開けた。
途端、飛び込んで来たのは
「六本木！　それにむっちゃん！」
二人は思いっきり男達に体当たりする。その後ろから部長が駆け込んで来た。
「お嬢、大丈夫？」
「なんだ、お前ら！」
七瀬は顔を引きつらせた。
私は涙を拭う。
そうだ、私、何してるんだ。こんなに引き下がるなんて、どうかしてた。
私は立ち上がると、皆に気を取られ私に背を向けていた七瀬の後頭部を思いっきり蹴ってやった。
七瀬は立ち上がろうとしてた、カメラと照明にコメディみたいにぶつかり、三人もろとも倒れる。
「お嬢～」
部長とむっちゃんが私を抱き締めてくれた。
無茶苦茶温かい。
「ありがとう」
私は今度は温かい涙を零した。
「くそガキがぁ」

七瀬が立ち上がる。
「皐月先輩！」
六本木は私達を庇う様に立ち塞がったが、明らかに体格に差がある。
「大人をなめんなよ。どけ！　ガキが！」
顔を思いっきり歪ませた七瀬の拳が振り上げられた！　それは息を飲む余裕も与えず、六本木に振り下ろされる！
「六本木！」
私は思わず叫び、目を閉じた。部長とむっちゃんと三人で固まって身を縮こませる。
だけど、打音は鳴らなかった。
とても静かで、何の気配もない。恐る恐る目を開ける。するとそこにあった顔は
「百崎先生！」
なんと先生が七瀬の拳を掌で受け、寸止めしたのだ。
「全く同感だな。大人をなめるもんじゃない」
「なんだお前」
いきり立つ男達に、先生は冷静だ。
「顧問だ。説明も面倒だが、表の奴は……」
「片付きましたぁ」
亮太だ。亮太はわざと手を払いながら入って来て、私に親指を立てて見せた。
愕然とする七瀬。百崎先生は綺麗な笑みを七瀬にむけ、
「ちなみに私の手の中には警察にすぐ通じる携帯があるんだが」
そういって奴の手くびを固く握りしめたまま、自分の携帯を揺らして見せた。
「あ……」
七瀬は口をパクパクさせながら、その携帯とのされた自分の仲間を何度か見比べ、やがて無言で方を落とした。奴にはもう、なす術は残されていなかったのだ。

プライドが邪魔する恋　8

結局、七瀬のことは、通報しない代わりに、今後私には近付かない事を約束させることで一応の決着となった。
私達は呆然とする七瀬と気絶したままの男達を残し、なんだか小気味いい気持ちでマンションを後にし駐車場へ向かった。
「あ、この車」
部長とむっちゃんに抱えられた私が、駐車場でみた先生の車は、あの時に入って来た車だった。
車に乗り込むと、運転しながら、先生が経緯を説明し始めた。

まず、七瀬に疑問を持ってたむっちゃんが、私が叩き付けた名刺を持って、部長と学校に戻った。亮太に頼んで、名刺の会社を検索してもなかなかヒットしない。そこに、私を探してた六本木がコイケンを訪ねて来て、名刺の会社名にピンと来る。投稿や裏のＤＶＤで荒稼ぎしてる噂のグループ名に似ていた。それから、そのグループの販売品を検索したら、私と同じ様な読者モデルの子のが出て来て……。
六本木が部長に撮影所を聞いて、先に自転車で、コイケンメンバーは、先生に連絡して車でそれぞれ撮影所まで駆け付けてくれていたらしい。ただし、車がついたのは私が七瀬の車に乗せられた後だったみたいだが。
「六本木の機転に感謝しろよ」
先生はそう言って、何かを六本木に投げた。
携帯だ。
「掴み合った時、あいつのポケットに、自分の携帯を入れたんです」
六本木は褒められた事に、少し照れながらそう言った。
つまり、七瀬に自分の携帯を持たせ、ＧＰＳ機能で追跡してたと言うのだ。

「それでもマンションで追いつけなかったら、やばかったけどね」
部長が気遣い、私の背中をさすりながらそう言った。
メンバーは私達の後をつけ、しばらくの後に突入。
まず亮太と先生で角刈りを押さえ、六本木を先頭に私を助け出した。
今回、通報しなかったのは、私の今後を考えたのと、私と七瀬に繋がりがあり、警察沙汰にしても立件自体が難しそうだったからだそうだ。
まぁ、それでも万が一のことがあれば、すぐに警察に連絡を取るつもりではあったみたいだけど。
かなりの綱渡り状況だったのを知らされ、私は改めてゾッとした。
自分の身を抱き締める私を、むっちゃんが優しく支えてくれた。
「説教したいのはやまやまだが、話は明日だ。今日は帰って休め」
「とにかく無事で良かったな」
今回であの細身の先生が実は、合気道の有段者って判って、なんだか嬉しそうな亮太が振り返った。
私もさすがに今回ばかりは皆に素直に頭を下げた。
「ありがとう。みんな」
「じゃ、お前ら家まで送ってやる。案内しろ」
先生が馴染みのある景色の街に入った頃、そう言った。
私は凍り付く。
このままじゃ、皆に家がバレちゃう。あの貧乏アパートが私の家だって知られちゃうのだ。
でも、今は一人で外を歩きたくないし、どうしよう……。
「先生。僕と皐月先輩は撮影所で下ろして貰えませんか？　自転車そのままだし、先輩、忘れ物あるみたいで」
私は目をしばたたかせ六本木を見た。たぶん、私を庇ってくれてる。
「そうか？　しかし……」
渋る先生に
「先輩は、僕が責任を持って送りますから」

「先生！」
部長は少し勘違いをして、気を利かせたつもりで後押しした。先生は苦笑して
「わかった。だが、家についたら私の携帯に連絡するように」
そう行って、撮影所にハンドルを切った。

私は自転車を起こした六本木の隣りに立って、皆を見送った。
あんな事があったのに、遠足みたいに明るくて、本当、ノンキな連中だ。私はそんな仲間がいるのに嬉しくて、思わず微笑んだ。
「じゃ、行きましょうか」
六本木が自転車に跨がる。
自転車の二人乗りなんて、ダサくて今までした事がなかった。でも、今日の事に免じて乗ってやる。
「きゃっ」
思ったよりかなり不安定だ。一度倒れそうになり、私は六本木の背中にしがみついた。
「先輩、しっかり掴まっててください」
六本木が私の手をとり、自分の腰に回させる。不覚にも、一瞬ドキッとした。
「行きますよ」
自転車が私達を乗せ走り始めた。
最初こそ怖かったが、慣れてくると、意外に心地良い。夏の始まりの、少し柔らかい夜風がくすぐったい。
六本木は小さいとばかり思ってたけど、今は頼もしい背中に見えた。私はそっと、その背中に身を預けてみる。温かく、少し汗ばむその背中。甘酸っぱい気持ちが、胸の奥から自然に湧き上がって来た。
「先輩、一つお願いしていいですか？」
「なぁに？」
いつもより優しい私の声がした。

プライドが邪魔する恋　9

六本木はすぐには答えなかった。少しためらっているみたいだ。
背中から見る六本木の横顔は、やっぱりそばかすだらけだけど、まっすぐ前を見る目がなんだか格好良かった。
考えたら、六本木が勘づいたり、自転車で駆け付けたり、携帯をつけたりしなきゃ、私、今頃ただじゃ済まなかったんだ。それに、彼は先生や亮太みたいに武道が出来るわけでもないし、部長やむっちゃんと違って、まだ一年だ。なのに、あんなに必死で……。もしかして、六本木って本当に、私の事……。
「先輩」
「ん？」
「写真、一緒にとってもらっていいですか？」
私は拍子抜けた。
「そんな事でいいの？」
「いいんです。でも今、僕、カメラ持ち合わせてないので、ちょっと寄り道していいですか？」
六本木はハンドルを切った。大きく緩いカーブを描き、地元のスーパーの駐車場に入る。そのまま六本木は外に設置されてた証明写真のボックスの前に止まった。
「あの、ここで」
六本木は少し息が切れて上気した顔で、振り返った。
私は降りながら
「なに？　写真なんて明日でもいいじゃない。ゲーセンでプリクラだってあるし」
六本木は自転車を停めながら
「ゲーセンじゃ、この時間まずいでしょうし。その、どうしても今日がいいんです」
やけに真剣な六本木。私はちょっと妙だとも思ったけど、六本木

らしいか、なんて納得してしまった。
「わかった。じゃ、早くとりましょ」
ボックスの中は意外に狭い。私は早速入って、イスの調整をした。
見ると、六本木は言い出したくせに、まだ外でグズグズしている。
撮影のアナウンスの機械的な声が流れ始めた。
「何してるの。早く！」
私は六本木の腕を掴むと思いっきり引っ張った。体勢を崩し、間抜け面でな六本木。私はからかい半分でその首に腕を回した。
そこでカシャリ。
「何するんですか！　まだ、心の準備が……」
抗議する六本木とそれを笑う私。
二回目カシャリ。
「アハハ。六本木。もう一回撮ろう」
そんな感じで、私達は何回か撮った。
久しぶりに心から楽しんで、カメラに映った。そんな気がした。

どれも皆面白い写真になった。
私は写真の中野私達を見て、なんだか今まで感じた事のない、ふわふわした様な、少し息苦しい様な気持ちになっていた。それでいて勝手に笑みが零れる、不思議な感覚だ。
「これで、最後にしましょう」
六本木が急に落ち着いた声になった。
私の心臓がドクンと痛む。
真顔の六本木は、私の隣りに座り、戸惑いがちに私の肩に腕を回した。
一気に私の耳まで赤くなる。
最後の写真は、二人ともなんだか真っ赤な顔の、ぎこちない物になった。

帰り道は、なんだか寂しかった。家までの道がもっと長ければい

いのに。私は苦しくなる気持ちを誤魔化すように、話し続けた。
「ね、今度、写真のモデルしたげるよ」
「……いいっすね」
あまり乗り気じゃない返事に、ムッとする。
「何よ。いつもアンタが頼みに来てたんじゃない」
「嬉しいですよ」
六本木はそう言うと、自転車の速度を急に速めた。
「何よ！　危ないじゃない」
それにそんなんじゃ、すぐに家に着いちゃう。
「僕、今が一番幸せです～！」
六本木が叫んだ。私は目を丸くする。
「ばっかじゃないの！　恥ずかしいじゃない」
背中を叩く私を、六本木は大きな声で笑い飛ばした。
私は憎まれ口しか叩けなかったが、本当はすごく楽しかった。
でも、この時私は、本当の気持ちなんか、悔しくて認められなかった。気付き始めてたくせに。

六本木は私の家の前で私を下ろすと、ハッとしてポケットに手を突っ込んだ。
「これ、渡せなかった写真。妹さんに」
すっかり忘れてた。なんだ、写真って私を脅すためじゃなく、妹にだったんだ。
「渡しとく」
私は受け取ると、鞄に放りこんだ。
変な間が出来る。
私達は俯いた。沈黙が私達を見守っていた。

プライドが邪魔する恋　１０

沈黙。別に、いつもみたいに手を振ればいい。それだけなのだけど、どうしてもできなかった。
「先輩」
「はいっ」
呼ばれて、変にうわずった声が出てしまった。六本木は生意気にも、それを笑うと
「コイケンの人達、皆良いだから、隠す事ないと思いますよ」
優しい声だった。私は皆の顔を思い出す。
「そうかもね」
あんなに私の為に必死になってくれた仲間だもの。つまらない意地とか見栄なんて、必要ないのかもしれない。
「じゃ、僕、行きます」
六本木は私の右手を両手で包み込んだ。
しっかりと私を見つめる。
何か言わなきゃ。私から言うのは癪だけど、何か……。
「さよなら」
六本木は呟くように先に言った。
そして、まだ何も言えない私の手を離すと、自転車に乗りこんだ。
ドキドキに茫然とする私を振り返り。
「僕、先輩の毅然とした所、好きでした」
「六本木」
そしてペダルを勢いよく踏み込むと、風の様に夜の中へ消えて行ってしまった。
「あ」
見えなくなってから、ちゃんとお礼が言えてないのに気がついた。
そう、私はお礼が言いたかったんだ……たぶん。
「ま、いつでも言えるか。明日も学校あるんだし」

私は一つ息を吐くと、家に戻って行った。

布団に潜ってからも、何故か七瀬の一件より、六本木の事ばかり考えてた。

色々あったから、少しハイになってるのかも知れない。

「お姉ちゃん、明日調理実習でしょ。何か持って帰って来てね」

枕を並べる妹がそう言った。こいつは人の調理実習の日だけは、いつもチャッカリ把握している。

「はいはい」

貧乏人の知恵なんだろうか、少し哀しくなった。

そうか、明日は焼菓子だったはず。じゃ、それを持って、六本木にお礼に行けばいいんだ。

いつもはかったるい授業も、こうなると待ち遠しい。

私は渡した時の六本木の顔を想像しながら、眠りについた。

焼菓子は意外に苦戦した。元々今までまともに調理実習に参加してこなかったのが、つけの様に事如く失敗した。

いつもは仲の悪い女子達も、ようやく私のひたむきさに感銘を受けたのか、途中手伝ってもらい、何とか数個マドレーヌとカップケーキが完成した。

気がつけば、髪は粉だらけ、腕のあちこちに火傷で酷い有様だ。

それでも、私は満足だった。

これで喜ばなかったり、あまつさえマズいなんて言ったら、承知しないんだから。

私は六本木のリアクションを楽しみに、放課後、写真部に向かった。

歩きながら考える。

何て言って渡そう？　さりげなく？　それともお礼なんだから、少しは可愛い方がいいかな？　でも媚びてるみたいなのは嫌だし…

…って、焼菓子そのものがアウトだったらどうしよう。
そうこうしているうちに、写真部の部室の前に来た。
中に六本木がいる。
そう思うと鼓動が一気にテンポを上げ、緊張に頬が引き攣り始めた。
何よ、六本木くらいで、身構える事ないんだわ。あんな奴、私に声かけてもらえるだけで、光栄なはずだ。
そんな思い込みとは裏腹に、私の胸の高まりは落ち着きを失っていった。

プライドが邪魔する恋　１１

「六本木くんいますか、六本木くんいますか、六本木君いますか」
私は呪文の様に繰り返すと、「よし」と一つ気合をいれ鞄を持ち直し、ノックした。
「は～い」
六本木の声じゃない。やがて、写真部が顔を出した。
「あれっ。二年の二葉さん」
さすがに写真部は私を知ってるのか、その男子は意外そうな顔をした。
私はその視線に咳払いすると
「あの、六本木君、いますか？」
呪文を唱えた。部員はさらに怪訝な顔をする。
「いませんよ」
あれ？　肩透かしだ。
「じゃ、休み？」
私は少しガッカリした。しかし、部員はそれも首を横に振り。
「違いますよ。あいつ、昨日で転校したんです。二葉先輩には挨拶するって言ってたのに、聞いてませんか？」
私は耳を疑った。
嘘だ、そんなの、一言も……。
「そ、そうだっけ」
部員は頷き
「今朝早くの飛行機だって言ってました。だから僕達も見送りにいけなかったんです」
もう、いない？
私は半笑いで
「ごめんなさい。私、勘違いしてたみたい。じゃ」
そう部員に礼を言うと、ふらふらと壁に崩れる様に寄り掛かった。

六本木が……いない。信じられなかった。

私は居場所を探す様に校舎を彷徨い、気がついたらコイケンの部室にいた。中に入ると、先生と亮太以外の面子が揃ってた。

「ちょっと！　聞いたわよ。お嬢、大丈夫？」

乙女ちゃんが私に気がつき、かけてくる。私は無理に笑おうとした。

何よ、あんなストーカー一人いなくなったくらい。なんともないわ。そう、なんと……も……。

ボロボロボロ

大粒の涙が零れた。

「お嬢」

乙女ちゃんが、私を抱き締めてくれた。それは、優しくて大きくて……。

「わた……し。六本木にまだ、ありがとう……言えてない。七……瀬の事なんて、どうでもいいの。でも、私……頑張ったの。調理実習。六本、木が喜ぶ……と思って。粉だらけになっても、火傷しても。六本木に……ちゃんと……。私、馬鹿だ。プライドなん……か気にして、六本木に何、にも言えてない。何に、もつたえ、られなかったよぉ」

私は何がなんだかわからないくらいに、しゃくりあげながら話した。顔が涙でぐしゃぐしゃになって、マスカラが流れても、涙が止まりそうにはなかった。

「うん。うん」

乙女ちゃんは、全部黙って聞いてくれた。ちゃんと話せなくても、乙女ちゃんやコイケンメンバーには伝わってるって感じた。

乙女ちゃんは、全部話して少し落ち着いた私を座らせた。

部長やむっちゃんも、何故か泣いていた。

「何でアンタらが泣くのよ」
「知らないわよ」
部長は苦笑しながら涙を拭う。私は六本木にあげるつもりだった焼菓子を机に置いた。
「食べちゃおう。皆で」
「「うん」」
そして、私達は泣きながら食べた。泣きながら、美味しいって笑った。
本当に焼菓子は美味しかったんだけど、少ししょっぱかった。
全て食べ終わる頃、涙がようやく乾いた。涙と焼菓子にまみれたお互いの顔を見て、私達は笑った。

そして、私の恋が一つ終わったのだった。

あれからも、日常は意外に何も変わらない。変わった事と言えば……。
七瀬が私を避けてか、仕事を辞めたらしい。会う事は二度となかった。そして私は、前より少しだけ、見た目で人を判断するのを止め、少しだけ素直になる事を心掛ける様になった。今度、家にコイケンのメンバーを招待する予定だ。
後は、ストーカーの影が消えたくらい。
ふと、寂しさを感じて苦しくなったりする。そんな時、私は手帳の表紙の裏をめくるのだ。
そこには、真っ赤な顔したブサイクな私とはにかんだ六本木がいた。
そして私は苦笑する。

私達がいた時間が、消えるわけじゃない。
ありがとう。

私は写真の中の、プライドっていう茨を超えて私の目を覚ましてくれた、そばかすだらけの王子にそっと微笑んだ。

部長日誌

片思いにも色んな種類がある。
研究・分析のため、私達の事をまとめる。

一之瀬　弥生　（通称：部長）
外見的特徴：特になし
恋愛的特徴：仲良くはなるけど、いつも友達止まり。もしくは二番目。
理想の彼氏：優しくて、かっこよくて、浮気しない人

二葉　皐月　（通称：お嬢）
外見的特徴：美人・雑誌の読者モデルしてる
恋愛的特徴：プライドが邪魔して素直になれない
理想の彼氏：金持ち

三田　睦月　（通称：むっちゃん）
外見的特徴：大柄・コンプレックスあり
恋愛的特徴：自信がないので、積極的になれない
理想の彼氏：明るい人

四ッ谷　猛　（通称：乙女ちゃん）
外見的特徴：可愛い、でも男の子
恋愛的特徴：ゲイの為、ストイック
理想の彼氏：王子様

五木　亮太　（通称：亮太）
外見的特徴：女子に人気あり
恋愛的特徴：興味なし

理想の彼氏：謎

今回のまとめ

『プライドとは、時に女性を美しくし、時に女性を愚かにする』

・本命への気持ちには、意地を張らず、早めに気付き、認めた方が良い。

・後悔するくらいなら、時にはプライドを捨てる必要もある。

・格好悪くても良い。気持ちが本物なら。

追記

『失恋は人を成長させる』

部長日誌（後書き）

※次はオトメの『性別が壁になる恋』です
ゲイが主人公ですが片思いですので、ＢＬかどうかは読者様で判断していただけたら、と思います。曖昧な表現でスミマセン。

性別が壁になる恋　1

私は物心ついた時から、自分に違和感があった。
幼い頃はその違和感が何かわからなかったから良かったが、幼稚園に入る頃には遊びの違いに気付き、小学校に上がれば、すでに自分が異質なのに悩み始めていた。
他の男の子達との遊びが楽しくない。色もピンクや優しい色が好き。スカートをはいてみたい。
意識はしてた。自分は他の男の子と何かが違うって。でも、私にはそれを、自分でも素直に自分受け入れられない事情があった。
私の家は空手道場をしている。曾祖父の代からの道場だ。兄弟は私の他に四人いるが、みな女。父は息子がどうしても欲しくて、母は高齢で私を産んだ。そんなに体が丈夫じゃない母……。
私は父や母の期待に背くわけにはいかなかった。

小学校高学年で、私は初恋した。同じクラスの男子だった。足が早くて明るいクラスのムードメーカー。今思えば、顔はそんなに好みでもないが、笑った顔がとても格好良かった。
私はこの頃から、自分を殺す術も、自分を偽る術も、なんとなく身につけていたので、同じ集団にいては、暗くなるまで良く遊んだ。
いつもは外で元気に飛び回る。そんな子が、ある日、昼休み、ポツンと一人で教室にいた。
その、拗ねた横顔をハッキリ今でも思い出せる。
校庭のクラスメイト達を眺める目。そこから零れ落ちた一筋の涙。
私が自分に嘘がつけなくなった瞬間だった。

「……や。よ……が……。四ッ谷っ！」
「わたっ！」
私は急にした現実からの声に驚いて、顔を上げた瞬間、何かにぶ

つかった。
「はっはいぃ？」
まだ半分、記憶の世界で、頭がハッキリしない。
周りを見回す。私は高校二年になっていた。
どうやら、部室のロッカーでぼんやりしてしまったらしい。同じ部の十文字が、呆れ顔で、私の頭にぶつけたファイルを差し出した。
「大丈夫か？　無理しすぎじゃねぇの？」
私にファイルを渡すと、隣りに座る。私はファイルを手に、苦笑する。
十文字は自分と一緒で、高校から陸上を始めたよしみで仲がいい。
「お前、朝練にも出て、通常練習も一番最後だろ？　で、帰って空手って……無茶苦茶じゃん」
「平気だよ」
私は彼とは男口調で話す。彼に限らず、コイケンこと恋愛研究部以外では、こんな調子だ。
「親父と約束だから。インハイに今年出られなければ陸上部を辞める」
「で、陸上したいなら空手の稽古はさぼるな、だろ？　それが無茶苦茶だって」
心配は嬉しかった。
父が陸上部を辞めさせたくて無茶を言ってるのもわかってる。だけど、私はどうしても陸上部は辞めたくなかった。
「これ、何？」
まだ文句を言いたげな十文字に、私はわざと違う話題をふった。
十文字は、少し不服げに眉を寄せる。
「インハイ予選会の申し込み。出てないの、お前だけだからって、八木沼先輩が困ってたぞ」
ズキン
名前を聞くだけで、胸が痛んだ。
三年の八木沼　巧。

私が陸上部を無理してでも辞めたくない、唯一の理由。
尊敬していて、憧れで、好きでたまらない人。

性別が壁になる恋　2

私は十文字と別れ、駆け足で家路を急いだ。
コイケンのない日は、いつもロードワークを兼ねて約八キロの道を走って帰る。夏に向かうこの季節は、堤防沿いのコースが気持ち良い。季節を映す空が、藍色に染まり、まだ明るい河原を散歩やジョギングの人達が行き交う。
「インハイか……」
正直、楽しみだった。高校まで空手しか知らなかったけど、たまたま見た八木沼先輩の走りに憧れ陸上に入ってからは、本当にハマッてる。
口が裂けても言えないけど、格闘技は向いてない。型はまだいいんだけど、組み手で相手と打ち合うのがどうも……。それよりは自分と向き合い、自分と戦う陸上の方が向いている気がしてた。
「猛、今からか」
後ろから声がして、走りながら振り返った。自転車で追いついて来たのは、幼馴染みの亮太だ。
「うん。亮太も？」
亮太は頷いた。彼は小学生の時からうちの道場に通っている。彼とコイケン部長こと弥生と私は、小中高と一緒の腐れ縁だ。コイケンに誘ってくれたのも、もちろんこの二人だった。
「後ろ乗るか？　部活してきたんだろ？」
口数の少ない亮太は、無愛想で、ややもすると怖くて冷たい奴に思われがちだけど、人見知りなだけで、本当は優しい。
「いい。先に行って」
私は礼代わりに微笑むと、手を振った。
亮太は頷くと、自転車の速度を早め、あっと言う間に小さくなる。
私はその姿に、いつも感謝する。
亮太は本当の私を知る、唯一の男友達だった。

初恋の子が……両親の離婚で、どちらにも引き取られず、母方の親戚がいる田舎に転校するって事を知ったのは、その涙を見た翌日だった。

転校は急で、その週いっぱいでいなくなるという事だった。

私は混乱した。気持ちを否定しても、彼の涙が頭から消えない。友情だと思い込もうとしても、心の疼きが容赦なくそれを打ち砕く。

結局、彼を温かく見送ろうとする、亮太や弥生を含むクラスメイト達に反して、私は彼に冷たくするようになってしまっていた。

そして、気がつけば、彼と同じ教室にいられる最後の日になっていた。

昔のことを思い出しながら家に着くと、二回にある自分の部屋へ駆け上がり、急いで道着に着替えた。

必要な物しかない、寂しい私の部屋。本当は姉さん達の部屋みたいに、カーテンだって、ベッドシーツだって可愛くしたい。でも、出来るはずない。

この部屋は私の部屋であって、私の部屋じゃないんだ。

ふと、鏡に映った道着を着た自分を見た。私は思わず顔をしかめる。

これが……私。

１７８ある身長はまだ伸び続けてる。毎日の部活と稽古で鍛えられた筋肉に、最近角張ってきた顔が乗っかってる。筋肉がついても、線が全体的に細いのが唯一の救いだ。

毎日見る姿。大嫌いな姿。どうして、私は……。

「た～け～る～。早く道場行きなさい。今日はお祖父さまが待ってるわよ～」

母の声がした。

私は無意識に握り締めていた拳を解くと、男になり、返事した。

道場には同世代に混じって、小さな子ども達も稽古に来ていた。子ども達は、私を見ると嬉しそうに集まって来てくれた。
「たける。僕ね、今度水色になるんだ」
「あたしは、今日から新しい型なのよ」
キラキラ輝く目が羨ましい。私は空手をやってて、一度も楽しいなんて思った事なかった。
「猛。早く、柔軟せんか！　亮太！　組んでやれ。お前達も稽古に戻れ！」
祖父の雷声が轟き、子ども達は首を竦めた。私は苦笑してみせ、子ども達の頭を撫でると、ウィンクした。
「年寄りは頑固だね」
萎縮してた子ども達は、ふっと表情を和らげクスクス笑い出す。
「こらぁ！」
再びの雷鳴に、小さな子犬達ははしゃぎながら稽古に戻っていった。
「さ、始めるか」
私を待っていた亮太の声に、私は頷く。
私は生まれてきた義務を果たす為に、望みもしないのにスポーツをするのに恵まれた体を動かし始めた。

性別が壁になる恋　3

「ありがとうございました～」
皆、一様に挨拶をして道場から一人一人といなくなっていく。
私はそんな姿を見送りながら、ぼんやりといつも付きまとって離れることのない影のような思考を巡らせていた。
何の為に生まれて来たのだろう。私は誰で、私の人生ってなんなんだ？　と。
迷いは拳に伝わるらしい。こんな調子だから空手の大会に出ても、良くて入賞。型も準優勝止まりだ。祖父や父は、それを陸上部のせいだと思ってるし、もちろん快く思ってない。
でも、自分にはわかっていた。全部自分のせいなんだって事を。
何もかも中途半端な自分。
陸上も空手も打ち込めず、男にもなれず女でもなく、反抗するでもないのに、従わない。そんな自分の責任だ。
「猛。まだ陸上とやらをしてるのか？」
祖父と二人になった道場は広い。私は答えなかった。
「何のためだ？」
祖父の声が苛立つ。
私は小さく息を漏らすと振り返り祖父の顔を見た。気持ちを隠す為に、困った顔で笑う。
「何の為にって……。約束は守ってるんですから、別にいいじゃないですか」
上がった息に、汗が滴る。
何の為？　胸が疼く。あの人の影が脳裏に過ぎる。
たぶん、一生重なれないあの人の影。
生まれた時から、叶わないと決まってる想い。
そんなの自分が一番よく知っている。こんなのバカだってことも、無意味だって事も。

私はなんだか自分がおかしくなって自嘲の笑みを思わず浮かべた。
それを見た祖父はますます顔を険しくする。
「何がおかしい。へらへら、ふらふらと。中途半端だとは思わんのか！」
「……っ」
むかついた。
「お前はそうやって、のらりくらりとして、何ににも真剣に向き合わん。情けなくないのか！」
うるさい！　そんな事、言われなくたってっ！
そんな言葉が喉まで出て来た。でも私はギリッと言葉を噛み潰すように奥歯に力をこめた。
「言いたい事があるなら言ったらどうじゃ。男のくせに」
カッとした。その時だった。
「猛。電話よ～」
母の声がした。
子機を持って走ってきた母の姿に、ふと、緊張が解ける。
「誰？」
携帯にかけないなんて珍しい。
母はチラリと祖父を見てから
「陸上部の八木沼さんって人から……」
私の心臓は止まりそうな程、痛みを感じた。

なぜか初恋のことがまた思い出され、私は母のもとへ駆け寄りながら思いを馳せた。
初恋の子がこの街にいられる最後の日も、私は自分の気持ちの整理が出来ず、目も合わせられないままだった。
亮太達、仲が良かった連中が見送りに行くっていうのにも参加しなかった。
帰宅してからも、後悔なのか、寂しさなのかわからない気持ちで、押し潰されそうで、一人で部屋の机につっぷして泣いていた。

その時、電話が鳴った。
その子からだった。

私はあの時のことを重ねながら母から子機をひったくると、祖父の痛い視線を感じてない振りをして道場をでた。
受話器を持つ手が震え、それを止める為に、もう一方の手を重ねた。

緊張する。
何故、八木沼先輩が？　用事なら明日学校でもいいはずなのに。
私は恐る恐る電話に出る。
「はい。替わりました」
「四ッ谷か。こんな時間にすまん」
腰がくだけそうだった。
すぐ耳元で、あの八木沼先輩の声がしているのだ。私は逸る鼓動を落ち着かせる様に、目を閉じ深呼吸した。
「大丈夫です。何か？」
あぁ～っ。可愛げない返事をしてしまった！
昔から緊張すると、固まっちゃうんだ。せっかくの電話なのに！
「いや、学校じゃ、皆いるから、言いにくくて……」
私の鼓動が跳ね上がる。
それって……どういうことだろう。
「あの」
私は固唾をゴクリと飲んだ
よせばいいのに、期待は勝手に胸の中で膨らみ始めていた。

性別が壁になる恋　4

「すごいじゃない～」
弥生の弾んだ声に、私は赤らんだ頬を両手で抑えた。
「日曜にデートかぁ」
お嬢が冗談めかして私を指先でつつく。
そう。今、私はコイケンの定例報告で八木沼先輩の電話の事を話した所だ。どんなに忙しくても、私はこのミーティングを欠席した事はない。だって、ここが本当の私でいられる場所で、私の大切な友達がいるんだもの。
私は先輩の声を思い出しながら、胸の前で手を組んだ。
「デートじゃなくて、買い物。部の物品とかの補充よ」
「でも、直々に乙女ちゃんを指名したんでしょ」
今日はむっちゃんまで話に加わってくれる。
私はくすぐったい気持ちに弛む頬を抑えられない。
「これは……乙女がイチヌケかもな」
「やだぁ」
百崎先生まで。でも、嬉しいのは事実だ。休みの日まで先輩に会える。
どうして先輩が皆の前で言いづらかったのは、何故か聞けなかったけど……それだって、都合のいい様に考えてしまう。
「おしゃれしなきゃね。これから一緒に服見に行こうか？」
「ねぇ、どうせなら手、繋いじゃえば？」
「誘って来たのは、向こうだしね」
皆の矢継ぎ早の攻撃に、私はもう、すっかり舞い上がっちゃってた。
ふと、ずっと黙ってた亮太と目があった。
亮太は優しく頷いて
「頑張れよ」

「うん」
私は大きく頷く。
とにかく、こんなに幸せで、こんなに日曜を待ち遠しく思った事なんかなくて。
自分の恋心を始めて好きになれた。

コイケンの日は陸上部に出ないので、稽古のある六時まではフリーだ。
今日は特別と、弥生がミーティングを早々に切り上げてショッピングに行く事になった。
私はインハイ予選会の申し込みを出し忘れてたのを思い出し、その提出をしてから、と、皆とは校門で待ち合わせた。
待たせちゃいけない。そう思って駆け足で部室に飛び込む。
確か、ボックスに出しとけば良かったはずだ。
「お、四ッ谷。来てたのか」
申し込み用紙を置いた私の背後で声がした。
それは昨日電話で聞いた声。
「あ、え……ちはっス」
私は上気する顔を隠す様に、慌て八木沼先輩に頭を下げた。
胸が酷く乱れて、顔を上げられない。
「おいおい。挨拶大袈裟だって」
先輩は軽く私の肩を叩くと、手をそこに置いたまま後方のボックスを覗きこんだ。
「やっと出したかぁ。俺、結構お前に期待してるから、出なかったらどうしようかと思ってたんだ」
そういって笑うと、えくぼが出来る。間近でそのえくぼが笑ってて、私は固まってしまった。
先輩が、誰も他にいないのに、すっと声を落し
「急にごめんな。日曜」
耳打ちする。

私はゾクゾクして、首をすくめそうになるのを、辛うじて堪えた。
「いえ」
「あ、お前。コイケンに入ってたっけ」
急に曇る先輩の顔。先輩は肩に置いてた手を、自身の顎にあてた。
「お前、好きな奴いるのか？」
不安に揺れた先輩の瞳に映っているのは、誰でもない。私だ。
私はあまりの胸の苦しさに、目を閉じた。
もしかしたら、本当に先輩は私を……？
もし、夢なら覚めたくない。現実なら時を止めたい。
私は頷くと、
「います。……日曜、行きますから」
それ以上は言えなかった。何故か泣き出してしまいそうだ。
私は先輩の顔も見ずに頭を下げると、部室から逃げる様に走って出て行ってしまった。

性別が壁になる恋　5

コイケンの皆と待ち合わせの校門に走って行くと、皆手を振ってくれた。
私は抱えきれない想いを、やっとの思いで吐露するようにお嬢と弥生に抱き付いた。
「もう死にそ～」
「どうしたの？」
驚く皆に、私はお嬢達から離れると、そわそわしながら
「あのね……」
じっとなんかして話せない。
何がなんだかわからないくらいに興奮しちゃって、どう説明していいかもわからない。とにかく、私は歩きながら、最大限さっきの事を主観入れないように話した。
さすがの亮太の顔色も変わる。
「キャー！　それって……もう、決まりなんじゃない？」
弥生が私以上に興奮してはしゃぐ。お嬢も、私の首に腕を回し、私の頭をくしゃくしゃにした。
「もう～。すごい～。ってか、乙女ちゃん、告ったも同じじゃん」
私はもう、天にも昇りそうな気持ちだった。

私は買い物をしながら、仲間の顔をみた。
弥生は、小さい頃から優しくて面倒みがいい。だから、いつも友達にされちゃうんだけど、可愛いし、本当に良い子。もう少し、計算したり我儘になってもいいのにって思う。ちょっと甘えるのが下手なのかな。
お嬢は気高く、とにかく自分磨きにかけては尊敬する。でも、いつも強気を装うのは、本当は傷つきやすいから。それでも妥協しないで周りに媚びない生き方が羨ましい。

むっちゃんは、いつも自信なげに自分を隠してる。でも、私はむっちゃんは優しくて家庭的、頭もよく器用なんていい所たくさん知ってる。外見だって、少しの工夫で見違えるのにな。
亮太は……。私は知ってる。誰を好きなのか。もしかしたら、コイケンで片思いにかけては、一番のベテランかも。私は応援してるんだけどな。
「乙女ちゃん。また他人の事、考えてたでしょ」
弥生に言われて、私はハッとして目をパチクリした。
皆そんな私に苦笑する。
「こんな時くらい、自分の事、考えろよ」
亮太の言葉に、皆笑った。
私も自分の癖に笑った。
手には皆が選んでくれた、勝負服。
日曜はすぐそこまで来ていた。

日曜までの数日は、あんまり覚えてない。なんだかふわふわして、まさに地に足がついてない状態だ。陸上部で先輩と目があっても、以前以上に意識してしまって、生殺しだった。
先輩の綺麗な走りに思わずみとれる。
「相変わらず研究熱心だな」
十文字が並んでストレッチしながら話しかけてきた。
私は誤魔化す様にストレッチの体勢を変える。
「ん……。先輩のフォーム、綺麗だからね」
「教科書みたいだもんな」
十文字はそう言いながら、手首や足首を回す。
「でも、八木沼先輩。今回、予選会でないらしいぜ」
「え？」
私は耳を疑った。思わず動きを止め、十文字を見る。
「ほら、前の大会での怪我でさ、皆には言ってないけどそれで選手生命はダメになったんだって。みんなへの影響を考えて黙ってるけ

どさ。あ、これ、内緒な。顧問と先輩が話してんの立ち聞きして知ったことだからさ」
十文字は苦笑いしながら、体勢を変えて続けた。
「でもさ大学も推薦決まりって言われてたの、なくなるんだろうな。今から受験勉強って厳しいよな～」
私は言葉がすぐには出せなかった。
先輩がそんな事になってたなんて……。
「今、部に出てんのは、俺達後輩の為だってよ」
十文字はバンッと私の背中を叩く。
「特に、朝練まで組んでまでみてれお前には、期待してるみたいだから。俺は無理はして欲しくないけど、先輩の気持ちには応えなきゃな」
「……あぁ」
私はやっとの思いで頷くと、他の部員を見てる先輩を見た。
先輩はどんな気持ちなんだろう。ずっと続けてた陸上の夢が絶たれて、進学の道も閉ざされた。それでもグラウンドに立ち続けてるなんて。
私は先輩の背中を見つめながら考えていた。
私は何が出来る？　私はどうしたらいいのだろう？　と。

土曜の夜。緊張はもうピークで、夕飯も喉になかなか通らない。仮に通っても、味なんかわからなかった。
食卓には、結婚で出て行った上の二人の姉を除いては、皆つく事が我が家の決まり事だった。
「どうしたの？　ぼんやりして」
年が一番近い四番目姉が怪訝な顔をしてこちらをみていた。
「最近、様子が変だもんね」
「もしかして、恋煩いだったり。ほら、最近、たけの事見に来てる子いるじゃん」
そういったのは空手をやってる三番目の姉だ。

私はすました顔で
「僕、そんなの知らないし」
おかずを口に放りこんだ。
「たけってさ～。彼女とか作らないの？　結構もてるはずなんだけどなぁ」
「興味ない」
私はキッパリといって、味噌汁をすすった。
四番目の姉が三番目に耳打ちする。
「実はゲイだったりして……」
「っ！」
私は味噌汁を噴きそうになった。
「なんじゃ、それは」
まだまだ耳のいい祖父が聞く。
姉は少し悩んで
「ん～。おじいちゃんの時代で言うと、おカマかな」
「なんじゃ。気色の悪い」
祖父は顔をしかめた。
私の胸が痛んだ。
「そんな輩がいるから、世の中おかしくなるんじゃ」
私は表情に出さないように、残りをかき込む。
「くだらんな」
黙ってた父も呟いた。
私がその彼らの言う所の、気色悪く、世の中を乱し、くだらない、そんなものと知ったら、どうなるのだろう……。
たぶん祖父や父が極端な考えなんじゃない。まだ世の中は、大半の人がこんな感じだろう。
チラリと母をみた。母は細い体を震わせて笑っている。
ごめんなさい、私なんかが息子で。
私は箸を置くと黙って席を立った。

性別が壁になる恋　6

待ち合わせの時間の一時間も前についてしまった。
約束のショッピングセンターには、たくさんの親子連れやカップルが行き交う。
私は何度も時計を見たり、ガラスに映る自分をチェックしたりそわそわして、落ち着くなんて出来なかった。
試合以外で先輩に外で会うのは始めてだ。しかも、二人でなんて何を話したらいいんだろう。気まずくなったらどうしよう。それより、自分の格好は変じゃないだろうか。とにかく、嬉しかった。
昨日、コイケンの皆が選んでくれた真新しい服が、さらにテンションをあげてくれている。
「四ッ谷！」
時計を見ていた時だった。
不意にした声に私は顔をあげる。
先輩だ。私の胸は震えた。
先輩は人込みの向こうから走ってくる。
始めて見る、制服やジャージ以外の先輩は、すっごく格好良かった。
私は平静をなるべく装い頭を下げる。
先輩は私の傍まで来ると、先輩は時計を見上げた。
「あれ？　俺、時間間違えた？」
私は首を振る。約束の時間まではまだ十五分もある。先輩も早めに来てくれたのが、くすぐったかった。
「自分が早く来過ぎたんです」
「そっか。じゃ、俺も早く来て正解だったな」
そんなたわいもない会話をしながら、私達は目当てのスポーツショップに向かって歩き始めた。
すぐ傍にある手は遠いけど、私は幸せだった。

スポーツショップの店員は、常連の先輩を覚えていて、注文物品を先輩がオーダーする間、私はぶらぶらと店内を歩き回った。
陸上のシューズもそろそろ新しくして、予選会までに慣しておきたい。
シューズをいくつか手にとる。空手と違って、色んなバリエーションがある陸上のグッズは、見てるだけで楽しい。
「シューズか？」
背中を叩かれて、私は頷きながら振り向いた。
すぐ側であのえくぼが笑っている。
「予選会までに慣しておきたいなら、買うの今かなと思いまして」
私はあまりの近さにドキドキしながら答えた。
「座ってみろよ。俺が見てやる」
先輩がシューズを私から取り上げると、とんっとフィッティングのイスをさした。
私は真っ赤になって首を振る。そんな、私の足に先輩が触るなんてっ。
「い、いいです。自分で……」
「いいから」
先輩は私の腕を引っ張って強引に座らせると、丁寧に私の靴を脱がせた。
「……俺さ。お前が陸上部に来てくれて嬉しいよ」
俯いたまま先輩がそう言った。
新しいシューズを履かせるその手を、私は見つめる。
「先輩」
私は一度言い淀んだ。
一呼吸おき、どうしても気になっていたことを口にする。聞くのなら今しかないと思ったし、きかないではいられなかった。
「先輩、予選会出ないって本当ですか？」
先輩は黙って頷いた。
私を見上げた顔は、笑ってるのか泣いてるのか、私の胸は潰れそ

うだった。
「だから、辞める前に、お前と今日、会っときたかったんだ」
先輩が履かせて先輩の最近の言動をどう解釈したらいい？
私はまだ戸惑う気持ちを定められない。
先輩がはにかんだ。
「ちょうどいいじゃん。これにしたら？」
私は頷く。
先輩は、やっぱり丁寧に靴を脱がしてくれた。
触れた部分が熱い。
先輩、本当に好きになっていいんですか？
私は軽く目を閉じた。暗闇の向こうに見えるのは、やっぱり初恋の子とのあの出来事だった。

初恋の子からの電話は、やっぱり私に会いたいから、町を離れる前に荷物を積んだトラックで、家まで来るというものだった。
相手は私の返事を聞かずに電話をきってしまったから、私はまだ気持ちの整理が出来ないまま、外に出た。
本当に会うべきなのか？でも、これが最後になるかもしれないなら……。
私は何度も車の影に顔を上げては、忙しなく家の前をうろうろした。やっぱり、会うのはよそう。そう、玄関に戻りかけた時だった。
「たける～っ」
彼の声。私は角を曲がってきた軽トラから手を振る彼と目が合ってしまった。
もう、逃げちゃダメなんだと思った。

私がレジで会計を済ませると、先輩は店員に人懐っこい笑顔を向けて
「今度から、こいつが来るから。ヨロシクしてやってください」

そう言って、頭を下げた。どういう意味か判らず、私も倣って頭を下げる。
「わっ。もう、こんな時間！」
先輩がいきなり隣りで声を上げた。
「四ッ谷。行くぞ！」
「はい？」
頭の中が？だらけだ。
これから私がここに来るって？
そして、先輩は何に急いでるの？
先輩は、私の手をとると、どこかを目指して走り出した。
「わぁっ」
握られた手に、脈拍が一気に上昇する。
『手ぐらい繋いじゃえば？』
弥生の言葉が脳裏に甦る。
周りに人がいる、なんて、もう、どうでも良かった。先輩の手が、私を引っ張っていってくれてる。伝わるぬくもりが、二人で駆けるリズムが、言葉にならないくらい愛しい。
「先輩、自分……」
私の気持ちが口をついてでそう、そんな時だった。
先輩が手を上げた。
「悪ぃ。待たせたな」
「？」
誰かに送る合図。私は不思議に思い、先輩の横顔を見てからゆっくりとその視線を追った。
その先には、陸上部の三年のマネージャーと、知らない女の子が立っていた。

性別が壁になる恋　7

私の頭の中は混乱状態だった。
どういう事だろう？　先輩と二人じゃなかったの？　さっきの言葉はなんだったの？　それにこの子は誰？
見知らぬ女の子は、何だか恥ずかしそうに私をチラチラ見ては、マネージャーの九里麻美先輩の影に隠れてる。
予感がした。
「もぅ。十分遅刻〜」
明るい九里先輩の声に、先輩は笑い手を合わせて謝った。
「ごめん。つい……」
私はそんな、短く些細な二人のやりとりに胸騒ぎを覚えた。気持ちが冷えて行く。
「紹介するよ」
先輩の声に知らない子に視線を移す。
「俺の妹。お前と一度どうしても話してみたいって」
先輩に背中を押され、九里先輩の後ろから出て来たのは、小柄でまだおぼこい顔立ちの女の子。目元が先輩に似てるな。私は停止しかけてる思考でそんな事を考えた。
「あの、一年の八木沼凛です。その……」
「四ッ谷猛です」
私の中で静かに、何かの扉が閉じた。笑顔を顔に張り付ける。
「匠。ちゃんと話したの？」
「いや、それが……」
呼び捨てなんだ。
私は視線を落とした。私を置いてけぼりに、浮かれた声が行き交い始める。
「あのさ、今日呼んだのは、ま、凛はおまけなんだけど、次期部長をお前にって」

「おまけってひどい～」
「いいじゃない。おかげでダブルデートできるんだし」
三人の会話がぼんやり耳に響く。
私は笑いながら、冷えた心で現実を見つめ始めていた。
そうか、そう言う事。先輩が皆の前で言いにくかったのも、私を特別扱いしたのも、今日呼び出したのも、ただ妹に会わせ部長を譲るため。それ以上でもそれ以下でもなかったんだ。
全て私の勘違いだった。馬鹿みたいだ。一人で浮かれて、勝手に盛り上がって……。
ふと、ショーウィンドに映った自分を見た。
新品の服が、惨めに見えた。

それから、私達は四人でショッピングセンター内のシネマコンプレックスで映画を見た。
正直、作品すら覚えてない。心を封印して、外面だけになった私が見たものや聞いたものは、ただ私をすり抜けていく。
ランチにファーストフードの店に入った。
見慣れた店内も、外国みたいだ。
九里先輩と妹さんが席を離れた。
四人席。並んで座る先輩を、今は見たくなかった。
先輩が遠慮がちに口を開く。
「すまん。何か騙し打ちみたいになって。ちょっと言いにくくてさ」
「大丈夫です」
私は先輩に心配かけたくなくて、精一杯笑ってみせた。先輩は申し訳無さそうに眉尻を下げ
「凛はお前の道場にお前を見に行くくらいなんだ」
姉が言ってたのは彼女だったのか。私はストローに一度口つけた。
正直、彼女には悪いけど、私にはどうもしてあげられない。それより、私は……
「先輩、九里先輩と？」

一気に先輩の顔色が変わった。悔しいくらい可愛らしい顔で、にやけながら頭をかき、頷いた。
「怪我してへこんだ時に励ましてくれてさ。んで、あいつのおかげで、スポーツドクターの夢を見る様になって。医学部なんて今更なんだけど、浪人してでも一緒に目指そうって」
そう話す先輩の横顔は、私じゃない人を想っていても、素敵だった。
胸が音を立てて軋む。
「頑張って下さい」
先輩を支える場所には、もう他の人がとっくにいた。私の居場所なんて、なかった。
そう、始めから男の私の先輩への恋が叶うなんて、ありえない話し、単なる夢。現実はいつだって天使の顔で、私を天から地の底へ突き落とす。
先輩は、無意識に俯いていた私の背中に手を置いた。
「ごめん。お前、好きな人いたんだよな。妹の事は……」
置かれた手が優しくて、少しでも気を抜けば泣き出してしまいそうだった。
「もぅ、いいんです」
顔を上げた私は上手く笑えただろうか。先輩は少しホッとした顔をする。
「そうか？　なら、部長の事も妹の事も、ゆっくりでいいから、考えてくれないか」
痛い。心が限界だった。
好きな人が、他の人を勧める。叶わない想いがあるのに、その想いを忘れられない場所にいて欲しいと願ってる。
私の手は拳を作り震えていた。
逃げ出したい。もぅ、嫌だ。
「あの、自分は……」
私は何を言うつもりだったんだろう、私の視界がぼやけた。その

瞬間だった。
「アンタ！　いい加減にしなさいよ！」
バンッと机が叩き上げられる音がして、振り返る。
「お嬢！　皆！」
私は目を疑った。
なんとコイケンメンバーが、私達のすぐ後ろの六人席に揃っていたのだ。
「黙って聞いてりゃ、ずいぶん自分勝手な都合を押しつけるじゃないの」
お嬢が、今にも掴みかからん勢いでソファに足をかけ、先輩を睨みつけていた。
「なんだ？　一体」
目を白黒させる先輩。私もパニクって亮太を見る。亮太は手を合わせて謝るジェスチャーをしていた。
「お嬢、抑えて」
むっちゃんが興奮するお嬢を引き摺り下ろす。
「……行こう」
腕を引っ張られ、見ると弥生が固い表情で傍にいた。
私は一つ溜め息をつくと
「すみません。自分は失礼します」
先輩に頭を下げた。
そしてまだ唖然とする先輩を残し、九里先輩にも妹さんにも会わずに、私は逃げ出した。

店を出ると、私は堪らず皆を振り返り、声を荒げた。
「どうしてここにいるの？」
皆、顔を見合わす。
「それは、乙女ちゃんが心配だったから」
弥生がバツの悪そうな顔をする。
私の喉の奥の辺りに、何か重い物が引っ掛かってる様な気持ちだ

った。
握った拳に力がこもる。
皆、本当に私を思ってくれてたんだと思う。様子を見につけてたんだ。私はそれに気がつかないくらいに、浮かれてた。惨めだ。
ぎゅっと目を瞑る。
出来る限り声を抑える。みんなの気持ちはわかる、でも心は今ささくれて……。
「じゃ、みんな知ってるよね。報告しなくても、わかってるよね」
私の笑顔は奇妙に歪む。卑屈で自虐的な顔だ。
「乙女ちゃ……」
伸ばされたお嬢の手を、私は堪らず振り払った。
「ごめん。今、無理。今日はほっといて」
「でも」
「ほっといてっつってんの！」
思わず出た怒鳴り声。
もう何もかも嫌だ。
私はいつからか流れてた涙を拭うと、コイケンの仲間達にも背を向け、その場から、残った気力全てで走り去った。
もう、消えてしまいたかった。

性別が壁になる恋　8

家に着いた私は、ただいまも言わないで玄関に入った。
背中で祖父が稽古に呼ぶ声がしたが、そんなのを聞き入れる余裕なんて、今は微塵もない。
私はその声を振り切る様に階段を駆け上がり、自室に飛び込むと、ベッドに力尽きて倒れ込んだ。枕に顔を思いっきり押しつける。
こんな時でさえ、思いっきり泣くことも出来ない。涙を、声にできなち叫びを、みんな枕に押し込む。
こんな気持ち、何て言ったらいいんだろう。どうしたら、この気持ちは消えてくれるんだろう。
胸を内側からかきむしる、この狂おしくて、虚しい気持ち。
ふと、手元にあった袋に目をやる。先輩が選んでくれたシューズだ。
私は唇を強く噛むと、それを思いっきり投げた。
その塊は鏡に当たる。鏡は派手な音を立てて割れた。そこに映されてた私が醜く歪む。
「どうした？」
ノック音がして、父の声がした。吐き気がしてきた。
「ほっといて」
吠える私。
一人になる時間くらい自由にさせて欲しい。いつも、いつも、私を束縛して。私は父や祖父の人形じゃないんだ。無神経にも程があるだろうが！
「何があったか知らんが。帰って来たなら道場に来い。最近、お前、身が入ってな……」
「ほっといてっつってんだよ！」
私はもう一度叫んだ。
扉がゆっくり開く。怒りを静かに浮かべた父が、私を見据えてい

た。
「なんだ。その口のきき方は」
そしてチラリと鏡をわったシューズを見る。
「なんだ。かけっこはもう辞めるのか。なら、ちょうどいい。今度の大会……」
父はいつでも空手、空手。もう、うんざりだ。
私なんかどうでもいいんだ。空手の優秀な後継者にしか興味がないんだ。
全く羨ましい。何にも悩まないで、馬鹿の一つ覚えみたいに空手に人生捧げれて。
「僕は、親父と違う」
「なに？」
父の太い眉が跳ね上がった。
もう、どうでもいい。
私はいつもなら怖くて逸らしてしまう、父の怒りの目を睨みつけた。
「空手、空手って。僕はそんな馬鹿みたいに空手ばっか出来ない」
「お前」
父の顔が赤くなり、奥歯が軋む音がする。
私はそれでも目をそらさない。
「空手なんて嫌いだった。ずっとずっとね。もう、僕は空手を辞める。だから出て行って！」
「何ぃ！　馬鹿者が！」
父の目に強い怒気が宿る。怒声が空気を震わせる。大きく岩の様な拳がひらめいた。
私は次の瞬間、強い衝撃に意識をさらわれ、暗い闇へと落ちた。
私は小学生に戻っていた。
小学生に戻って、家の前であのトラックを待っていた。

イケナイ
スグ、家ニ引キ換エシテ

想いとちぐはぐに、私は私を呼ぶ声に緊張した面持ちで振り返った。
初恋の子が手を振っている。

ダメ

初恋の子は数メートル先で止まったトラックから飛び下りると、私に駆け寄る。
「良かった。お前、怒ってるみたいだったからさ。俺、お前とこんなんで終わるの嫌だし」

違ウ
勘違イ　シチャ　ダメ

私はまだ小さかった手を握り締め、息を飲む。
全力疾走の時みたいな鼓動に、落ち着かなくなる。

ヤメテ
言ッチャ　ダメ！
ダメ　ダメ　ダメ

私は喉が擦り切れそうな声で叫ぶ。だけど、小学生の私には全く届かない。
頬を桃色に染めた幼い私は、俯く。ゆっくり唇が動き出す。

イヤダ
見タク　ナイ

「僕も、嫌だよ。離れるの。だって……」
ヤメテーーーッ！！
「好きだから」
私は呟く。相手が唖然とする。
『好き』の意味が、友情では無い事を、相手もすぐに察したのだろう。
沈黙が二人に重たくのしかかった。
私はこの時の言葉を、覚えている。いや、忘れたくても忘れられない。
「なんだよ。気持ち悪ぃな」
顔を上げた私が見たのは、酷く傷ついた相手の顔だった。
「あ…ごめ…」
伸ばした手が払われる。相手は泣きそうな顔になり
「こんななら、会いにこなければ良かった」
そういって背中を向けた。
胸にある、相手を傷つけた後悔と、あの抉る様な痛みが鮮明に甦る。
小さくなる初恋の背中に、私はもう何も出来なかった。そう何にも……。
目覚めた時、私の頬は涙で濡れていた。
でも、それは自分の涙じゃなかった。
「母さん」
「猛、大丈夫？」

冷えた母の指が、私の頬を撫でた。私はゆっくりと身を起こす。動かすと痛む顎の辺り。たぶん、父の一発が避ける事すらしなかった私の横っ面に、綺麗にヒットしたのだろう。そして、気を失ったのだ。

「痛い所ない？」

私の顔を覗きこむ母に、私は痛みを見せない様に微笑んだ。

「父さんは？」

母は黙って首を横に振った。

怒りは解けてないらしい。

母が私の手を握る。

「空手、本当に辞めるの？」

私は視線を落として黙り込んだ。

正直、今は何もかもに嫌気がさしていた。

「猛、お母さんはね、猛が嫌なら辞めて良いと思う」

「え？」

私は意外な言葉に母を凝視した。

「猛は優しい子だから、いつも人の事ばかりで……。空手を始めたのも、お父さんやお祖父さまを喜ばす為だったのよね？」

私は見透かされてる様で、頷きもしないで視線を落とした。

「でも、もし猛が空手を今でも自分の為に好きになれてないなら、もう十分よ」

母はしっかりと私の手を握り直す。

「お父さんもお祖父さまも、十分あなたで夢を見れたわ。あなたはちゃんと稽古に付き合って、成績も残した。これからは、あなたの進みたい道を行きなさい」

母の温かさが、ひび割れた胸に染みる。

「あなたが空手しなくても、例え犯罪者やお化けになっちゃって、お母さんはあなたの味方よ」

ポンっと母は私の頭に手を置いた。

「だって、あなたは私の子ども。それは変わらないんですもの」

そう、私を撫でる母の手は、細く優しく温かい。それでも、本当の事を話せない自分に、私は情けなくなった。

性別が壁になる恋　9

その夜はグッタリ疲れてるのに、全く眠れなかった。
時間の流れが、重い空気にまとわりついて、遅々として進まない。
別に朝を待ってたわけじゃないけど、一人の暗闇は苦しすぎた。
ふと目をやった携帯は、誰かからの着信を点滅ランプでうるさく伝えてたけど、私は見ない様にした。
闇に溶けてしまいたかった。

私の夜は三日続いた。
学校にも、道場にも、グラウンドにも、私は足を向けなかった。
けど、そんな事いつまでも続けられない。
朝は必ずやって来る。忌々しいくらいの明るさを引き連れて。
微かに蝉の声がした。
もう、そんな季節なんだ……。
頻回に代わる代わる訪れる父や祖父の怒声も、聞き飽きた。
四日目の朝になると、やはり学校には行きたくなかったけど、家にはもっといたくなくなっていた。
私はまだ薄暗いうちに家を出た。習慣とは哀しいもので、いつもの様に川沿いをランニングしながら学校を目指す。
自分の進みたい道……？　何を今更。私が空手を辞めたら道場はどうするの？　陸上だって、部長なんて、無理な期待だよ。そんなの、中学から陸上やってる奴等が黙っちゃいない。なにより、私にはもう、陸上を続ける理由自体ががない。
「猛」
呼ばれて顔を上げた。
「あ、亮太」
そこにはポケットに両手を突っ込み、こちらをまっすぐ見ている亮太の姿があった。

私は亮太の傍を通り過ぎようかとも考えたけど、あまりに亮太が真正面に立って目をそらさないので、そう言う訳にもいかなくなった。徐々に足取りを弛め、亮太の前で止まる。
「よぉ」
「……おはよ」
気まずい。私は自分の足下を見つめた。
「ほら」
亮太は冷たい缶コーヒーを私に突き付けると、自分は坂になってる草むらに腰を下ろした。
私は、少しの間それを弄んだが、仕方なくて隣りに座る。
「三日もこもって、気がすんだか？」
亮太は朝日に輝く水面を見つめながら呟く様に言った。
私は開けて無い缶を手元で揺らしながら
「……空手も、陸上も辞める」
亮太が息を飲むのがわかった。
「そうか」
溜め息混じりの声。
「お前にとって、どっちも簡単に捨てられるものだったって事か」
亮太の言葉が深く胸に差し込んだ。
「残念だよ」
亮太はガッカリした様子で視線を下げた。
私はなんだか居心地の悪さを感じて、苛ついてくる。
「悪い？　今まで、私、皆の為に頑張って来たじゃない。もう、好きにしたっていいでしょ？」
思わず荒げてしまった声に、亮太は眉をひそめ
「人の為？　自分の為だろ」
そっけなく返した。私の心が動揺する。
「何言って……」
「そうだろ。確かにお前は優しい」
亮太は私の瞳の奥を探る。私は堪らず目をそらす。

「でも、自分を後回しにして皆の事を考えるのは、そのせいだけか？」
ズキン
閉じてた扉が軋み始める。
「お前は……」
亮太の目は、私を逃がさない。
「自分と向き合うのが怖いんだろ」
亮太の言葉は、真実をついていた。
私はその言葉に身を固くする。亮太は、私が何も言わないのにイライラしてきた様だった。
「お前はさ、色々凄く気にしてる。それは仕方ないけどさ、それって……」
口下手な亮太は一度言葉を切る。手元の草を握り締めてる亮太の手が見えた。
私も、怒りとは違う、苛立ちでもない、ただみぞおちの辺りが熱くて、胃が重くなるような不快な感覚がしていた。
亮太は草を引き千切った。
「だから、お前に偏見一番持ってるのは、お前自身なんじゃねぇの？　好きなら仕方ないじゃん。ちゃんと、好きなものは好き。嫌なものは嫌って……」
そんなの正論だ。ただの理屈だ。そんな事、わかってる！
「亮太にはわかんないよ！」
これ以上聞けなかった。
確かに亮太の言葉は正しい。でも……。でもっ！　初恋の痛みが、家族の顔が去来しては胸の奥を抉って行く。
私は体の中にうねるどす黒いものをぶつける様に、亮太に掴みかかり、声を上げた。
「じゃあ何？　先輩にも親にも、私はゲイです。空手は家で居場所を作るために、陸上部は先輩の傍にいるためにしてましたって言えばいいの？」

私の目からは涙が流れるのに、顔は自嘲の笑みが浮かんでいた。
あぁ、それもいいかも知れない。そうやって、一人清々して、皆を傷つけて、自分は男なのに男しか好きになれないって、声高に言えば、今より楽かもしれない。
でも……でも……。
ぎゅっと目を瞑った。
胸に突き刺さる痛みが、私を許そうとはしていない。
「猛……」
ポンっと、私の頭に亮太の大きな手が乗った。
「ごめん。思いつめさせるつもりはないんだ。ただ、俺が言いたいのは、そぅ言う事じゃなくて」
亮太は自身の襟首を掴んだ私の手をそっと外すと
「もっと、自分で自分に優しくしてほしいんだよ」
そして柔らかく微笑む。
「自信持て。お前がどんな奴か俺は知ってる。でも、俺はお前の友達だ。コイケンの皆だってそうだ」
私はまだ、亮太の意図が判らず、彼を見つめた。
亮太は気恥ずかしそうに視線を外す。
「ありのままでも、お前はたくさんの奴に認められる。だから、もう少し、自由になれって事」
まだ、判然としない私を余所に、亮太は立ち上がった。
「あ〜っ。俺は色々話すのは好かん。とにかく、本当にお前は陸上を辞めたいのか、空手が嫌いなのか、投げやりにならないでちゃんと考えろ。あと」
亮太は私を見下ろし、ぼそっと呟いた。
「そんなに好きな相手なんだったら、勝手に終わらしていいのかよ」
ぎゅっと胸が締め付けられた。亮太はそんな私を見ない様に顔を上げる。
「俺はお前のダチだ。これまでも、これからも」
「……うん」

私は小さく頷く。
そうだ、亮太は昔から正論を貫く。そのくせ悔しいくらい、イレギュラーな私を理解して受け入れてくれるんだ。
「今日のミーティング、来いよ」
亮太はそう言うと、土手を駆け上がり、走って行ってしまった。
残された私は、戸惑いの中に、昨日までとは違う何かを感じていた。

性別が壁になる恋　１０

私は亮太を見送ってから、あの日から閉じたままになっていた携帯を開いてみた。

コイケンの皆からのメールに着信。十文字を始めに、陸上部の仲間からのメール。道場で知り合った人達の留守電。先輩からのメールも毎日来ていた。

「……何、これ」

私は携帯を握り締めると、顔を伏せた。

何を、私は一人で不幸ぶってたんだ。好きな人に彼女がいたくらいで。

私はこんなにも、幸せじゃないか。

もちろん、本当の私を知れば、去って行く人もいるかもしれない。けど、この人達といる私だって、やっぱり私なんだ。

じっと、自分の掌を見つめてみた。

私は、本当に空手が嫌だった？　一心不乱に稽古してる時、試合で相手と真剣に挑み合えた時、父や祖父の笑顔の為じゃなく、自分の為に心が震えていたんじゃないか？

陸上はどうだ？

今度は足下に視線を移す。

確かにきっかけは先輩だった。でも、今はどうだ？　グラウンドを駆け抜ける時。自分に勝って、記録を伸ばせた時、先輩の事は頭にあったか？

「……先輩」

私は顔を上げた。

自分に向き合うのは、怖いし難しい。でも、私は一人じゃないんだ。

夏草の香りを携えた風は、明るい空に吹き抜けて行った。

結局、学校には遅刻ギリギリに着いたんだけど、色々考えたくて、保健室に逃げた。
「オトメか、珍しいな」
百崎先生はそうは言ったけど、何も聞かないで休ませてくれた。
たぶん事実は皆から聞いてる。
ベッドに入ると、久しぶりに夢も見ないくらいに良く眠れた。
深く深く、心地良い眠り。
目覚めたら、もう四時間目の終わりの頃で驚いた。
「良く眠れたみたいだな」
「はい」
百崎先生は身を起こした私に、良く冷えたお茶を渡してくれた。
自身もベッドに腰掛けて、お茶を飲む。
先生は、美人で頭も良くて、合気道にも通じてるって聞いていた。
そんな先生にも、まだ話してくれないが、上手くいかない恋があるらしい。コイケン発足の時に先生自身が言ってた。だから、顧問と言っても、皆と一緒だって、笑った先生を覚えてる。
「乙女、今、私の事考えてただろ」
「あ」
顔を赤くして俯く私を先生は笑った。
「お前も不器用なんだな。お前はお前らしく生きればいい」
先生は私の頭を撫でた。
「どんな道も、後悔も苦しさも失敗も待ってる。越えなきゃいけない壁も出て来る。それは誰だろうとだ」
「じゃ、どうしたら？」
不安な声の私に微笑んだ先生は、美しく強さを感じた。
「正解も間違いもないなら、自分で選ぶ事だ。自分らしい道をな」
私の道。越えなきゃいけない壁。
私は押し黙った。
「ま、難しく考えんでもいい。優しさも不器用さもみんな含めてお前だ。自分が一番笑ってられる道を探してみろ」

「はい」
先生は肩をポンと軽く、押すように叩いた。
「休みたくなったら、いつでもおいで。お茶くらいしか出してやれんがな」
そして先生はイタズラっぽくウィンクした。
私は久しぶりに安らかな気持ちになって、微笑み頷いた。

昼休みになってから、私は教室に足をむけず、購買でパンと牛乳を買ってグラウンドに向かった。
グラウンドでは、何人かがサッカーをしてた。私はぼんやりそれを眺めながらパンを頬張る。
足が走りたがっていた。体が動きたがってた。
そうか、ちゃんと自分に目を向けて、耳を傾ければ、やりたい事はわかって来るんだ。
見たら、サッカーをしてる中に十文字がいた。私は手を振ると、誰かがドリブルしてたボールを奪い取る。良く見ると、皆クラスメイトだ。私はリフティングしながら
「入れてくれないか？」
そんな私にポカンとする十文字。
「いいけど……お前、学校来てたのかってか、もう大丈夫なのか？」
「心配かけたね。もう大丈夫」
私はよっとボールを高く上げると、頭に乗せた。そしてバランスを取りながら
「答えは出たからね～」
「は？」
首を捻る十文字に、私は笑うと、足下にボールを戻した。
「さ、始めよ」
私はクラスメイトにパスすると走り出した。
無心にボールを追いかけ走ってると、体が喜んでるのが泣きたいくらいにわかった。

私はやっぱり……。
「おい。四ッ谷。そんなに上手いならサッカー部に来ないか？」
昼休み終了のベルに、教室にかけこみながら、サッカー部のクラスメイトが声をかけてきた。
でも、私はもう迷わない。
今、進みたい道も、越えたい壁も。
「ごめん。今はやりたい事あるから」
不安はなくなってはくれないけど、私は進む事を選んだ。
私は放課後を待って、陸上部に行く事にした。
越えたい壁を越える為に。

決意は固かったけど、緊張と不安は消えはしない。時間が迫るに連れ、逃出したい衝動が何度も襲って来た。でも……。
私は陸上部の部室の前にやって来た。
入ると、何人かいて、私の欠席を心配した声をかけてくれたが、先輩の姿は無かった。
少しホッとしたような、残念な様な、そんな気持ちのまま、グラウンドに探しに行く。
いた。
グラウンドを臨むベンチに先輩は一人座って、皆の練習を見たり、何か手元のノートに書き込んでいた。
夏を思わせる、強い陽射しが、先輩の影を濃く地面に焼き付けていた。
震える鼓動、渇く喉、踏み出せない足。それは恐怖、それは不安、それは……全部私の弱さだ。
そっと息をつくと、先輩の後ろ姿に声をかけた。
「八木沼先輩」
「四ッ谷！？」
振り返った先輩は、驚き、すぐに表情を崩し立ち上がった。
ベンチを飛び越えると、私の肩を叩く。

「心配したぞ。あれから連絡も取れないし、三日も休むし」
大好きな先輩の声。私の中で初恋の記憶が甦る。チリッと静電気の様な痛みがした。
まだ間に合うんじゃないか？　いや、今じゃなきゃダメだ！
私は決めたのだから。
しばしの逡巡。熱い風が吹き抜けた。
私は顔をあげるとこう言い放った。
「先輩、話があります」
賽は投げられたのだ。

性別が壁になる恋　１１

私達はグラウンドの隅の大銀杏の木の下まで来た。
遠くで練習する声が聞こえる。大銀杏はたくましく枝葉を広げ、秋には鮮やかな黄色になる葉も今は瑞々しい緑で、優しい木陰を作ってくれていた。
先に会話の口火を切ったのは、先輩だった。
「四ッ谷。あれから俺、反省したよ。すまん。やっぱり、あんなやり方ないよな」
私はすまなそうな先輩の顔に、首を振った。不思議と、さっきまでの恐怖はなくなっていた。
「いいんです。たぶん、あぁでもしないと、自分がどちらの話も聞く前に断ると思われたんでしょ？」
先輩は私の指摘に鼻の頭をかいて、頷いた。そんな表情も大好きだ。
私は静かに目を閉じる。
『なんだよ、気持ち悪ぃな』
耳元で初恋の幻聴が囁く。でも、私はその過去から一歩踏み出すって決めたから、もう怖くはない。
「すみません。やっぱり、どちらもお請け出来ません」
「どうして」
私は先輩を見つめる。先輩は私を見つめてる。
ここにいる自分から目はそらさない。
私はそらす生き方より、向かい合う生き方を選んだのだ。
「私は、陸上が好きです。でも、同じくらい空手も好きなんです。だから部長は出来ません。妹さんの事は……」
世界中の音が消えた。聞こえるのは、私の臆病な鼓動だけ。
『気持ち悪ぃな』
デジャヴする過去に私は唾を飲み込んだ。何とか、乾いた唇を動

かす。
「好きな人が諦められないんです。だから、お付き合い出来ません」
大銀杏の葉が一斉に揺れた。
葉ずれの音、木洩れ日、熱を捨てない風そして、ここに私がいる。
「私は、私が好きなのは、先輩、あなたです」
大銀杏は私の告白を、ただじっと見守っていた。
沈黙は一瞬だったのかもしれない。
ただ、私には酷く長く感じた。
先輩は私を凝視してから、力無く大銀杏の幹に背を預け、陽を避ける様に手の甲を自身の額にあて目を閉じた。
その横顔は、怒ってるようにも、悩んでるようにも見えて、私は息苦しさを覚えた。
眩し過ぎて直視出来ない太陽の様に、先輩の光だけを感じて見なければ、その温かさだけに触れていられたのかもしれない。
その光に触れたいと思い始めた時から、私の心は燃え始めてしまったのだ。
それでも構わない、後悔はないと今なら断言できる。灰になっても、この気持ちは私の偽りない気持ちなんだから。
ただ、先輩を傷つけてしまったのかもしれない。それだけが心配だった。
『こんななら、会いにこなければ良かった』
ごめんなさい、私なんかが好きになって。
「四ッ谷」
先輩の声がした。少し掠れていた。
「はい」
私はいつしか落としていた視線を上げる。先輩は、一つ深い息をついた。
「ごめん。俺、全然気がつかなくて。正直、びっくりした」
「はい」
私は泣き出さない様に、拳を握り締める。先輩は戸惑いを隠さな

い代わりに、微笑んだ。
「辛い……思いをさせたんだろうな。あの日、コイケンの奴等がいた事も納得いったよ。けど」
先輩は一度唇を噛んだ。
「ごめん。俺、今は九里が大切だから。お前には応えられない」
胸が痛んだ。答えはとっくにわかってたのに。
私はぎゅっと目を瞑る。その強張った肩に、先輩の手が添えられた。
すぐ傍で先輩のいつもの優しい声がする。
「でも、ありがとう。陸上、また出て来いよ。皆、いや俺はお前を待ってるから」
肩の重みが消え、先輩が遠ざかる音がする。
私はゆっくり目を開け、涙が零れないように天を見上げた。
手を伸ばしても届かない青が、緑の向こうに鮮やかに見えた。

失恋は慣れっこだと思っていた。いつも、こっそり始まり、密かに終わってた。
もしかしてちゃんと失恋できたのは、あの初恋以来だったかもしれない。
痛みはその分深いけど、後悔は全くなかった。
「さて」
結局、すぐに全てを周りに話せる様になったわけじゃない。
たぶん、以前と変わらず陸上も空手もコイケンも続けて行く。
何にも変わってないと言えば、それまでだ。
だから、壁は越えられたのかわからないけど……。
私はぐっと背伸びした。
前に進んで行ける。そんな気がした。

部長日誌

恋愛におけるマイノリティは、大きな壁かもしれない。だけど、それでその人そのものが否定される理由にはならない。

冷静になれば、自分が悲観する程不幸じゃなかったり、意外に幸せなのに気がつく。

恋は逃げない
逃げてるのは弱い気持ちの方

どんな壁も、本人が自分で越えないと意味がない。

逃げても、避けても、立ち止まっても、違う道を見つけても、それが自分で選んだ道なら、それは間違いじゃない。

自分を見つめれば
答えが見えて来る時もある

追記
失恋は人を強くする

コンプレックスが偽る恋　1

『人は外見じゃない。内面だ』

何て世の中の人は言うけれど、ブスより美人が得するに決まってる。

綺麗だと、周りも気分良くなるし、簡単に内面への良いイメージも作れる。それだけで魅力的で、興味の対象になりえる。

けど、醜くければそれだけで不快な思いをさせてしまう。それに、みんな、外見がアウトなら内面まで深く知りたいなんて思わないでしょ？

第一印象が悪ければ、もっとハンディ。いわれも無い、偏見のレッテルを貼られ、色眼鏡を通してしか見られなくなってしまう。

どれだけ自分磨きに努力したって、結局は物笑いの種だ。

最終的にブサイクの辿る道はたった三つ。

開き直って、笑い者になるか、開き直って我が道を行くか、諦めて身を隠すか。

私は、我が道を行ったり笑われても平気な程強くなかった。だから私はいつからか自分ををひた隠しにする様になったのだ。

夏休みはつまらなかった。

コイケンのみんなは、私以外はみんな他の部活に入ってる。部長でさえ、ボランティア部に入ってて、つまりは、夏休みはみんな忙しかった。

部長は老人ホームや街の清掃活動。お嬢は最近、正式に事務所と契約して夏休みはレッスンや撮影で、夢に向かって突っ走ってる。乙女ちゃんは、陸上と空手の掛け持ちに走り回っていて、この間、注目選手とかで取材まで受けてた。亮太は、やっぱり空手とバイト。何でもお金を貯めたいとか。実は亮太の事は私も良く分からない。

「睦月。暇なら店手伝いなさい～」
一階から母の声。
「は～い」
私は気怠い体を机から引き剥がした。
うちは米屋兼酒屋を営んでいる。最近大型スーパーに押され気味だけど、地元密着でどんな小さなものでも配達するうちは、経営はそんなに苦しくない。
店に出ると、母がお得意さんの接客をしていた。
背中の肉が醜い見事な中年体型。
「あぁ、睦月。挨拶しな」
振り返った母の顔も嫌い。化粧がまるで無い日に焼けた黒い顔には団子っ鼻に小さい一重の目乗っかってる。美しさのカケラもない。
「いやぁ、ますますソックリになってきたなぁ」
声の大きいこのお得意さんは苦手だ。
だって、本当のことをオブラートに包みもせずに声にするんだもの。そう、確かに私はこの醜い母にソックリなのだ。
母はお気楽に笑い飛ばす。
「そうなんですよ。私に似て可愛いでしょ」
お母さんの馬鹿。
「本当に、可愛い過ぎて困るなぁ」
お得意さんも商店街中に聞こえるくらいの声で笑う。
そして、悪意の無い冗談で、私を傷つけるんだ。
「これなら相撲とりからもスカウトきちゃうかもね」
その度に、何かが私の中で削られていく。それでも、私は笑う。
まだ辛うじて残る自尊心をかき集めて。
私は逃げる様にお米を配達用の自転車に乗せると、サドルに跨がった。
夏の空は白い大きな雲を従えて、気持ち良いくらい青く澄み渡っ

てた。
同じ年の皆は、この夏を楽しんでるんだろうなぁ。私は伝う汗を拭うと、眼鏡をずり上げた。
一度しかない高二の夏も、いや今年だけじゃない、たぶんこれから先も、ずっとこんな風に私は一人で地味に生きて行くんだろう。
コイケンにも入ってるけど、皆みたいに本気で恋が叶うなんて思ってない。ただ、友達がいない私に始めて声をかけてくれたのが弥生だったから一緒にいるだけだ。
商店街を抜けて、大通りを少し行き、本屋さんを曲がれば、配達先の家だ。
その時だった。見たのはほんの一瞬。目が合ったのも瞬きするような瞬間。
「あ」
私の心臓がコトリと音を立てた。本屋から数人の男子が出て来て、その中に……。
「十津川くん」
「あ」
向こうも私に気がついた。
私の体温は一気に上昇。俯くと自転車のペダルを思いっきり踏み込んだ。
こんな、夏休みに偶然でも十津川くんを見れるなんて。もぅ、死んじゃいそう！
私は叫び出したい気持ちをペダルに乗せ、その場から走り去った。

コンプレックスが偽る恋　2

私は帰ってからも、胸の鼓動を止められなかった。
十津川　直輝くんは同じ学年の男子。彼は知らないかもしれないけど、実は幼稚園から同じだ。
高校に入って十津川くんは、髪を染めたり、柄の悪い人達と付き合い始めたけど、私は知ってる。十津川くんは本当は凄く優しくて勇気のある人だって。
十津川くんの事を考えると、私の胸が騒ぐ様になったのはいつからだろう？
いつしか日は落ち、耳鳴りのような虫の音がしている。
私はそっと引きだしを開けた。そこには小瓶に入った小さなドングリの実が一つ。小学生のころ、泣き虫でいじめられっ子だった私に、彼がくれたものだった。もう、きっと彼は覚えていないだろうけど、これが私の宝物だ。
私は切ない気持ちでそれを手に取り、胸の前で握り締めると、夏の星空を部屋の窓から見上げた。
涼やかな風鈴の音がしていた。
その時だった。
「睦月。電話〜。十津川くんって子からよ」
「ええっ？」
私は耳を疑って振り返る。
これが、熱い夏の始まりだとは、まだ予想もしていなかった。

私は階段を駆け下りると、震える手で母親からひったくる様に受話器を受け取った。
まだ、信じられない事にコードレスじゃない古臭い電話が恨めしい。
興味ありげな母と、ゴツい体を揺すって居間の奥からチラチラこ

ちらを窺う父を、私は手で払った。
受話器を両手で包み込む。緊張が隠せず、自然に小声になった。
「はい。変わりました」
「あぁ。睦月ぃ。久しぶり」
受話器の向こうは、外なのか、なんだか騒がしかったけど、彼のよく通る声はハッキリ聞こえた。
「はい」
「なんだよ。幼馴染みなのに、他人行儀だなぁ」
え……。幼馴染み？　じゃ、十津川くんも、ずっと一緒なの知っててくれたんだ。
私の喉が締め付けられる。
「その」
「まぁ、ほとんど話さなくなったから、しゃぁないか」
受話器の向こうで十津川くんは、苦笑いをしてるみたいだった。
私の胸が嬉しさだけじゃ片付けられない温かさで、じんわりしてくる。
「あのさ、今日、本屋で会ったじゃん」
私は配達の時の事を思い出す。
「うん」
「あれ、誰かに話した？」
少し固い声。私は「ううん」と否定した。
受話器の向こうで胸を撫で下ろす溜め息が聞こえた。
「良かった」
「どうして？」
私の問いはごく自然に思えた。本屋くらい、何の問題もないだろう。そんな事で、わざわざ何年ぶりかの電話をしてきたのだろうか？
「あ、いや」
十津川くんが言葉を詰まらせる。
「それよりさ、お前、明日、暇？」
誤魔化されたのはわかった。でも、意外な言葉に、僅かに期待が

生まれてしまって……
「うん」
私はつい訊く事もなく頷いてしまった。
「じゃさ、明日、どっか行こうぜ。久しぶりに顔見たら、なんか話したくなった」
受話器を取り落としそうになる。
私は耳を疑いながらも、鼓動を抑えるのに必死だった。
だって、私には顔見るの、久しぶりなんかじゃない。ずっと、ずっと追いかけてきた、見つめ続けた顔だもの。
「いきなし二人はマズいよな」
照れてるのかな？　十津川くんは意識させる言葉を言った。
私は電話なのに俯く。
「ま、いっか。明日、昼迎えに行くから。じゃな」
そして電話は一方的に切られた。
私はツーツーとしか鳴らなくなった受話器を、長い間握り締めていた。

電話を切ってから、急いで自室に駆け上がった。
後ろで夕飯を伝える声には、気も漫ろに適当な返事をした。
嘘みたい。今日まで、声もかけられなかったのに、いきなり二人で……デートって言っていいのかな。とにかく二人きり出会うんだ。
どうしよう。
私はハタと鏡に映る自分を見た。
ゴツいガタイ。地面な服。ウザい髪型。分厚い眼鏡。
どうにかしなきゃ…
気がつけば、私は部長に携帯から電話してた。
「うっそ！凄い！！」
第一声は受話器を３０ｃｍくらい離しても聞こえそうなくらい、大きかった。

私以上に興奮して、子細を聞いてくる。私も嬉しくてなり、つい、ちょっと脚色してしまった。
「へぇ、十津川くんも、むっちゃんと話してみたかったんだ」
気がつけばそんな話になっちゃってたけど、これくらい良いよね。誘って来たのは向こうだし。
「でも、私、出かける服なんてもってないし、二人になったら、何話していいかもわかんないし……」
私は言葉にしながら、本当に急に不安が募って来た。
そうだ、せっかく二人になれても、ガッカリさせちゃったり、誘ったの後悔させちゃったらどうしよう。
「約束はお昼でしょ」
「うん」
部長の弾んだ声。
「皆に連絡する。コイケンはメンバーの恋を全力サポートするのが、活動だもん。まっかせといて！」
私は明るいその声に救われた。

コンプレックスが偽る恋　3

次の日、朝から亮太を除く三人が家まで来てくれた。亮太からはメールで『バイトでどうしても行けない。すまん』てだけ来てた。律義なん所が彼らしい。

「亮太ってさぁ、何でバイトしてんの？」

お嬢の言葉に部長は何か知ってるのか、少しむくれて答えた。

「馬鹿だから……」

答えの様な、そうでないような事を言った。

お嬢が追及しようとした時、乙女ちゃんが慌て間に入る。

「ま、いいじゃない。それより、今日はむっちゃんよ。二人とも、持って来てくれた？」

日に焼けて乙女ちゃんはさらに格好良くなっていた。元々綺麗な顔立ちだから、またファンを増やしてそう。

乙女ちゃんに言われて、部長とお嬢は持ってきた袋から、色々出して来た。

「まぁ、サイズもあるから、そんなに無かったけど」

お嬢はそう言いながらも、コスメまで用意してくれてた。多少の憎まれ口は、彼女の照れ隠しなのだ。

「さ、むっちゃん。変身よ」

部長が夏の陽射しの様な明るい笑顔を向ける。

乙女ちゃんが、拳を鳴した。

「うふふ。この日を待ってたのよ。むっちゃん、爪の先まで任せてね」

詰め寄る皆。私はちょっと怖くなって、半笑いで後ずさる。

「むっちゃん、あなたの美は約束されましたぁ」

部長がどっかで聞いた事あるような事を言って、私の眼鏡を外した。

ビックリした。まず、部長の熱心さに。
どうして彼女はこんなに他人に一生懸命になれるんだろう。あぁでもない、こうでもない。鏡の前で私の周りをぐるぐる何周もして、厳しい顔でチェックを入れて行く。私はそんな部長が羨ましかった。
ビックリした。次に、お嬢のこだわりに。
どうして彼女はこんなに美にこだわり、真剣になれるんだろう。これを試してみて。やっぱり、今はこれが流行だからこっちかな。そんな風に呟きながら凄い知識の量を総動員して、少しの妥協も許さない。私はお嬢が美しい理由がわかった気がした。
ビックリした。乙女ちゃんのセンスに。
どうして彼はこんなに器用なんだろう。実は服を着替えた後に、髪を結ったり、お化粧をしてくれたのは彼なんだけど、彼の手が触れると、魔法の様に私が生まれ変わっていく。私はそんな乙女ちゃんを尊敬した。
おかげで二時間、鏡の中の私は突っ立てビックリしてだけだった。そして気がつくとすっかり変身していたのだ。
私は鏡の中の私と信じられない気持ちで見つめ合っていた。眼鏡を外されてるから、まだぼんやりとしか見えないけど……。
「はい。どう？」
乙女ちゃんの弾む声が、眼鏡をくれた。
そこには、今まで着た事のない可愛いキャミソールに短いスカート。髪は綺麗に結わえてあって、あちこちに髪飾りがキラキラしてる。眉も整えられ、アイラインのせいか、いつもより目も大きくパッチリ。そんな生まれ変わった私がいた。
「一度思いっきりむっちゃんを改造したかったのよね～。あ～スッキリした」
乙女ちゃんが、私の後ろから両肩に手を置いた格好で微笑んだ。
「乙女ちゃんってさ、絶対こういう才能あるよね」
お嬢が感心しながら、片付けしてる部長に言う。
部長は鏡の私を見ながら

「うん。この道、向いてるんじゃない」
「やだぁ。褒めすぎだって」
乙女ちゃんは照れて、両頬を抑えてから、再び私の肩に手を置いた。
「元々むっちゃんは可愛いのよ。それが眠ってただけ」
そして、直に私と目を合わす。眼鏡をそっと外した。
「眼鏡もいいけど、今日は外してみて。むっちゃん、本当はそんなに目、悪くないでしょ？」
見抜かれてたのに、私は苦笑して頷く。そう、私は眼鏡を、視力を補うと言うより顔を隠す為につけてたのだ。
「ほら、笑って。笑顔が女の子の一番の武器なんだから」
優しい乙女ちゃんの言葉。鏡の奥では他の二人も励ます様に私に力強く頷いていた。
私は慣れない笑みを作る。まだぎこちない形の笑顔。それでも……
「睦月〜。お友達よ」
「「来た」」
皆、顔を見合わせる。
次いで私に視線が集中した。
「自信持って」
乙女ちゃん。
「楽しんできなさい」
お嬢。
そして、いつも勇気をくれる
「頑張って」
部長。
私はしっかり頷くと、部屋を出た。
まるでそれは戦いに挑む戦士にでもなった。そんな感じだった。

コンプレックスが偽る恋　4

高校の合格発表よりも緊張してるんじゃないかってくらい、ドキドキして階段を降りた。あまりにドキドキしすぎて、体に力が入らない。

「睦月。あの人……って、その格好！　アナタ何？」

母は十津川くんが誰か判ってないみたい。昔は、幼稚園の時は遊びに来た事もあるのにな。私の姿に驚く母をよそに、私は十津川君のほうを見た。

染められた髪に、鎖がジャラジャラついている、破れたTシャツ。おばさんの母がこの姿を受け入れられなくて当然だ。でも、私にはそんな十津川君の格好はちょっと危険な感じがして、かっこよく見えた。

「よぉ」

十津川くんが軽く手を上げた。私は控え目に胸の辺りで手を振る。

「じゃ、ちょっと出かけてくるね」

「出かけるって……ちょっと！」

煩い父がいないのが救いだった。

何かまだ言いたげな母を無視して、私は十津川くんの前まで駆けて行った。

「へぇ」

十津川くんは、しげしげと私を見つめた。

私は恥ずかしくて目を伏せる。やっぱり、付け焼き刃って似合わないかな。変なのかな。私なんかが頑張っても……。

「いいじゃん」

「え？」

私は顔を上げる。

そこには夏の太陽みたいな十津川くんの笑顔。

「学校より、今のが全然いけてるじゃん」

「そうかな」
私は肩に落ちる髪を指に絡める。頬が熱くなってきて、いてもたってもいられない、くすぐったい様な、熱い気持ちがじんわり広がって来た。
「絶対こっちが良いって。ほら、これ」
そう言って渡されたのはヘルメット。
見ると、十津川くんは慣れた様子で同じ型のヘルメットを被り、バイクに跨がった。それが物凄く格好良くて私は息をするのも忘れそうになる。
「あの、私……」
私はメットを持ったまま戸惑う。
ふと店に目をやると、怖い顔の母の後ろに、皆の顔が見えた。皆、頷いたり、親指を立ててみせたりしている。
私は微笑むと、覚悟を決めた。
そして、始めてだらけの一日がスタートしたのだ。

バイクの後ろに乗るなんて生まれて初めてだった。子どもの頃は、父の配達のスクーターの座席の前に立たせて貰った事はあるけど。
取りあえず十津川くんに腕を回した。だけど触れるのが恥ずかしくて、体がくっつかない様にしてた。あんまりくっついて、気持ち悪がられたら嫌だし。
バイクはどこに向かってるかわからなかったけど、私が自転車で行く一番遠くの交差点で信号に止まった。
「もっとしっかり掴まれよ。危ないぞ」
「あっ」
十津川くんの手が私に触れた。そして、少し強く引っ張ると、自分にくっつけさせる。
もう、心臓が耳元でバクバク鳴ってるみたいで、返事もろくにできない。十津川くんは、そんな私に気がついちゃったみたいで、イタズラっぽく笑うと

「さ、今からすっ飛ばすから、離すなよ」
一度、重ねられた手を確認するみたいにキュッと握り、ハンドルに手を置いた。
信号が色を変える。それは、始まりの合図のようだ。
次の瞬間、全ての景色が形を変えた。何もかもが現れては、後ろに消えていく。目に映る色は、刹那の残像となる。
私達は、風に溶け街を駆け抜ける。
何にも囚われない開放感と、すぐ傍にちらつく恐怖の影からのスリルに、私は生まれて始めての昂揚を覚えた。
不安はないわけじゃなかったけど、それは十津川くんの背中が消してくれた。
少し迷ったけど、海の香りがして来た頃、私はぴったり彼に体を預け彼と一つの風になっていた。

コンプレックスが偽る恋　5

私達は二つも離れた街に来ていた。
海岸沿いにバイクを止めて、ヘルメットを取ると、真夏の眩しい光が飛び込んで来た。
私は心地良い潮風に目を細める。海水浴場じゃないから、人影は釣人がチラホラ程度。砂浜はなくて、コンクリートのテトラポットの先に少し足を浸せる場所があるくらいだ。
「こっちこいよ。飯食おうぜ」
見ると、十津川くんはテトラポットの上を器用にひょいひょい歩いていた。
私は部長から借りた慣れないミュールなので、後に続くのは断念してその下の平坦な道をいく。
何か話さなきゃ。
暑いね。夏だから当たり前か。ここ良く来るの？　余計なお世話かな。お腹空いたね。今から食べに行くんだってば。
私は心の中ではお喋りだ。けど、声にする自信が無くて、いつもの様に地面ばかり見てしまっていた。
「睦月さぁ、俺が学校ずっと一緒なの、知ってた？」
十津川くんの声に、やっぱり上手い返答が出来なくて、私はただ頷いた。金髪が日に明るくて、耳のピアスが光ってた。
「なんだ。そっか」
十津川くんは両手をポケットに突っ込んだまま、私の前に軽々と飛び下りた。
子どもみたいな笑顔。まるでピーターパンだ。
「じゃ、昔みたいに直って呼べよな」
そう言うと、キョトンとする私を笑って、いつの間にか目の前にあったカフェに入った。
白い木造の柱や壁に青い屋根。扉が涼しげな音を立てる。

「来いよ。今日はおごってやるからさ」
店内からクーラーの涼やかな空気が流れ出てきた。
私は知らない街の、知らないカフェに慣れた様子の彼の、新しい顔を見つけられて嬉しかった。

それからも私達は、遠い街をあちこち走った。
海沿いや少し山の手。一度ファミレスで休憩しただけで、気がつけば陽が斜めに射し始めていた。
買い物もしない、映画もみない、遊園地や動物園みたいな場所に行くわけでもない。そんな友達との外出は始めてだった。
自然と会話も少なかったけど、それでもバイクの後ろで彼に掴まってると一緒にいるって、体の中がふわふわするくらい嬉しくて実感できた。だんだん胸のドキドキは治まってきたけど、その代わりに切なさが込み上げて来た。
やっぱり私は十津川くんが好き。
こうやって過ごすのが今日限りでも、きっと私には奇跡だ。
けど……
「疲れた？　少し降りるか」
二人を繋げてたバイクの細やかな振動が止まる。
私は一日の終わりを感じて、寂しさを感じながらも黙って降りた。
始めに来た海に戻っていた。日は柔らかなオレンジ色に変わり、水平線の遠くの方は夕闇を引き連れた空の藍がぼんやり広がっている。
私がぼぅとしてると、十津川くんはどこからか缶ジュースを買って持って来てくれた。
「はい。お疲れさん」
投げられた缶ジュースは、アーチを描き私の手に飛び込んで来る。
「座ろうぜ」
十津川くんはそう言うと、重力を感じさせない身軽さで堤防をよじ登った。

「ほら」
上から差し出される手。私は一瞬、自分の体重を考えてためらった。
それを十津川くんは察して
「大丈夫。ちゃんと引き上げてやるから」
日に焼けた彼の笑顔。
私は黙って頷くと、その手をしっかり握った。
堤防の上に昇る。涼しい潮風が吹いて肌を浮かせていた熱をさらって行った。
彼は腰を下ろすと、缶ジュースを一口飲む。私はどんな距離にいたら良いのかもわからなくて、結局丸々誰か一人座れるくらいの間隔を空けて座った。
また沈黙だ。私は申し訳なくなって、また切り出しの文句を探し始める。
「睦月さぁ。これからも、たまに会わねぇか？　ま、会っても今日みたくバイク走らせてばっかになるけど」
私は驚いて十津川くんの横顔を見た。夕陽に染まった日に焼けた顔は、どこか寂しげで複雑な顔だった。
「あ、やっぱ、女にはつまんねぇよな」
「う、ううん」
私は慌て首を振る。つまんなくない。何もかもが新鮮で、刺激的で、楽しかった。それに、私だって、これからも会いたい。
「そっか。良かった」
十津川くんは子どもみたいに微笑むと、また海の方を見た。
「……俺さ」
ポツリ話し始めた。
「中学入って、すぐに親父の会社が潰れて、親父がいなくなってさ。毎日お袋と借金取りにビビって暮らして。いつからかお袋が水商売するようになってさ」
拗ねた様な声。細められた目は、まるで空と水平線の境を見極め

様としてるみたいだ。
「何か面白くなくてさ。今の奴等とつるみだしてさ……」
苦笑いして、私に見せる様にピアスを指で弾いた。
「けど、最近、ひょっこり親父が帰って来やがった。今更ってむかついたけど」
海風が十津川くんの前髪を揺らす。
「お袋も働かなくて良くなってさ。俺にも大学行っても良いって」
十津川くんは自嘲した。
「そしたらさ、急に馬鹿やってたのがつまんなくなって。今からでも、やり直せるかなって……」
あぁ、それで本屋さんにいたんだ。
「まぁ、そんな、上手くいかねぇわな。けど、睦月に昨日会ってさ、何か昔にもど……」
「あ〜。ナオじゃん」
その時、聞き覚えのない声がした。
見ると、彼がいつも一緒にいるグループのリーダー的な上級生が堤防の下から私達を見上げていた。
空気が変わった。
さっきまでの柔らかな夕陽は、ジリジリ肌ににじり寄る痛いくらいの熱さになる。
「こんにちはっす」
十津川くんの顔色も変わり、立ち上がると頭を下げた。
私もつい倣って立って頭を下げる。
慌てた様子で十津川くんは堤防から降りると、私にも手を差し出した。私も何かに追われる様に降りると、大きい体の相手を見上げた。
高校生なのに真っ白にしてる髪が不気味。それよりもっと怖いのは、その顔を覆う前髪から覗く鋭い目だ。
「最近連れないと思ったら、彼女？」
親しげな口調とは裏腹に、目は全く笑ってない。私はその強い視

線にすっかりい竦み、俯く。十津川くんは一度私を見てから。
「幼馴染みっす。九頭先輩」
「へぇ」
九頭先輩は細い目をさらに細めて私をジロジロ見つめる。
私は怖くて、目が合わせられなかった。
先輩の薄い唇が吊り上がった。
「ちょうどこれからメンバーで集まるんだ。来るだろ？」
まるで断る余地を持たせない声。
「君もね」
私の肩が軽く叩かれて、私は首を縮めた。
嫌だ。行きたくない。
泣きそうになるのを堪えて、助けを求める様に十津川くんを振り返った。でも……
「もちろんっすよ」
軽薄な笑みを浮かべた十津川くんは、私を見てくれはしなかった。

コンプレックスが偽る恋　6

私達は再びバイクに乗って移動した。
まだ日が落ちるまでは時間はありそうだけど、早く帰りたくなった。
でも、十津川くんに掴まっても、さっきまでの楽しさがまるでない。先に行く先輩のバイクの後ろにつきながら、十津川くんがそんな私に声をかけた。
「大丈夫。見た目ちょっとアレだけど、皆良い奴等だからさ」
「うん」
何の慰めにもならなかったけど、知らない街で頼れるたった一人の彼の言葉を、今は信じるしかなかった。
着いたのは誰かの家みたいだった。
今まで見た事がないくらい大きい庭の先に、堂々とした風格の日本家宅が構えている。みると、それこそ先輩の苗字、九頭の表札が掲げられていた。
「凄いだろ」
何故か十津川くんは得意そうに私に言うと、やっぱり勝手知った感じで家の門をくぐる。
彼は先輩と親しげに話しながら、一軒家みたいな離れの前まで歩いて行った。
私はなんとなく帰り道を気にしながらその後を続く。心細くて、今朝会ったコイケンの皆を思い出していた。なんだか酷く昔の様だ。
「皆揃ってる？　今日はさ」
ドアを開けた十津川くんが、私を振り返って手招きした。私は進まない気持ちを引きずって、おずおずドアの前に立つ。
「前話してた、幼馴染みの睦月」
前話してた？　私の中に一つ目の『？』が生まれた。
だけど、十津川くんはそんなのお構いなしに、私の背中を押した。

私は踏み出してしまったのだ。
中には長髪を後ろに括ったヒョロっとした男の人が、何かの雑誌を広げていて、その隣りに茶髪の寝癖かセットかわからない頭の男の子がＤＳに夢中になっていた。部屋の隅には、金の長い髪のお化粧をバッチリした女の子が、寝そべってテレビを見てる。
皆、私が入ったと同時にこちらに目を向ける。
「あぁ。なんだ、言ってたのよりマシじゃん」
長髪が雑誌を脇に置いた。
それってどういう事？　十津川くんは、私の事、何て話してたんだろう。
また疑問が湧いてくる。
「あたし、アスカ。ヨロシク～。ちなみに中三」
そう言った女の子は、つけ睫毛をパタパタさせて微笑み、起き上がってペタンと座ると、そのまま私の手を握って引っ張った。
「きゃっ」
私は体勢を崩し、そのままアスカって子に抱き付かれる。
「ナオの友達。可愛い～。プーさんみたい～」
途端、みんな爆笑。私は一気に顔が熱くなるのを感じた。彼女的に褒め言葉なのか、けなすつもりだったのかわからないけど、プーさんはないんじゃない？　確かに、私は太めだし、目も小さくて美人じゃないけど、今日は違う。みんなが、朝からわざわざ来て、頑張ってくれたのだ。それなのに……。
「アハハ。アスカ、いきなし毒かよ」
茶髪が笑ってる。
「正直もんだからな」
九頭先輩まで。
私は情けなくなって、少し強く押すと彼女の腕から逃げた。
「……」
私は所存なくなって、十津川くんを振り返る。十津川くんは、済まないような笑ってるみたいな、曖昧な顔で私の頭を撫でた。

本気で帰りたかった。
心細いのも、彼の前で恥をかくのももう嫌だ。
「あのさ、いい加減にしてくれよ」
うなだれかけた時、十津川くんの少し怒った声がした。
みんな笑いを止める。十津川くんは、バツが悪そうに頭をかいて
「ま、仲良くしようぜ」
「そうだな。なにせ『あの』ナオの連れなんだからな」
そう先輩が言うと、みな親しげな顔で口々に「ヨロシク」と言った。
また疑問が九頭先輩の言葉に浮かぶ。
なんなんだろう？　歓迎されてるはずなのに、この居心地の悪さは。
私は漠然とした不安を抱えながらも、この流れに逆らうどころか逃げる事さえ出来ずにいた。

それから皆は近くの花火大会に行くから、それまではって、特に何をするでもなくダラダラ過ごしていた。
十津川くんも、お友達と話し始めちゃって、私は居場所がない感じで、部屋の隅で携帯ばかりいじってた。
母からの着信が怖くなるくらい入ってて、いっそ家にかけようかとも思った。けど、お互い無関心の様でなんとなくそれは許されない空気だったから、結局かけられなかった。
メールはコイケンの皆のひやかしみたいな、エールみたいなのが何通か届いてて、それが何か唯一の救いだった。けど、やっぱり今の状況は説明しにくくて返信はできずにいた。
部長と出会う前の自分を思い出した。
教室にクラスメイトの笑い声。時々聞こえる囁き声は、みんな私の悪口に聞こえた。
誰の害にもならないように、いつもじっと息すら潜めてるのに。
どうして、みんな、私を嫌ったんだろう。

ふと窓ガラスに映った自分を見た。似合わないのに、着飾った姿はまるでピエロだ。
朝のみんなと見た鏡の自分と何かが違う。
そうだ、あの時私は一人じゃなかった。だから……。
部長に連絡して帰ろう。そう携帯のボタンを押しかけた時だった。
「睦月って、あの一之瀬弥生と友達なの？」
意外な人から意外な名前が出た。
アスカだった。

コンプレックスが偽る恋　7

意外な台詞に私は警戒する。アスカは寝そべったまま、肘をついた掌に自分の顎を乗せ、上目遣いにこちらを見つめる。
「そうだけど」
アスカの目が半月型になった。
「あ～。やめといた方がいいよ」
私は眉を顰める。アスカは今度は爪をいじりながら
「うちのお姉ちゃんが中学一緒だったんだけどぉ」
チラリ私をバサバサ睫毛が窺った。
「やっぱ止める。悪口になっちゃうもん」
そう言うと、まるで自分から話しを振ったのさえ忘れた様に視線を外した。
言い様のない暗雲が胸に広がって行く。
あの部長の悪口？　全く想像出来ない。
クラスでも友達はたくさんいて、明るくて、優しい彼女に？
「睦月ちゃんは、その子と高校からなんだよね。聞いといた方がいいんじゃない？」
軽い調子の長髪が言う。確かに、中学の頃の部長を、私は知らない。
「何？」
私の小さな声に、アスカは敏感に反応してニヤリと笑った。
「あくまで噂だよ」
「うん」
小悪魔の様な笑み。アスカは、大きな目で私を捕らえる。
「一之瀬弥生って、その……自分よりブサイクを選んで親友面で近付くんだって。特に友達いない子ね」
気持ちの悪い何かが、胸の中で大きくなっていく。
「で、自分の引き立て役にしちゃうの。で、相手が生意気になって

きたらポイ。中学の頃は、そうやって何人か使い捨てしてたみたいよ」
アスカは小首を傾げた。
「睦月ぃ。一之瀬弥生に騙されてるんじゃない？」
一瞬、息を飲んだ。
教室で一人でお弁当を食べてる私に、初めて話しかけてくれた部長。十津川くんへの気持ちも馬鹿にしないで、真剣に聞いてくれた部長。自信がなくて、何にでも消極的だった私を引っ張ってくれた部長。
親友だって言葉にはしないけど、そう、いつからか信じてた。それが、みんな……嘘？
また疑問が生まれ、私の頭は混乱し始めていた。
たくさんの疑問が浮かんでは消えて、消えては新たな疑いを連れて来る。
自分の初めての親友を、心から信じられない自分にも腹が立った。
確かに私はブサイクで、友達も他にいない。
じゃあ？
もしかして？
そんな小さな、でも明らかな綻びが生まれ始めていた。
「そ、そんな事」
声が上手くでない。私は困惑して、視線をうろうろ彷徨わせた。
いつの間にか、私に視線がまた集中していた。
そんな私の肩に優しいぬくもりが、ポンと降りた。
「ま、いいじゃん。そろそろ行こうぜ」
十津川くんだ。
腕を組んでいた九頭先輩がそれを解いて
「そうだな」
「行こ」
私の顔を覗きこんだ十津川くんの顔が、あまりに近くて、私は首を竦める。

そんな私の耳に彼の囁き声。
「花火会場行くまでに、抜けだそうな」
「え」
目をパチクリする私に、彼は笑ってみせ、私の手を引いた。
繋いだ手が、大きくて、すっかり気持ちが折れかかってた私を支えてくれてる、そんな気がした。
そうだ、今は彼を信じよう。
今、私の手を引いてくれてるのは他の誰でもない。十津川くん、彼なんだから。

私達は外に出た。
もうすっかり暗くなっていて、見上げたら夏の星座が瞬いていた。
とっくに門限は過ぎてる。今も震える携帯が、後ろ髪をひく。けど……。
「乗れよ」
今日だけは……。
「うん」
私は頷くと、十津川くんの背中に抱き付いた。
夏の夜風は少しの不安とたくさんの疑い、それら皆をいとも容易く忘れさせる熱を孕んでて、私はその風の流れるままにいる事を選んでいた。
皆、バイクに乗るみたいで、アスカちゃんだけ九頭先輩の後ろにくっついていた。
「行くぞ」
九頭先輩のバイクに続いて、大きな家を後にする。
知らない街はすっかりその顔を変えていた。街明かりに、祭り特有のざわめきと華やかさが漂い始めた時、十津川くんはバイクのハンドルを切った。
横道にそれて、皆の姿がなくなる。
「夜店はないけどさ、こっちのが花火、良く見えるからさ」

言い訳の様な、独り言の様な事を言って、バイクのアクセルを回した。
スピードをあげたバイクは、どんどん皆と離れ、祭りの明かりからも遠ざかる。
人気も引いて、また海の香りがしてきた。
寂しい風景になってきたのに、私はあの人達の空気から解放されてホッとしていた。緊張を溜め息にして吐き出すと、無意識に十津川くんの背中に身を預ける。
響くエンジン音。広い背中。伝わる振動。
パッ
急に空が明るくなった。次いで大気を揺るがす爆発音。見上げた暗闇に、今までみたどの花火より綺麗で、鮮やかな光の華が煌いていた。
バイクを止めて、自然と手を繋いだ私達は砂浜に降りた。
肩を並べ座る私達の頭上には、幻想的な光景が広がる。
一瞬で消える光。それでも……
私はそっと刹那の幻に目を輝かす彼の横顔を見た。
生まれて初めての気持ちは、今、静かに音を立てて動き出した。

帰り道は静かだった。
私達はどちらも何も話さなかった。帰るには、もう随分遅い時間なのに、今日一日ずっと一緒だったのに、バイクの振動が止まるのが苦しかった。
やがて風景はいつもの日常のものへと変わり、明かりのついた私の家が見えてきた。
家の前に人影が見える。それが誰かなんて、考えなくてもわかった。
母だ。
檻の中のクマみたいに、行ったり来たりしている。いつもなら申し訳なく思うのだろうけど、正直、今は少し疎ましくさえ感じてい

た。
きっと、家の前まで行けば、十津川くんに迷惑がかかる。早くに離れるのは嫌だけど仕方ない。
「ここで……」
私は商店街の端で十津川くんの腕を引いた。
バイクが緩やかに止まる。
私は降りるとヘルメットを返した。
「あの、今日はありがと」
初めて私から話せた。十津川くんは、はにかんだ顔でメットを受け取ると
「俺こそ。なんかガキの頃に戻ったみたいで、楽しかった」
くしゃっと私の頭を撫でる。
「あの本屋の事、二人の秘密な」
「え」
今、ここでその話が出ると思わなくて、私は十津川くんを見つめた。彼は自分の口に人差し指をあてると
「また、遊ぼうな」
そう言ってエンジンをかけた。
「じゃ」
「おやすみなさい」
私は花火の後の寂しさ以上の切なさを、かみ殺しながら小さくなる彼の背中を見送った。
バイクのテールランプが消え、私の長い一日がようやく終わった。

コンプレックスが偽る恋　8

私の顔を見つけた母は、すっ飛んできた。酷く怒っていたけど、私は何だか色々な事が頭をぐるぐるしていて、あんまり言葉が頭に入って来なかった。

家に入ると、父の怒った背中が見えたけど、私はもちろんスルーした。

食欲がまるでなくて、シャワーに入り、着慣れた部屋着に着替えてようやく落ち着いた。

ベッドに倒れこみ、枕を抱き締めて息をついた。疲れていた。

「十津川くん……」

昨日までは、話す事すら出来なかったのに、今日は彼に掴まり、彼のバイクに乗って、二人で遠い街に行った。

花火の一瞬の光に照らされる彼の横顔を思い出す。途端に顔が熱くなり、私はほてる頬を枕に押しつけた。

今更、心臓がドキドキして、苦しい。

繋いだ手と二人だけの時間。

「キャー」

体中が落ち着きを失い、私は足をジタバタする。

確かに、すりガラスを通したような漠然とした何かはいくつもある。特にアスカちゃんから聞いた部長の話は、すごく気になってたけど……。

『睦月』

十津川くんの声が甦る。どうであれ、彼が私を見て、私に声をかけてくれたんだ。そう思うだけで、笑顔が零れた。

夜風にゆれる風鈴と低い音を立てる扇風機。

私はいつしか眠りについていた。

それから、三日と空けず十津川くんから遊びの誘いが来る様にな

った。二人で会う事はなくて、たいていあの九頭先輩の家で会った誰かが一緒だったけど、何回か会ううちに、そんなに怖くない人達だってわかった。

長髪のシュウはたくさん彼女がいて、軽いけど明るくて気が利く。茶髪のアキラはゲーマー。アスカはアキラの彼女らしい。妹気質というか、甘え上手な子猫みたいな感じ。

そして九頭先輩は、十津川くん曰く、キレると手がつけられないらしく、あの街では知らない人はいないみたいだけど、普段は気の良い兄貴って風だった。

私はアスカの影響で、生まれて初めて髪を少しだけど明るくして、お化粧も始めた。シュウの彼女達のアドバイスとかで、服も少し派手だけど今風になってきた。

帰りがしばしば遅くなって、私の変化を良く思わない母の監視が厳しくなると、夜にこっそり抜け出したりもした。

なんだか彼らに会って、自分が確実に変わって行くのを実感していた。

それがいつも新鮮で、刺激的で、やみつきになっていた。反面、少しでも彼らに合わないとまた元の地味な自分に戻ってしまうんじゃないかって、怖かった。それに、ずっとあの部長の噂が引っ掛かってて、あの日以来、コイケンと距離をとってもいた。

自分をこんなに変えてくれて、しかも好きな人の傍にいられる。親の小言なんかその夢みたいな時間の前には、ただのウザい騒音でしかなくなってた。

私は夏休みで、すっかり変わり、気がつくとコイケンの皆とも全く連絡をとらなくなっていた。

新学期。私は学校に行くのが楽しみだった。

今まで私を馬鹿にしてきた連中の、驚く顔が見物だ。鏡の中の私は、すっかり板についてきたメイクと髪型のチェックに余念がない。

「一之瀬さんが迎えに来てくれたわよ」

最近の私の変化を良く思わない母の、固い声。
私も半ばふて腐れて「わかった」と短く答える。
一之瀬弥生……部長。噂が本当か嘘かは会えば判るはずだ。
本当に友達なら、明るくなった私を喜んでくれるよね。
玄関に回ると、一学期と何も変わらない部長がいた。
「おはよ」
私が手を上げると、部長は目を見開き、口をポカンと開けた。
「むっちゃん、どうしたの？」
「うん。ちょっとイメチェン」
私は部長の表情を探る。部長はしげしげと私を見つめた後、僅かだけど眉を寄せた。
「……むっちゃん」
部長が良く感じてないのがわかった。私の中の綻びが、大きな暗い孔に広がっていく。
「何？」
私の顔がひきつった。張り詰めた空気が、弾けそうになった時だった。
外から今や聞き慣れた、クラクションがした。
私は急いでドアを開ける。そこにはバイクに跨がった十津川くんがいた。
「行くぞ」
十津川くんは私にメットを投げて寄越す。
私はそれを手に、部長を振り返った。
部長は十津川くんをみて、さらに表情を険しくしていた。
「むっちゃん……」
部長が私の腕を掴んだ。十津川くんは、そんな部長を睨み
「何だ？　てめぇ。睦月、行くぞ」
部長の私を掴む手に力がこもる。でも、私はもう暗くて利用されても気がつかない馬鹿じゃない！
私は部長の手を振り払うと、メットを被り、バイクの後ろに乗っ

た。
「むっちゃん！」
部長の呼ぶ声、私はそんな部長が見れなくて
「出して」
十津川くんにそう言った。私の心は、重く沈みそうだった。

コンプレックスが偽る恋　9

学校は、バイク登校が禁止されてる。十津川くんは、バイクを学校近くのホームセンターに停めた。ここからは学校まで歩いても五分くらいだ。

メットを返す私に、十津川くんは少し不機嫌そうな顔を見せた。

「あれ、もしかして、アスカの言ってた」

私は黙って頷く。十津川くんは、私の頭に手を乗せて

「あんな奴、切れよ。俺がこれから毎朝迎えに行くからさ」

「でも」

部長が掴んでいた腕のあたりが、少しだけ疼く。正体のわからない、何か嫌な物が考えを鈍らせる。

「大丈夫。睦月は俺が守ってやるからさ」

十津川くんはそう言うと、微笑んだ。

反則だ。こんな顔されたら、私は逆らえない。

私は髪で赤くなる頬を隠す様に俯いた。

「さて、行くか」

先に歩き出した彼の背中を追う。親友を失うかもしれない。そう思いかけた自分の考えを私はすぐに否定する。違う。始めから親友なんかじゃなかったのよ。

「待って」

私は彼に追いついて肩を並べて歩いた。

きっと、今、私は幸せなんだ。

そうだよね？　……たぶん

教室についたのは始業のベル、ギリギリだった。

クラスメイト達は私を振り返り、ざわめきが小波の様に広がって行く。私は気付かない振りで、自分の席につくと、今まで一番私に風当たりをキツくしてた女子を一睨みする。

相手は慌て目を背けた。
凄く気分が良かった。もう、私を笑う奴も馬鹿にする奴もいない。
私は笑いを堪えながら、前髪をかき上げた。
なんだ、コイケンなんかより、ずっと十津川くんやあっちの仲間の方が私を変えてくれるじゃない。こんな事なら、部長……じゃない、あの弥生に利用される前に気付けば良かった。
ふと、持ってきた紙袋に目をやる。
ダサかった頃の私に、コイケンの皆が貸してくれた服や靴だ。
「……」
何か、今更顔を合わせるのが面倒臭い気がした。
私は肘をついて、その過去の遺産を見ながら溜め息をついた。

始業式とホームルームが終わると、今日は解放された。
担任に呼ばれたけど、どうせ外見の話だ。私自身、あのダサい私に戻る気なんかないから無視するに限る。元々、校則なんかで人の自由を奪うなんておかしいんだ。派手にしたって、誰にも迷惑かけてないでしょ。ま、これはアスカの受け売りだけど。
私は結局、服を返さないのも気分が悪いので乙女ちゃんに預ける事にした。弥生は論外。お嬢はたぶん弥生から連絡いってるだろうから、やっぱりパス。亮太は『自分で借りたものは自分で返せ』って言うに決まってるし。
私は他のメンバーに見つからない様に、陸上部の部室で乙女ちゃんを待った。
ジロジロ見られるのにも、慣れて来た頃、ますます精悍になった乙女ちゃんがやってきた。
乙女ちゃんは私と目が合うと、驚いた顔をしてから一緒に歩いてた友人らしき人達の群れから抜け出して来てくれた。
「久しぶり」
私が手を上げると、乙女ちゃんは破顔して
「変わったね～」

無邪気に笑う。
また背が高くなったかな。ゲイって知らなかったら、本当に普通にイケメンのスポーツマンで通りそう。
「イメチェンしてみた」
「そぅ」
乙女ちゃんはいつも、誰に対しても否定しない。
私はそんな乙女ちゃんの変わらない態度にほっとして、紙袋を差し出した。
「これ、夏休みに皆に借りたの」
「あぁ」
少し間を置くと、乙女ちゃんはまた微笑んだ。
「役にたった？」
「まぁね」
緊張していた私は少し力が抜けた。乙女ちゃんはそんな私の肩を軽く叩き
「私、その話聞きたいなぁ」
そして、紙袋を優しく押し返す。
「三時に駅前のマックでね」
「え、待っ……」
「楽しみにしてるね～」
すっかり乙女ちゃんのペースで話を寄切られてしまった。私は紙袋を抱えたまま、部活に戻る乙女ちゃんを見送るしかなかった。

コンプレックスが偽る恋　１０

私の足取りは重かった。
乙女ちゃんが皆を呼ぶのは目に見えてたから。
携帯を見ると、十津川くんからのメールが入ってた。私はマックに行く事を送って、約束の場所に向かう。
朝はバイクで通り過ぎた道は、夏休み前にはいつも弥生と歩いた道。
弥生のおかげで、高校生活は寂しくなかったな、と弥生と一緒に歩いた日のことを思い出す。
朝、酷い事しちゃったかも。
私は紙袋を抱き締めると、走り出した。

マックにはやっぱりコイケンの皆が揃っていた。
弥生は気まずそうにボックス席の端に座り、隣りはお嬢と亮太が座っていた。お嬢も弥生から何か聞いたか、それともメールを無視し続けた事に怒ってるのか、少し機嫌悪そうにしかめ面でストローを回してる。亮太は夏の間に何のバイトをしていたのだろう？　乙女ちゃん以上に真っ黒に日焼けしていた。
私は、ヒラヒラ手を振った乙女ちゃんの隣りに座った。
弥生とお嬢は私と目を合わさない。亮太は、私を見ても顔色一つ変えなかった。弥生達みたいに反応されるのも嫌だけど、こう無反応も気まずい。
「久しぶり」
「よぉ」
亮太は軽く手を上げると、手にしてるハンバーガーを口に放りこんだ。
重い空気だ。それを柔らかくしたのは、やっぱり乙女ちゃんだった。

「全員揃うの久しぶりよね～」
穏やかな声で乙女ちゃんは私に笑顔を向けると、私の両肩に後ろから手を回した。
「さて、今日のメインのむっちゃんが来たんだし、色々聞いちゃいましょ」
それぞれの視線が集まる。
私は目を逸らした。

それから乙女ちゃんは、私に色々質問してきた。
いつも思うけど、乙女ちゃんは話を聞くのが凄く上手だ。始めは話し辛かった私も、トゲトゲしかった皆も和んで来る。気がつけば、夏休みの前みたいに私達はキャイキャイはしゃぎながら話していた。
「じゃ、ほとんど毎日会ってたんだ」
お嬢の感心する顔に、私もすっかり得意になって頷いた時
「でも、本当に大丈夫なの？　その人達」
水を差す弥生の声がした。
私はそれまでだ気持ち良く話してたのもあって、ムッとして弥生を睨み付けた。
弥生の言葉にお嬢も頷く。
今、気がついたけど、お嬢は一つも日焼けしてなかった。真っ黒な亮太の隣りにいるから、余計に色白にみえる。
「……確かに。十津川ってさ、あの金髪でしょ？　うちじゃ浮くからって、一高の奴等とつるんでる」
「一高。九頭の所か」
亮太は先輩の事を知ってるみたいで、眉を寄せると唸った。
「何か誤解してるわ。見た目は怖いけど、十津川くんも九頭先輩もいい人よ」
私は皆の浮かない顔を一人一人見た。
「……むっちゃん。そうなったのは、その人達のせいなの？」
弥生の言葉。何だか親と同じくらいいちいちムカツク。

「何が言いたいのよ」
私は半ば挑発するような口調になる。弥生も少し頬に赤みを差して
「じゃ、ハッキリ言うけど、そんな格好むっちゃんらしくない。朝、おばさんにも聞いたよ。夜遊びしたり、家の手伝いしなくなったり、どうしちゃったのよ」
弥生は一気にまくしたてると、キッと私を見据えた。私は私でフツフツと怒りが込み上げて来た。手にあったハンバーガーの包み紙を握りつぶす。
「私らしくないって。じゃ、私らしいって何？」
唇を一度噛むと、握った拳を見つめた。
「あの、ダサくて暗い私が、私らしいって事？」
「そんな事……」
「そうだよね！」
私は弥生の言葉を遮り頭を起こす。
「弥生にとっては私がダサいままが良いよね。引き立て役にもってこいだし」
弥生の顔色が変わる。
「なっ」
「どういう事よ」
お嬢が割って入った。私は口の端をつり上げ、動揺する弥生を睨む。
「弥生はね、ダサくて暗い私を引き立て役にする為に近付いてたの」
「そんな事、本気で言ってるの？」
弥生の声が震える。
「むっちゃん。それは……」
乙女ちゃんのなだめる声も、友情を裏切られた私には届かない。
「もう、偽善面に利用されるのはまっぴらよ。十津川くんと仲良くならなかったら、アンタに騙されてダサいままだった。私はアンタなんか……」
「いい加減にしろっ」

机がいきなり悲鳴を上げた。私は驚いて振り向く。そこには、見た事ない亮太の怒った顔があった。
「何を吹き込まれたか知らないが、親友を傷つけて、気持ち良いか」
「え」
見ると、弥生が泣いていた。
私の中に言い様のない、気持ち悪さが広がっていく。
亮太は私を見据えたまま言葉を続ける。
「頭冷やせよ。お前、完全に自分を見失って……」
「もういい！」
私は亮太に怒鳴りつけると席を立った。
見ると、お嬢や乙女ちゃんまで非難の目を私に向けてる。
「何よ、皆して」
チリッと胸が痛んだ。けど後ろめたさ何て、あるはずない。だって、悪いのは弥生の方でしょ？！
「むっちゃん。捻くれすぎよ。何それ。被害妄想？」
「っ！」
お嬢の馬鹿にしたような言葉がとどめだった。
私は机を叩いて立ち上がると
「バッカみたい。付き合ってらんない。じゃね！」
席を立った。
怒りのまま、私は走り去る。
面白くない。面白くない。皆、弥生の味方して、十津川くん達の悪口言って、私が変わったのも一緒に喜んでくれないなんて！　もぅ、コイケンの皆なんていらない。
私はそう心に決めたのだった。

コンプレックスが偽る恋　１１

私は乱れた呼吸を整える様に、歩きながら色々考えた。いや、考えようとしたけど、何かが邪魔して考えられない。
確かに私は変われた。でも、私は本当にこんな私になりたかったのか？　ずっと見ない振りしていた疑問が弥生の一言で鮮明になったような気がした。
ふとショーウィンドウに映る自分を見た。ケバくて、友達を傷つけた私の姿がそこにあった。
気がつけば、あの夏休みに十津川くんとバッタリ出くわした本屋さんがすぐそこだった。商店街から近いから、昔は良く通っていたっけ。思えば、みんなあの瞬間から始まった。
私は何とはなしに店に入った。小さな店内は閑散としていた。奥のレジに小さなお婆ちゃんかチョコンと座ってる。お婆ちゃんは私に気がつくと、ニッコリ微笑んだ。
「あら、酒屋のむっちゃんじゃない？　綺麗になっちゃって～」
私を覚えててくれたんだ。驚きと同時に、少し嬉しくなって、レジに歩み寄る。
「お久し振りです。あ……」
私はお婆ちゃんが足に怪我をしてるのに気がついた。お婆ちゃんは、困った様な寂しい笑みで足をさする。
「これ？　こないだねぇ、万引きの男の子を注意したら突き飛ばされちゃってね」
心臓が破けそうな位痛む。
「いつ、ですか？」
嫌な予感に一気に喉が渇いた。
「八月の初め頃かね。でもまだ学生さんだったみたいだから、警察呼ぶのも可哀相かと思ってね」
お婆ちゃんはそう言うと、カウンターの引きだしから飴玉を出し

て、私の手を取るとその中に置いた。
「むっちゃん、もしお友達に金髪のピアスをした男の子がいたら、注意してやってくれないかい？　お婆ちゃんは、その子が悪い人間にならないか心配で……」
八月初め、金髪、ピアス……本屋での事は秘密。
茫然とした。嘘だ。十津川くんに限って悪い事なんて。
その時だった。携帯の着メロが流れる。十津川くんからだった。

十津川くんからの電話は、急用があるから急いで来て欲しいって内容だった。
場所はこの近くの、シャッターだらけの古い駅ビル。通称、幽霊ビルだ。電話の様子が只ならなかったから、私はお婆ちゃんへの挨拶もそこそこに飛び出した。
「きゃっ」
店を出た途端、何かにぶつかる。
「ったぁ」
「弥生！」
何と弥生だった。しりもちをついた弥生は、息をきらせて私を見上げてた。
「良かった。ここに入るの遠くからしか見なかったから、違ったらどうしようかと思って」
弥生は真っ赤な顔で立ち上がると、私に正面から向き合う。
「誤解されたままじゃ嫌だよ。ちゃんと話そ」
私は携帯を握り締める。
何？　私は誰を信じればいいの？　私を追いかけてくれた弥生？
私を呼んでる十津川くん？
また十津川くんからの着信が鳴る。
「私、行かなきゃ。十津川くんが待ってるもの」
だって、ずっとずっと好きだった。ずっとずっと見てるだけだった。ずっとずっと……。

その人が私を呼んでるの！　例え、彼に疑問がたくさんあっても私は行かなきゃ。
「だって、変だよ。十津川くん、むっちゃんが言う様に、本当に大学目指してるの？　どうして十津川くんの友達はむっちゃんの事、知ってたの？」
どうして私と弥生が友達なのをアスカは知ってた？
どうして本屋の事は秘密なの？
どうして？　どうして？　どう……。
押し込めていた疑問符が一気に噴出した。
「むっちゃん。冷静になって考えてよ！」
「わかってる！」
私は弥生に声をあげた。そう、変なのは始めから……。
「わかってるよ！　でも、悪い？　弥生にはわからないよ！　初めて好きな人と二人の時間ができて、秘密が持てて、誰かの特別になった嬉しさなんて！」
嘘でも、利用されてるとしても、気付きたくなんかなかった。気付かない振りさえしてれば、私は彼の隣りで笑ってられるんだもん。
「私、行くから」
「じゃ、私も行く！」
「好きにすれば」
私は何かを振り切る様に走り出した。
出来れば、弥生が私を諦めてくれるのを願って。

コンプレックスが偽る恋　１２

駅前に差し掛かった頃には、弥生の影は感じられなかった。たぶん、全力疾走に継ぐ全力疾走で、途中でついて来れなくなったのだろう。

幽霊ビルには何度か来た事がある。所謂溜まり場って奴だ。私はいつもの場所、一階の喫茶店跡に向かう。ここはどういうわけか、シャッターが開けれて電気も使える。そんなに汚くないから、閉まったのは最近なのかもしれない。

私は半分だけ開いたシャッターをくぐり、中に入る。

「どうしたの？」

走って来たので呼吸はかなり乱れていたけど、私は目の前の光景に息を飲み、呼吸する事を一瞬忘れた。

「な……」

中には血塗れの知らない高校生が二人倒れていた。それを、返り血なのか、血で染まった九頭先輩がまだ興奮してる様子でシュウに抑えられ座っている。

アスカはアキラと何か話しこんでいた。

「睦月、良かった」

十津川くんが私に気がつき駆け寄って来た。普通じゃない様子に、私の顔からも血の気が引く。

「これ……」

十津川くんは困った顔で溜め息をついて見せると、私の肩に腕を回し小声で説明を始めた。

「ちょっと色々あってさ」

「あたしをナンパして、断ったら脅して来たのよ！」

アスカが怒った口調で口を挟んだ。

「『お前、ナナの妹だろ』って、私には兄弟なんかいないっつーの」

え！？　私は耳を疑った。

確か、弥生の噂は弥生と同じ中学だったお姉ちゃんから聞いたって言ってなかった？
「で、アスカから俺らに連絡。こいつら生意気にもさ、九頭先輩見ても歯向かって来たからさ、先輩が……」
ボコボコにしたってわけか。先輩を見ると、猛り狂う内の凶暴な何かを、必死で抑えてるみたいだ。
「そこで、睦月に頼みなんだけどさ」
さらに十津川くんは私に顔を寄せた。
「死なれても面倒だから、第一発見者って事で救急車呼んで欲しいんだ。で、奴等が気がついたら、俺らの事、話さない様に釘をさして欲しいんだ。警察か病院に何か聞かれたら、知らないふりして欲しい」
つまり、先輩を匿うのに相手を脅して、この騒ぎの片棒を担がせるつもりなんだ。
私はチラリ、皆を見た。
いけない事だ。こんな事。でも、断れる空気じゃとてもない。どうしよう。私が俯いた時だった。
「むっちゃん、言う事聞く事ないよ。むっちゃんまで共犯になっちゃう」
「弥生！」
振り返ると、シャッターから覗く肩で息をする弥生の姿がそこにあった。
弥生はシャッターをくぐって中に入って来ると、私の手を握った。
「行こう」
「何だ？　てめぇ」
その弥生の手を十津川くんははたき落とすと、弥生の胸ぐらを掴んだ。弥生は青い顔をしてたけど、気丈に十津川くんを睨み返す。
「アンタこそ何よ。幼馴染みを悪い事に巻き込むんじゃないわよ」
少し声が震えてた。精一杯強がってるなんて、すぐにわかる。
十津川くんは眉を吊り上げると、

「お前さ、邪魔なんだよ。一之瀬弥生。睦月はな、もう俺らの仲間なんだ」
十津川くんはそう言って、弥生を掴んだまま私を振り返った。
「なぁ。そうだろ？　睦月」
私は唇を強く噛む。
弥生の私を信じて疑わない目が、痛かった。
私は、簡単に弥生を疑ってしまった。なのに弥生は、私を信じて、一人で危険を承知で飛び込んで来たのだ。
「私……」
十津川くんが好き。でも、でも……
「むっちゃん！」
弥生の声が心に響いた。
「弥生！」
私は十津川くんの手を弥生から引き離すと、弥生の手を取って走り出した。
「あっ！　お前ら！」
シャッターをくぐり、急いでビルの外に向かう。一歩外に出れば、人通りが多い。だったら追いつかれても下手な事は出来ないはずだし、運がよければ人込みに紛れて逃げ切れるかもしれない。
誰もいない薄暗いシャッター通りを、弥生と手を繋いで駆け抜ける。
後ろから何人かが追いかけてくる音が迫ってきた。さっきの血塗れの二人が脳裏に過ぎり、ゾッとする。でも、後少し。外の光が目の前！　手を伸ばせば扉に届きそう。そんな時だった。
「きゃあ！」
グイッと抗い様のない力が、私の腕を掴んだ。私達は勢い余って前のめりになり、思わず弥生の手を離してしまった。
「つ〜かまえた」
低い声は、血の匂いがした。
九頭先輩の赤い手が、私の腕を強く握り締めていた。

冷たい何かが背筋に走った。
先輩は、私の腕を締め上げると、顔を鼻先がつきそうなくらい近付ける。
「睦月。俺、今ふざけるのに付き合う余裕ないんだよ。鬼ごっこは終わりだ」
「いっ」
腕の骨が変な音がする。
弥生は、見るとアキラに後ろ手に腕を掴まれていた。
「先輩」
十津川くんが九頭の肩に手を置いた。九頭はしかめ面で頷き、私を十津川くんに突き出す。よろけて前のめりになった私を十津川くんは、柔らかく抱き留めた。
「なぁ睦月。今なら俺も一緒に謝ってやるし、一之瀬弥生も黙ってるなら逃がしてやれる様に頼んでやるよ」
嘘だ。十津川くんの目は嘘をついている。そんな事で私はともかく、弥生が只で済むはずがない。
「だから、さっき言ったみたいに」
十津川くんが微笑んだ。
大好きだった、少年みたいな笑顔。本当に、好き……だった。
「むっちゃん！」
弥生の悲痛な声が、ガランとしたビルに響いた。
「一之瀬弥生を助けたいだろ？」
十津川くんの甘い囁き。そうだ、取りあえず、今だけでも弥生を助けられるなら……。そう思い始めた時だった。
「むっちゃんから離れなさい！　この不良！」
何かが飛んで来て、十津川くんに当たった。
それはお嬢の鞄。私は扉を、光のある方を振り返る。
「待たせたわね」
あのお嬢が走って来たのか、ボサボサの髪で美しく微笑んだ。
「なんだ？　お前ら」

九頭が気色ばむ。お嬢の前に二つの大きな影。
「睦月と弥生のダチに決まってるだろうが」
動じない亮太に
「弥生から聞いたよ。警察と救急車がすぐに来るからね」
にこやかに携帯を見せる乙女ちゃん。
「皆……」
格好良過ぎだって。
私はコイケンのみんなを、子どもの頃に憬れたヒーローを見るような目で見つめた。そして、正直、以前あったお嬢の一件を思い出し、半ば安心し始めていたのだ。
九頭先輩の恐ろしさも知らずに。

コンプレックスが偽る恋　１３

私は安堵していた。
実際、弥生を掴まえていたアキラを始め、皆顔色を変えていたのだから。
シュウが十津川くんに「警察って、やばくね？」なんて耳打ちしてるのが聞こえた。
お嬢の時みたいに上手く行く。そう思ってた私は、気付いてなかった。九頭の顔色だけは微塵も変わってないのを。
九頭は皆を見据えたまま、戸惑ってるアスカに声を飛ばした。
「アスカ。こいつら誰かわかるか」
アスカは慌て携帯を取り出す。
「えと、睦月の時に調べたから……」
アスカは携帯画面と皆を見比べながら、口を動かす。
やっぱり、彼女は私の事を調べてたんだ。全ては十津川くんの本屋での事をもみ消すのに、私を仲間にする為に……。
アスカの顔が焦燥から、残忍な小悪魔の笑みに変わる。
「先輩。ラッキーかも」
そして、一人一人を見ながら
「四ッ谷猛。この夏に空手と陸上の二種目でインハイ予選に勝ち残ってる」
「へぇ。インハイね」
九頭はニヤリと乙女ちゃんを見た。
「二葉五月。八月からニュースターっていうモデル事務所と契約したばっかね」
「そりゃ、傷ついたら大変だろうなぁ」
含みのある言い方。
「そして五木亮太。空手大会全国三位で、あ、お兄さんがこの秋」
ちらり何故か弥生を見る。

「一之瀬弥生のお姉ちゃんと結婚予定ね」
！それは初めて聞く話だった。
亮太も弥生も、心なしか表情を曇らせてる。
「めでたい席は、守らなきゃなぁ」
「だから何だ」
亮太がニヤニヤする九頭の前に立った。九頭は亮太を覗きこみ。
「ここさ、俺の無敵エリアなんだ」
細い目をさらに細めると、携帯を取った。
私達は意味が判らず、ただ見守るしかない。
「あぁ、親父？　俺」
首を捻る私達を余所に、十津川くん達は意味が判ったみたいで、皆表情を和らげる。私達に不安が広がる。
「親父の所轄の……そう。幽霊ビルにさ、間違った通報がいったみたいだけど、ソレ、イタズラだから」
あ！
私達は嫌な予感に顔を見合わせる。もしかして、あの大きな家は……。
「そう。じゃ、ヨロシク」
九頭はそう言って携帯を切った。携帯のパタンと閉じる音がやけに耳についた。
九頭は不気味に優しい口調で言い放った。
「あぁ言い忘れてた。俺の親父、ここらの警察署の署長なんだ」
九頭は表情を変えた私達を楽しそうに眺め回す。
「ナオん時はさ、俺の無敵エリア外だったから……」
私を見る。私は悔しくて顔をしかめた。
「このブサイクを利用する事にしたんだ。ってか、俺、孝行息子だし？　あんまり親父使いたくないんだよね」
馴々しく亮太の肩に手を置く。
「だから今回も自分でケリつけるつもりだったのに、お前らが余計な事しやがって」

九頭の拳が亮太のお腹に食い込んだ。
「っく」
亮太はいきなりの衝撃になす術なく、崩れ落ちる。その亮太の手を九頭は思いっきり踏み付けた。亮太の顔が痛みに歪む。
廃ビルのその沈んだ空間は、攻撃的で私達を押し潰しそうだ。私は怖くなって来て、ただただ震えるしかなかった。
「俺、優しいからさぁ。チャンスやるよ」
九頭は亮太から足を外すと、腕を組む。
「俺、お前らみたいな友達ごっこしてる奴、ムカツクんだよね。だから」
私を見て、薄い唇を吊り上げた。
「睦月を置いて行け。元はと言えば、こいつが面倒の元凶だ」
ゆっくり私に歩み寄る。私は蛇に睨まれたみたいに、全く動けない。
「待ってください。睦月は……」
十津川くんが割って入った。九頭は彼すらも冷たく見つめる。
「あ？　お前、俺に意見するのか？」
「……」
十津川くんは俯く。九頭は嘲笑を浴びせた。そして皆を振り返る。
「インハイ、出たいだろ？　顔、傷つけたくないだろ？　結婚式、潰されたくないだろ？　なら、賢い選択は……わかるよな？」
九頭は首を傾げる。今や、全ては彼の掌の中にある。そんな気がした。

コンプレックスが偽る恋　１４

九頭は沈黙を楽しむように、にやつきながら首を鳴した。
亮太がゆっくり立ち上がり、皆がそれに気を取られた時だった。
「ふざけんじゃないわよ！」
「いてーっ」
沈黙をいきなり破る弥生の声。弥生はアキラの足を思いっきり踏んだらしい。
アキラが手を離した隙に、手を振りほどき、私の手をとって乙女ちゃんの後ろまで走る。お嬢は私達を抱き留め、乙女ちゃんは三人を守る様に立つ。
「むっちゃんを、友達を見捨てるわけないでしょ。バーカ」
弥生の威勢に、足を踏まれたアキラが怒りを露に一歩進み出る。
「ヤロっ女だと思って優しくしてりゃ、ナメやがって」
何かが光った。刃物の音がして飛び出たのは、ジャンピングナイフだ。
「九頭さん。やっちまいましょうよ」
「……そうだな」
九頭は無慈悲な声を響かせる。
「アスカは下がってろ。シュウ、ナオを見張っとけ」
あの血だらけの手をぶらぶら振りながら、亮太に詰め寄る。
「先輩！」
十津川くんの声は空しく通り過ぎる。亮太は怯みもしないで、九頭を睨み付けた。
「弥生の言うとおりだ。ここにいる全員、友達見捨てる奴なんかいねぇんだよ」
「はぁ？」
九頭が亮太の襟首を掴みあげる。
「俺らを潰せるもんなら潰してみろよ。このボンボンの馬鹿息子が」

ゴッ
固い物が打ち付けられる音がした。
私は怖くて目を瞑り、弥生に抱き付く。弥生の冷たくなった指先も震えていた。
「いい気になんなよ！」
何かがぶつかる音と、亮太の呻き声ばかりが聞こえた。
「お前もどけよ」
「断る」
すぐ後ろでアキラと乙女ちゃんの声。
指の隙間から見上げると、乙女ちゃんはまっすぐアキラを見つめ、両手を広げていた。心臓がバクバク音を立て、危険だと本能が警鐘をかきならす。けど、状況は好転なんかしてくれない。むしろ危険な匂いは濃くなり、緊張の空気は今にも弾けそうだ。
アキラはますます乙女ちゃんの動揺のない、堂々とした様子にいきりたっていた。
「ナイフをしまいなさい」
乙女ちゃんの穏やかな声に、張り詰めた緊張の糸がついに切れる。
「どけって言ってんだろが！」
「イヤーッ」
ナイフが思いっきり振り下ろされた。乙女ちゃんの腕をその切っ先で、とらえた、かに思えた。
瞬間、視界は目まぐるしく変化する。
「止めろ！」
鋭い声が飛んだ。十津川くんだった。
十津川くんがシュウを押し退け、アキラに飛び付いたのだ。
ナイフが床を滑っていく。けど、それには赤い物がついついて。
「……腕っ」
弥生の声に反射的に振り向く。そこには血に染まった腕を抑え、蹲る乙女ちゃんの姿。
「シュウ！　ナイフ拾え！」

九頭の檄に、シュウが雷に打たれたみたいな反応をして、ナイフを探し始めた。ナイフは、シャッターに当たり、転がっている。
私の視界からまた影が一つ消えた。
お嬢だ。お嬢はしなやかな腕を伸ばし、ナイフに飛び付いた。
ナイフに触れたのはシュウとほぼ同時。二人がもみ合う。
「やだ！　お嬢！　離して！」
私が叫んだ時だった。お嬢の顔にナイフが滑り、髪が一束落ちた。
「お前っ」
カッとした亮太が、九頭を振り払いシュウに掴みかかる。そして拳を振り上げた。
「亮太！　手は出すな」
叫んだのは乙女ちゃんだった。すんでの所で手が止まり、その亮太の脇腹を九頭の足がなぎ倒す。
それでも、お嬢はナイフを離さなかった。
「しつこいっ」
最後はシュウの指に噛み付いて奪いとった。
もう、皆ボロボロだ。
私は弥生にしがみつきながら、激しく後悔し自分の愚かさを嘆いた。
皆、私のせいで……。
「どうした？　全国三位なんだろ？　手を出せよ」
九頭は亮太の髪を掴み、顔を上げる。
亮太は強がって笑ってみせた。でも、その顔は腫れ上がり、所々血が流れてる。
「亮太！」
もう一度乙女ちゃんが叫んだ。
「わかってる！」
亮太は返すと、九頭にしがみつく。
「ここで殴ったら、こいつと同じレベルになっちまうからな」
「あ？」

威嚇する九頭に亮太はなをも言葉を続ける。
「いくらでもやれよ。その代わりなぁ」
亮太は逆に九頭の胸ぐらを掴み、顔を寄せた。
「これ以上俺のダチになんかしてみろ。お前が何だろうと、俺は地の果てまで追いかけてやる」
あんなに痛め付けられてるのに、全く揺るがない、低く強い声。
その威圧感に九頭も圧倒され始める。
「いいか。俺はしつこいぞ。覚悟出来るんだろうなぁ」
「離せ！」
九頭が初めて怯えの色をみせ、亮太を殴った。
けど、亮太は手を離さない。
「離せ！　離せ！　離せ！」
打ち下ろされる拳に、身動ぎもしない。他の皆も、そんな亮太に圧倒され動けない。
「離……せっ」
九頭の拳が亮太の額を割って、鮮血が飛び散った時だった。
遠くから救急車のサイレン音がした。
「……くそっ」
九頭は舌打ちすると、亮太はようやく手を離す。
「睦月くらい、くれてやるよ。そんかし、これ以上俺らに関わるな」
九頭は唾を床に掃き捨てると、顎をしゃくって仲間に合図した。
シュウもアスカも、十津川くんから解放されたアキラも、サイレンから逃げる様に九頭の後を追った。
四人の姿が見えなくなると、ようやくホッとして、亮太は床にへたりこんだ。
弥生がすぐに駆け寄る。私は、残った十津川くんを見た。
十津川くんは固い表情のまま呟くように言った。
「お前らも逃げろ。救急に見つかれば奥の奴等の事もあるから、面倒な事になる。怪我は余所で治せ」
「十津川くんは」

十津川くんは床を見つめたまま
「……俺は残らないといけない」
「でも」
残していけない。だって、残れば十津川くんが犯人にされちゃう！
「早く行け！」
「むっちゃん」
お嬢が私の肩を抱いた。
サイレンはすぐそこまで来ていた。
「行こう！」
亮太を乙女ちゃんと担ぐ弥生。
「でも！」
「行くよ！」
お嬢が強引に私を引っ張る。私は引きずられる様に、ビルを後にした。
十津川くんの、寂しそうな影を残して。

コンプレックスが偽る恋　１５

私達はそれから、亮太達が良く知るっていう駅前の病院に飛び込んだ。
空手での怪我はいつもここでお世話になってるとかで、亮太と乙女ちゃんは顔パスだった。
お嬢の怪我は擦傷で、跡は残らないだろうって。ただ、髪がバッサリ一部短くなっちゃってた。お嬢は「そろそろイメチェンする予定だったから、ちょうど良かった」何て笑い飛ばしたけど、あんなに髪の手入れもキチンとしてた彼女だ。嘘に決まっていた。
乙女ちゃんは五針縫う怪我だけど、神経や筋肉の損傷は無く、傷さえ塞がればスポーツしても問題はないみたい。ただ、亮太は……。
私はベッドに横たわる亮太の傍らに座り、膝の上で両手を強く握り締めていた。
涙がとめどなく流れる。
亮太はあばら一本のひびと額を三針縫う怪我をしていた。他にも打撲や裂傷だらけで、亮太自身が頼みこまなかったら、お医者さんも警察に届ける所だった。
私は、本当に、馬鹿だ。こんな、こんな仲間を疑って、傷つけて、巻き込んで……。
「ごめんね。ごめ……」
夏休み中、調子にのって遊び回ってた私の卑屈な猜疑心と、セコい自己欺瞞が夏中、ううん、ずっと前から積み重ねられてた皆の努力を、台無しにしかけたんだ。
私は自分の不甲斐なさに、顔を上げられなかった。
「むっちゃん」
弥生の手が優しく私をさする。
弥生が危険を顧みず飛び込んでくれなかったら、今頃私は……。
そう　弥生はあんな酷い事言った私を見捨てず、最後まで信じてく

れたんだ。私は一体何をしてたんだろう。
「ごめんなさい。皆……」
顔を覆うと、堰を切った様に色んな物が溢れ出て来た。
「私、皆の夢すら私は奪う所だった。本当に、ごめんなさい。本当に……」
「睦月」
誰かがその私の手を握った。
亮太の手だった。
「ダチだろ？」
「亮太」
亮太は笑っていた。
私は、もう何も言えなくて……。
「むっちゃん」
弥生の声に、私は彼女を見つめる。
弥生は明るい声で、私にこう言ってくれた。
「おかえり」

あれから私は、髪の色を戻し、親にも心配かけた事を謝った。
九頭達からの連絡は全く途絶え、皆にも何もなかったみたい。
ただ十津川くんは、あの日以来、携帯も繋がらないし学校にもきてなかった。
最後に見た彼の寂しげな背中が、胸を締め付ける。私は秋の気配がしだした夜風に、星空を窓から見上げてた。
その時
「睦月～。直輝くんよ～」
「え！」
私は顔を上げ、慌て階段を駆け降りる。
母は何やら嬉しそうだ。
「直輝くん、大きくなったわね。家に来るの幼稚園以来じゃない？」
そうか、母は彼があのバイクだとは知らなかったんだ。でも、前

は彼ってわからなかったのに、どうして？
その疑問はすぐ解けた。
「よぉ」
「十津川くん」
バイクじゃなく、自転車の前に立ってたのは、髪を短くして黒くした彼だった。
「ちょっと、いいか？」
「うん」
なにやらニコニコ見送る母を背に、私達は近くの公園に向かった。
ベンチに座るまで、私達は無言だった。
「……髪」
あまりの沈黙に、私が切り出す。十津川くんは苦笑いして、自分の頭を撫でた。
「あぁ。やっぱ変かな。俺さ、アイツらとは切ったんだ」
そう言って、十津川くんは私に頭を下げた。
「ごめん。俺、嘘ばっかついて」
それから、視線を外して天を仰ぐ。
「あれからさ、奥の二人の事で色々あって、九頭の身代わりになる代わりにって、抜けさせて貰ったんだ。もちろん、タダじゃなかったけど」
「じゃ、バイクは」
「売った。その金で手をうってもらった。ま、安いもんさ」
寂しそうに笑う。私ももうバイクに乗れないのは、少し寂しい気がした。
「そっか」
「でもさ。お前、いいよな。あんなダチがいてさ」
十津川くんはそう言うと、溜め息を一つ洩らす。その横顔は、やっぱり嫌いにはなれなくて……。
「今度、皆を紹介するよ。きっと、いい友達になれるよ」
十津川くんは驚いた顔をして私を見つめる。

「俺が？」
私は頷いた。きっと、皆なら大丈夫だ。
そして、初めて私は彼の前で緊張のない、笑顔になった。
「ただし、一緒に本屋のお婆ちゃんに謝りに行ってくれたらね」
十津川くんの顔が、秋風にくすぐったそうに和らいだ。

十津川くんは、それ以来、たまに私達と一緒する。
ただ、コイケンに入るのだけは勘弁って……。でも近々乙女ちゃんの家の道場に通う予定らしい。
結局、私達の仲は幼馴染みのままから進展の気配はない。
私は地味な私に戻った。
けど眼鏡は外したままだ。
少し視界が開けた世界には、前よりハッキリ大切な物が見える気がした。
目を閉じると吹き行く優しい風を感じる。
季節は惑わさんばかりの蜃気楼を魅せた暑い夏が過ぎ、天高く果てない透明の秋が訪れようとしていた。

部長日誌

人を好きになる前に
自分を好きになる事が大切

友人や親の言葉が素直に聞けないのは、視野が狭くなってる危険あり。一度、冷静になるべし。

好きな人にも、間違った事は、勇気を持って注意するべし。それが本当の誠意。

自分で自分の限界を決めない。

追記
過ちを認め正す勇気は、
自分の視界と可能性を広げてくれる。

過去に縛られる恋　1

「いつもありがとう。彼女も、君のクッキー大好きなんだ」
「え？」
「あぁ彼女。出来たんだ。弥生ちゃんには、告白する勇気くれて、感謝してる」
「良かった、良かったですね。じゃ、今度は彼女さんの分も焼きますね。クッキー…」
「ありがとう。喜ぶよ。弥生ちゃんは本当に良い人だね」

一　良い人、いい人、イイ……ヒト……

私は泣きながら目が覚めた。
好きだった、ボランティアで知り合った大学生の夢だった。これが本当に夢なら嬉しいけど、聞いた台詞は昨日、現実に耳にしたものだ。
私って、どうしていつもこぅなんだろう。仲良くなって、何でも話してくれる様になって、そして、いつも気がつけば相手の親友になり恋の応援をしてるか、二股かけられるか。

一　イイヒト

必ず貼られるレッテルは、私のどこが悪いのか、私に何が足りないのか、教えてくれない
ぼんやりする頭を抱えて、時計を見る。そうか今日はコイケンの日だ。皆に報告しなきゃ。
私は涙を拭うと、うんと背を伸ばし、朝の静かな空気を吸い込んだ。

放課後、私が部室に入ると、朝に私からすでに話を聞いてるむっちゃん以外にも、皆揃っていた。
「部長が一番遅いって、どういう事よ」
からかい半分のお嬢に、亮太は私の寝不足で充血した目をさして
「あぁ言う事だろ」
いつもの冷たい呆れ口調だ。
私は亮太を睨みながら、席に着く。
お嬢は新しい髪型になり、ますます綺麗。でも、六本木くんの事から恋の話はない。眼鏡を止めたむっちゃんも、十津川くんとは相変わらずみたいだし、乙女ちゃんは八木沼先輩の失恋以来、部活が忙しくて恋する隙間がない。
私もこの様だし、残るは……。
私は亮太をチラリと見た。思いがけず目が合い、亮太は憮然とする。
「何だよ」
空手以外の空いた時間にバイトばかりしてるのは、ある人の為だ。私は知っている。私は何だかむかついて
「今日は五木亮太から報告してもらいましょうね〜」
と声を一つ高くした。
「はぁ？」
すます私に、亮太はしかめ面。
「いいんじゃない。いい加減、亮太の話聞きたいし」
お嬢が面白がる。
「そうよね。私も聞きたい」
むっちゃんも身を乗出す。
亮太は珍しく慌てアタフタする。いい気味だ。私は含み笑いした。
「俺は別に……。猛、助けてくれよ」
弱った亮太に、乙女ちゃんもにこやかに
「亮太もコイケンの部員なんでしょ〜」
ヨシヨシ、あとヒト押しだ。

私は部日誌をわざと音を立てて机に置くと
「さて、五木亮太くん」
改めて亮太を指名した、時だった。
「遅れてすまん」
「先生」
まさにバッドタイミングに現れたのは百崎先生だった。私は心の中で、舌打ちする。皆も、やっと出来た亮太の恋バナ暴露のチャンスを逃し、同じ様な顔をしていた。
まぁ亮太に限っては、その白衣は救世主か天使に見えただろうけど。
「なんだ、そんなに怒る事ないだろう」
百崎先生は、私達が遅刻に怒ってると勘違い。苦笑いすると、半身そらす。
「まぁ、許せ。新入部員を二人も連れて来てやったんだから。ほら来い」
新入部員？　この時期に？　私は首を傾げる。
皆も初耳らしい。
私はじっとドアの向こうの影が姿を見せるのを待った。
そして、出て来たのは……。
「あ」
皆、二つの顔のうちの一つに言葉を失った。
だって、あまりに予想外の人の顔だったんだもの。
コイケンは新たな展開を迎えようとしていた。

過去に縛られる恋　2

先生の後ろから出て来たのは、下級生の女子二名だった。
皆、特に乙女ちゃんが言葉なく見つめる中、二人は先生に従い部室に入ってくる。
「ま、自己紹介と一言くらい貰って、席について貰おうか」
事情の知らない先生は、そう言うといつものパイプ椅子にかけた。
二人は顔を見合わせると、私達の知る顔の方が進み出た。
見ると乙女ちゃんの顔が引きつってる。
彼女は乙女ちゃんだけを見つめ、軽く頭を下げた。
「一年。八木沼凛です。その……好きな人を追いかけて、こちらに来ました。ヨロシクお願いします」
八木沼凛。あの乙女ちゃんを振った八木沼先輩の妹だ。あの兄にキューピットを頼んで、ダブルデートに持ち込んだ、見た目大人しそうで、乙女ちゃんの実家まで追っかけする女の子。
「あの……」
乙女ちゃんが何か言いかけた時、その可憐な少女はニッコリ微笑んだ。
「知ってます。四ッ谷先輩が兄を好きだったって、兄を問い詰めて吐かせましたから。でも大丈夫。私、頑張ります」
ハッキリと迷いない自信に満ちた声。本人満足。皆唖然。相手は沈黙。
百崎先生は、さすがに事態を察して、もう一人にふった。
もう一人は、彼女のインパクトに気付かなかったけど、黒髪が綺麗なかなりの日本美人。凛ちゃんが太陽なら、月といった感じだ。
彼女はそそと進むと、やはりじっと誰かを見据えた。
「一年の千堂卯月と申します。私も凛と同じ理由で入部を希望しました」
「え……」

私は胸の苦しさを覚え、彼女の視線の先を辿る。
「五木先輩」
澄んでよく通る声。
見ると、絵本でみる、かぐや姫みたいな美しい笑み。
「私、先輩が好きです」
耳に響いた声に、私は俄かにそれが現実のものと認識出来ないでいた。
二人は固まる私達に、輝かんばかりの笑顔を向ける。
私は部長って立場を忘れて、彼女達、特に卯月さんに思わず口走ってしまった。
「ダメよ。亮太は……」
「どうしてですか？」
卯月さんはあからさまに険しい表情になり、私を見つめる。
「部内の恋愛が禁止とかじゃないんですよね」
「そうなんだけど」
少し攻撃的な言い方に、私は言葉を詰まらせる。
確かに、ダメ……じゃない。でも、亮太は……。
私は下唇を噛んだ。自分でも嫌になるくらい、胸が苦しくなる。
「千堂だっけ」
その時、亮太が立ち上がった。
まっすぐ亮太に見つめられた卯月さんは、微かに頬に紅をさす。
「俺が目的なら、入部は無理だ」
「どうしてですか？」
卯月さんの顔が一変する。対する亮太は、眉一つ動かさなかった。
「俺には好きな人がいる。だから、お前が入部しても無意味だからだよ」
亮太の揺るぎない声は、揺るぎない想いそのものだ。
私は再び襲う胸の痛みに顔を歪めた。だって、亮太が好きなのは……。
「そんなの、知ってます！」

卯月さんが声をあげた。
そして、涙を浮かべた目で気丈に亮太をとらえる。
「先輩が好きなのは」
私は聞きたくなかった。
無意識に目を伏せる。
そう、亮太が好きなのは……。
「一之瀬カンナ。部長のお姉さんで、この秋先輩のお兄さんと結婚する人ですよね」
どよめきに、私は息を飲む。
彼女の言う通り、亮太の好きな人は私のお姉ちゃん。そして亮太のお兄さんと結婚する人。
亮太は、決して叶える事が出来ない恋をしているのだ。

過去に縛られる恋　3

「にしてもさ～、ビックリしたよね」
お嬢が癖なのか、ストローを回しながら言う。
むっちゃんも、アイスを頬張りながら頷いた。
私達は今、三人でいつものマックにいる。名目は私の第五回（！）失恋残念会なんだけど、話題はもっぱら新入部員と亮太の事だった。
ちなみに、急だったから新入部員歓迎会は週末にのばした。
あれから亮太は、何にも言わないで「バイトあるから」って部室を出て行ってしまった。
凛ちゃんは、陸上部のマネージャーもするとかで、ガッツリ乙女ちゃん包囲網を広げてて、乙女ちゃんは「今日は陸上部に出ない日だから」って、亮太の後を追うように出て行った。
「弥生は知ってたんだ」
「まぁね」
面白くない。私は口を尖らせて頷いた。
でも、変だ……私。
卯月さんが言う前までは、私自身、同じ様に亮太の事を暴露しようとしてたのに、何であの時、聞きたくないって思ったんだろう。
「本当っお騒がせよね～」
お嬢の言葉に
「でも、二人とも偉いよね。相手に好きな人がいるの知ってて、でも諦めないで、ダメモトでもなくて、ちゃんとぶつかるんだもの」
むっちゃんがぼそっと言った。
私はその言葉に、何か痛みみたいな感覚を覚える。
「コイケンの部員になるなら、応援してあげなきゃね」
むっちゃんの言葉は、失恋よりも重く感じた。
家に戻ると、玄関の前に知ってる車が停まっていた。

私のお腹がキュウって痛くなる。
案の定、玄関には父の物じゃない男物の靴がキッチリ揃えられていた。
「ただいま〜」
私はなるべく居間から見えない様に、家に上がると二階の自室に向かおうとした。
「あ、弥生ちゃん。おかえり〜」
おっとりしたメゾソプラノの声に、私は首を竦め次いで肩越しにその人物を振り返る。
「ただいま。お姉ちゃん、今日は早かったんだ。お兄さんもいらっしゃい」
「お邪魔してます」
幸せそうな笑顔の姉の傍らに座る、やっぱり幸せそうな顔の男性は私に優しい声をかけた。
そう、これが亮太の好きな人と、その結婚相手で亮太の兄の慶太さんだ。
姉は私より五つ上。
専門学校を出て、幼児教室の先生をしてる。
長い緩やかな髪に、白い肌。大きな瞳は長い睫毛が降りていていつも穏やかに微笑む、妹の私が言うのもなんだけど雰囲気のある美人だ。
私とはまるで違う。
一方、慶太さんも亮太とは全然違うタイプ。
空手馬鹿の亮太と違い、お兄さんは剣道の有段者の上、有名国立大出のエリート弁護士でなかなかのイケメンときてる。私は詳しくないけど、学生のうちに司法試験にパスした秀才らしい。
亮太は幼い頃から姉に憧れ、兄を尊敬してた。
けど、二人の結婚どころか三年も付き合ってたなんて、知ったのは私達二人ともつい最近で……。
なのに亮太は……。

亮太の事を考えると、胸が疼いた。
「ごゆっくり」
私は頭を下げると、足早に自室へ駆け込んだ。
小さい頃は乙女ちゃんと五人で良く遊んだのに、結婚が決まってからは、二人は知らない人みたいだ。
「……」
私はベッドに倒れ込むと、胸のわだかまりを吐き出す様に息をついた。
けど、そんな事でこのシコリは無くなりそうにはなかった。

過去に縛られる恋　4

「……さん。……之瀬さ……」
ポンと誰かに肩を叩かれて、私は我にかえった。見ると、困った顔をした同じボランティア部の部員、五十嵐くんが私を見ていた。
そうだ私、今、ボランティア部の部活の真っ最中だったんだ。清掃活動中にゴミ袋を握り締めたまま惚けてしまってたみたい。
「大丈夫？」
「ごめん、ごめん」
私は苦笑いすると、慌てゴミをまとめて袋に入れた。
「あれ？」
周りに人影がない。
「皆、とっくにあがったよ。今日は自由解散だったから」
「そっか」
私はなんだか拍子抜けして、ゴミ袋を括った。それを五十嵐くんが私からヒョイと取り上げる。
「一之瀬さんさ、この後予定ある？」
人の良い笑顔。五十嵐君は同学年で、ボランティア部には珍しい男子だ。あんまり今まで親しくは話した事なかったけど……。
また、ふと亮太の事が頭に浮かんだ。お姉ちゃんの式が近付くにつれ、最近はこんな調子だ。ったく、新しい恋も探せないじゃない。
「一之瀬さん？」
「あ、うん」
私はまたハッとさせられ、苦笑い。まぁ、たまには気晴らしもいっか。
「大丈夫。どっかでお茶する？」
私の笑顔に、五十嵐君も笑顔で頷いた。
五十嵐君との会話は意外に弾んだ。

初めて入ったファミレスで、気がついたら二時間も話し込んでて、外は暗くなりかけてた。
失恋や、亮太の事があったから、最近こんなに気持ち良く誰かとお喋りできたの、久しぶりだった。
「そろそろ帰らなきゃ」
私がそう、鞄に手をかけた時だった。
「一之瀬さん。今、好きな人いるの？」
突然の質問。私はキョトンとしたが、コイケンやってるとこの質問って良くされるんだよね。いい加減、成果でないと、『コイケンの部員になったら一生恋人出来ない』なんてジンクスができちゃいそう。
私は眉を寄せて、笑ってみせた。
「あの……ついこの間フラれたっていうか、好きな人に彼女が出来ちゃったとこ。アハハ。ま、これはコイケンの実力じゃないから。誤解しないでね」
私は頭をかいて外に視線をそらす。
しばらくの沈黙。あぁ、気まずい。きっと、五十嵐君は優しいからリアクションに困っちゃってるんだ。弱ったなぁ……そりゃ、失恋の傷は浅いとは言わないけど、さっさと笑い飛ばして忘れちゃいたいくらいなのに……。
「あのね、五十嵐く……」
「良かった」
「へ？」
私は耳を疑って五十嵐君を見つめた。
五十嵐君は慌て手をふり
「いや、その……一之瀬さんが失恋して良かったじゃなくて……」
意味がわかんない。別に気は悪くしなかったけど、疑問符が私に彼を凝視させた。
五十嵐君は、戸惑いの表情で視線を彷徨わせていたが、その瞳に決意が浮かんだ時、私をまっすぐ見つめた。

「俺、好きなんです」
「何が？」
私はまだ合点がいかない。
五十嵐君は、少し頬を上気させると、私の手を掴んで、ハッキリ言い放った。
「一之瀬さん。俺は一之瀬弥生さん、君が好きなんです。だから、付き合ってください」
「はい？」
真っ直ぐに見つめる五十嵐君の視線に、目が点になって言葉を失う私。
なに？　え？　どゆこと??
生まれて初めての告白は、突然すぎて、私は喜ぶどころか何一つ反応出来なかった。

過去に縛られる恋　5

私は何回瞬きしただろう。時間が経つにつれ、状況が少しずつ輪郭を明確にしていくけど、それに比例して心拍数も上がっていく。
「わぁっ」
私はかなりの間の後、手を振りほどくと、アタフタと撤収準備を始めた。
何だ？　何なんだ？　え？　私、今、告られた！？
「あの……と、とにかく」
何がとにかくなんだ？　私。
「今日は帰るね。その、ありがとう」
って、それじゃ、ＯＫみたいじゃん。
「あ、えと。返事、また今度でいい？」
「いいよ」
私とは対照的に落ち着いた五十嵐君。
「あ、送るよ。もう外、暗いし」
五十嵐君が立とうとするのを、私はオーバーアクションで両手を振る。
「いい。いいから。本当に大丈夫。大丈夫よ」
そして、何とか立ち上がると
「じゃ、また明日」
「うん。明日」
私はへへって、変な笑顔に変な汗をかくと、その場から逃出した。

どうしよう、どうしよう……亮太ぁ～！
私は泣きそうになりながら走った。
何故か、無性に亮太に会いたくて、気がついたら、空手道場のある乙女ちゃんの家まで来てた。
私は乱れた呼吸を整えると、道場の方にまわる。

亮太の顔が見たい。理由はわからないけど、私は何かに急かされる様に彼の姿を探した。
道場では、社会人の人に混じって、何人か高校生もいた。
「あれ？　弥生じゃん」
気がついて駆け寄ってきてくれたのは、小さい子を相手にしていた乙女ちゃんだった。私は急に恥ずかしくなって、他の人から隠れる様にして、手だけ振る。
「どうしたの。珍しい」
「あの」
一瞬迷った。でも、せっかくここまできたんだ、何もしないで帰るのも変だし。私は一呼吸を置くと、乙女ちゃんの背中の向こうにある道場の中を気にしながら訊いた。
「亮太、いる？」
乙女ちゃんは首を傾げる。
「今日はバイトだからって、早くあがったよ」
「バイト」
ずんと胸に重いものを感じた。
バイト、もう行ってるんだ。むっちゃんの一件での怪我だって、まだ完治してないのに……。
「夏辺りから、また増やしたみたいね。バイト」
乙女ちゃんは、浮かない私の表情に、小さく溜め息を洩らす。
「亮太は一度決めたら曲げないから」
「うん」
「それより、急用？」
私の気持ちは、何だかすっかりテンション下げてしまってた。
私は力なく笑うと
「わかんない。今日はいいや。じゃ、明日」
ポカンとする乙女ちゃんを置いて、私は道場を足を引きずりながら出た。

私、何、テンパってたんだろ。別に亮太に一番に報告する必要ないし。ってか、何で亮太に会いたかったんだっけ？
私は私自身に首を捻る。けど、適格な答えはすぐには見つかりそうになかった。
まぁ、いいや。
「たぶんパニクってたのね」
私は半ば無理矢理、自分に納得させると、家路についた。

私はその夜、眠りに付く前に、なんとなくアルバムを開いてみた。色褪せた写真には、まだ幼い笑顔の私達がいた。
亮太と私と乙女ちゃんは物心ついた時からの幼馴染み。家族ぐるみの付き合いで、三家族合わせて子どもが九人、兄弟みたいに育った。
亮太の気持ちを知ったのは、小学三年くらいだったかな。
乙女ちゃんのお姉ちゃん達や私も入れて、バレンタインにたくさんのチョコを貰う中、亮太はカンナお姉ちゃんの分だけ、凄く大切にしてた。
亮太から直接聞いたわけじゃないけど、それから態度とか見てたら、なんとなくそうなのかなって。
あれはちょうど半年前だったかな。慶太さんとお姉ちゃんが婚約した日。ちょっとしたミスで、亮太は婚約指輪を、お姉ちゃんの指に治まる前に無くしてしまった。
バイトはその指輪を買い直す為なんでしょ？
慶太さんも、お姉ちゃんも、もぅ良いって言ってるのに、馬鹿だから責任感じちゃって。
私は指先で写真の亮太を弾いた。
馬鹿だ。好きな人が他の男から貰った婚約指輪を取り戻すために、汗をかき、時間を犠牲にするなんて。そんな奴はアンタしかいないよ。そんな事したって、想いは伝える事すら出来ないのは、自分だって判ってるくせに……。

また、胸の辺りが苦しくなる。
「っとに……亮太のアホ」
私はアルバムを閉じると、布団を頭から被った。

過去に縛られる恋　6

新入部員歓迎会は、二つ駅向こうに出来た新しいショッピングモールにした。最上階がアミューズメント階になっていて、カラオケやボウリングとかあって、屋上には大きな観覧車があるのだ。

亮太はバイトって断りかけたけど、百崎先生まで出てくれるのにって私がゴネたから、五時までって約束で参加になった。

新入部員の二人は、明らかに気合い入ってた。

凛ちゃんは、可愛らしく秋色のワンピに、白いブーツが似合ってる。待ち合わせで乙女ちゃんを見つけると、いち早く隣りをキープしてた。聞けば、陸上部でも部内で半ば恋人同士って認識されてるくらい、ラブラブ光線出しまくりなんだとか。そのせいで乙女ちゃん最近疲れてるみたい。せっかくインハイ出場決めたのに……。私は凛ちゃんに腕を絡められ、引きつり笑いの乙女ちゃんを少し気の毒に思った。

一方、卯月さんは、スラリと黒のチェニックを着こなしている。亮太にベッタリではないけど、隣りはやっぱりキープみたい。

「ボウリング、レーン取れたよ〜」

お嬢とむっちゃんが走って来た。

そして、お嬢は私に耳打ちする。

「さてここは一発、先輩の偉大さを見せつけるわよっ」

ボウリングくらいで、偉大さ云々は疑問だったけど。

「よしっ。絶対勝とう！」

五十嵐君の事でモヤモヤしてた私は、「オー！」なんて元気良く声を張り上げた。

ま、空元気だったんだけど。

「って、何でこうなるかなぁ」

苛ついたお嬢の声。

チームは私・お嬢・むっちゃん・先生組
対
亮太・乙女ちゃん・凛ちゃん・卯月さん組
結果は、お嬢の声が示す様に向こうの圧勝だった。
「そんなの言っても、お嬢が一番スコア低いじゃない」
「何よ。むっちゃんだって～」
確かにうちは惨い。まともに点を稼いだのは先生くらいだ。
考えたら、男子を二人とも向こうにやる必要なかったじゃん。乙女ちゃんを普段、男子って意識してないから……誤算だった。
しかも下手くそな凛ちゃんは乙女ちゃんが、何とボウリング初挑戦っていう卯月さんには亮太がサポートについて、向こうチームは点を引き離した途中からは完全に違う世界。傍目には私達とは別グループのダブルデートに見えた。
「昼飯食うか」
先生が喧々囂々する私達に聞いた。
お嬢はなんだかムキになり
「次はカラオケ、カラオケ行きましょう！　昼はそこでいいです」
そして不敵に笑い、腕を組む。
「いい？　新入部員。カラオケ一番点が低い奴が、高い奴のカラオケ代奢りだからね」
凛ちゃんはそう言われて、何食わぬ顔で乙女ちゃんに腕を絡めると小首を傾げた。
「全然良いですけど、これって歓迎会ですよね？」
「あったり前。これがコイケンでのカラオケルールなのよ」
お嬢、ふんぞりかえって言うけど、そんなルール、うちにあったっけ？
「皆でカラオケ、初めてなのにね」
むっちゃんが私に耳打ち。私は苦笑して頷いた。
「じゃ、私と五木先輩でカラオケの部屋取って来ます。皆さん、この片付けお願い出来ますね」

卯月さんの声に、私はハッとして亮太の方を見た。でも、卯月さんは返事を待たず、さっさと亮太を連れていってしまい、私は口を挟むタイミングを無くしてしまった。

「凛ちゃんもだけど、卯月さんも頑張ってるよね」

むっちゃんの言葉に、私は小さく頷いて二人を見送った。

完全に新入部員のペースだ。私はカラオケを待たずして帰りたい気分になっていた。

過去に縛られる恋　7

私達がボウリング場から撤収しようと、シューズを返してる時だった。
「あれ？　萬田じゃん。久しぶり～」
誰かの声がして、皆一斉に振り向く。そこには知らない男の人が親しげに手をこちら向けて上げていた。
でも、萬田って？　人違いかな？　私達が顔を見合わせた時だった。
「あぁ。久しぶりだな」
「えぇ？」
何と答えたのは先生だった。
先生は少し苦笑いをして、両手をポケットに入れたまま男性に歩み寄る。
でも、さっき『萬田』って呼んだよね？　先生は『百崎』でしょ？
私が皆を振り返ると、皆も同じ様に首を捻っていた。どういう事なんだろう？
先生が男性と話しを終えた。
「待たせたな。大学時代の友人だったんだ」
笑う先生は何にもなかったかの様だ。
たまらずお嬢が口を開く。
「先生。さっきの人、先生を『萬田』って」
先生の答えを待つ皆の視線に、先生は肩をすくめてみせた。
そして、少しはにかむと
「あぁ、それ」
逡巡し困った様に眉を寄せる。
「それは五年前の私の旧姓」
「え……どういう？」
私は混乱して、思わず口をさらなる疑問がついて出た。

先生は前髪をかき上げる。そして先生らしくない曖昧な笑みを浮かべると唇をほとんど動かさずに答えた。
「結婚したんだ。五年前に」
それは、全く予想もしてなかった答えだった。

それ以上は、なんとなく聞き辛くて、先生の事はそれ以上詳しくわからなかった。
結婚した、苗字もそのままって、じゃ、旦那さんがいるって事でしょ？　でも、今までそんな話全くしなかったし、第一、部が発足する時、先生は上手くいかない恋を自分もしてるっていってたはず。じゃ、どういう事なの？
思わず不穏な風に勘ぐりそうになる思考を、私は無理矢理中断した。それは考えるだけって言っても、やっぱり、先生に悪い気がしたから。

カラオケは案の定と言うか、何と言うか……。お約束通り、お嬢と凛ちゃんのバトルで白熱していた。二人とも上手いんだけど、次々に入れていくもんだから、圧倒されちゃって。だから、私やむっちゃんは早々に食べるに専念する事に決めた。
ふと見ると、亮太は卯月さんと仲良く……かどうかはわからないけど、二人で曲を選んでいた。何だか私はそれを見るのが嫌で、むっちゃんの方を向く。
そうだ、皆に報告する前にむっちゃんに話しておいてもいいかも。
「むっちゃん。私ね……」
私はピラフを食べてたスプーンを置くと、フライドポテトに手を伸ばしてるむっちゃんに声をかけた。
「何？」
「うん」
何から話そう？　私は少し考えてから、まずは結論からって事にした。

「私ね、ボランティア部の五十嵐君に告白されたの」
「へ〜。て、えぇ？　告白された！？」
ガチャン
むっちゃんが目をむいて私を凝視。驚いた拍子にお皿が踊った。
落ちなかったのは、幸いだけどそのせいで皆の注目を集めてしまったみたい。
私は顔を歪めた。
「何？　告白されたって、何よ！」
歌ってる最中だったお嬢が、マイクを持ったまま聞いて来た。
もはや、ごまかせない感じ……。亮太を見ると、キョトンとした顔をしてた。
「ごめん。弥生」
むっちゃんの声に、私は首を振って
「いいよ。どうせ皆に報告するつもりだったから」
チラリ亮太を見た。なんとなく彼のリアクションが気になる。
「黙っててごめん。私、この間、ボランティア部の五十嵐君に告白されたの」
言葉を無くす皆。狭い部屋には、場違いなハイテンポの曲だけが流れていた。

過去に縛られる恋　8

変な沈黙を破ったのは、意外にも卯月さんだった。卯月さんは、私を見て
「残念です」
言葉ほど残念そうな顔をしないで、そう言った。
「アンタ！　どういう意味よ」
お嬢がまだマイク持ったまま問い質す。卯月さんは、その質問事態が意外と言う風にお嬢を見つめ
「だって、一人でも両想いになったら、部は解散なんですよね？私と凛は入ったばっかりなのにって」
あ、忘れてた。そういえば、そんな部則があったっけ。
部を作る時、学校側からなかなか了解とれなくて、学校側との交渉でそんな部則を作らされたんだ。
「だから、部長がＯＫしちゃえば、両想い成立。解散ですよね」
卯月さんの質問は、質問じゃなく尋問に近かった。私の返事はどうなのかを聞く。私はまた、亮太をみた。卯月さんの隣りで、腕を組んで外を見てる。
何よ興味なくたって、話くらいまともに聞いてよね。
私はむかついて、つい口走った。
「五十嵐君の事、意識した事なかったから、返事は待って貰えるなら、そうするつもり」
「そうなんですか」
何故かさっきより残念がる卯月さん。それでも亮太は外を見たままだ。
私は半ば当てつけにこう付け足した。
「でも、ＯＫするかも。そしたら、今度は皆にすぐ報告します」
私はそう言い切ると、烏龍茶を一気飲みした。
亮太はやっぱり、こっちは向いてくれなかった。

カラオケは、結局、決着がつかず、先生がおごってくれた。
そろそろ解散って感じになった時、後ろから凛ちゃんの声がした。
「せっかくですし、観覧車に乗りませんか？」
かくして、その一言で、歓迎会の締めは観覧車と言う事になった。
問題は組み合わせだ。
お嬢はよっぽど新入部員の鼻をあかしたいらしく、組み合わせはクジ引きって事になった。
結果は乙女ちゃんとむっちゃん。お嬢と凛ちゃん。亮太は卯月さん。私は先生と乗る事になった。
今日、亮太はつくづくこの卯月さんとの組み合わせだ。私は少し辟易とした。
昼下がりの観覧車は、まだ新しいのもあって、行列ができていた。子ども連れも多いけど、やっぱりカップルも多数。否応なく意識しちゃう。
15分くらい待って、私達の番が来た。
一組目の乙女ちゃん達は、純粋に楽しそう。
二組目のお嬢達は、どっちが先に乗るかとか、どっちが進行方向に向いて座るかなどモメながら騒がしく乗り込んでた。何かと張り合う二人。実は良いコンビなのかもしれない。
そして亮太と卯月さんの番が来た。
そっと二人の様子を窺う。卯月さんは、緊張してるのか、耳まで赤くして俯いていた。亮太はそんなの気付かないのか、相変わらずのボーッとして何も話さない。
やがて巡って来た観覧車の小さな箱は、二人を高い空へ連れ去った。

過去に縛られる恋　9

観覧車は7階建てのビルの屋上にあるだけあって、凄く見晴らしが良かった。
先生は綺麗な横顔で、暮れ行く街を眺めていた。聞きたい事はたくさんあったけど、なんとなく今は聞いちゃいけない気がした。
私は先生を視界に入れない様に外を改めてみた、けど逆に視界に飛び込んで来たのは……亮太と卯月さんの並んだ背中だった。って、どうして二人で乗って隣り同士で座ってるわけ？
私は無意識に亮太の背中を睨み付ける。しかも、近い！　ってか、肩がくっついてる！　二人は何か楽しそうに話してた。あ、亮太が笑った。何の話だろう？　ガラス張りの小さな箱は、すぐそこに見えるのにまるで別世界だ。
あ、卯月さんが動いた。
「え……」
私は思わず声を洩らす。
今、卯月さんの顔が亮太に重なった！？
「えーっ！」
私は窓に張り付いた。
けど、どんなに努力してもそれ以上前に進めるはずもなく、二人の箱はそんな間抜けな私を涼しい顔でスルーしながら移動し……ついには姿が見えなくなってしまった。
何？　どういう事！？　まさか……キス！？
私は顔を張り付けたまま、固まった。
私、今、何を目撃したの？
「一之瀬。お前、何してるんだ？」
「わぁっ」
冷静な先生のツッコミ。私は思いっきり動揺して、イスから転げ落ちた。

心臓がありえないくらい、激しく鼓動を打っていた。
「アハハ。いや、あの、あんまり景色が綺麗で」
私は引きつり笑いしながら、イスに座り直す。
本当は思いっきり頭上が気になるんだけど……。
先生は肩をすくめると、自分の膝の上に頬杖をついてそこに綺麗な形の顎をのせ、上目使いになった目で、私をじっと見つめた。
「ところで、お前……ちゃんと五十嵐の事は考えてるのか？」
「へ？」
聞かれる今の今まで忘れてた。私は頭をかく。
「正直、まだ何も。学園祭が終わったらって思ってはいるんですが……」
これは本当。学園祭はクラスと部活両方で出店するんだけど、準備も始まってるし、今、ゴタゴタしたくない。
「でも、マズいですよね～、せっかく新入部員来たのに、いきなし解散って」
「構わないんじゃないか？」
「え？」
先生の突き放した様な言葉に、私は真意が見出だせない。
「でも、コイケンがなくなっちゃうのは……」
「お前、真剣じゃないのか？」
先生は憮然とした。状態を起こし、今度は腕と長い足を組むと、再び私を見据える。
「部長のお前は、恋にちゃんと向き合ってるのか？」
先生の問いに、私は瞬く。
「当たり前じゃないですか」
そりゃ、フラれてばっかりだけど……いつだって、真剣に相手を追いかけてる。
でも、先生は眉を寄せた。
「私にはそう見えない。お前は相手に恋してるより、恋に憧れてるだけなんじゃないのか」

「？」
意味がわからなかった。
先生は言葉を続ける。
「傍にいるものが、いつまでもそこにあると思わない事だ」
五十嵐君の事を真剣に考えろって事！？
「判ってます。五十嵐君の事は、真剣に考えます。でも……」
亮太の顔が浮かんだ。
下降始めた観覧車に、振り向きたくなるのを我慢する。
「コイケンも無くしなくないです」
先生の眉がピクリと動いた。そして、深い溜め息をつくと
「部長のお前がそんな気持ちなら、この部の存在意味はない。解散した方がいいだろう」
取り付く島がまるでない、冷たい声。いつだって味方して、優しく見守ってくれた先生じゃないみたい。
私は顔色を無くした。自分の何が悪いかさっぱりわからない。
「ま、学園祭までは付き合ってやるよ」
先生の声が夕陽に染まる箱の中に、硬く反射する。
私は大きな見えない流れを感じ、それを目の前にただ茫然とするしかなかった。

過去に縛られる恋　１０

観覧車が下につくと、皆待っていた。
亮太は別に何食わない顔で、乙女ちゃんと話してる。
私は暗い気持ちを押し込めて、皆に今日の歓迎会の終わりを告げたのだった。

私は家に帰ってからも、今日一日の事がまとめられないでいた。

先生の結婚
亮太のキス
コイケンの解散
……

「あ～もう！」
私はクッションを抱き締めながら、足をジタバタさせた。何からどう理解したらいいのか、全くわからない。その時、ドアのノックが誰かの来訪を告げた。
「弥生ちゃん。今、いい？」
お姉ちゃんだ。私は顔をあげると「どうぞ～」って、気怠く答えた。
お姉ちゃんはヒョコっと顔だけ覗かせると
「良かった。ちょっと部屋まで来て貰おうかと思って」
そう言って手招きした。
何の用か思い当たらず、取りあえず隣りの部屋に移動する。
入ると、なんだか前よりガランとしていた。
「片付けしてたんだけどね、お洋服も随分あるから、弥生ちゃん、欲しいのないかと思って」
そう言えば、二週間後の学園祭の次の日が、お姉ちゃんの結婚式

だ。って、事はお姉ちゃんがこの家にいるのも後わずかって事か。結婚したら、慶太さんと一緒に東京に行く事になってる。会いたくても、すぐには会えない距離だ。

妙に空いた空間は、寂しさを誘っていた。私は並べられた洋服に目を通した。

どれもお姉ちゃんらしい、清楚で品のいい、そして高校生の私には少し高価なものばかりだった。

「弥生ちゃんと離れるの、寂しいな」

お姉ちゃんはポツリと呟いた。そして、私のオデコに自分のをあてた。

「弥生ちゃん、お姉ちゃんはアナタが心配よ。お姉ちゃんがいなくても大丈夫？」

私は苦笑いした。そうだ、お姉ちゃんはいつも優しくて、私の事ばかり心配してくれてた。きっと、亮太もそんな優しい所が好きなんだろう。

そう考えたとたん、観覧車の一件が頭に浮かんだ。私は胸の痛みを隠す様にわざと明るく笑い飛ばすと

「お姉ちゃんこそ、何しんみりしちゃってるの？　まさかマリッジブルー？　なら贅沢だよ～」

そうおどけてみせた。

あの告白から、初めてのボランティア部の部活。

この日は学園祭のミーティングと、展示物の準備。五十嵐君は私に気を使って、作業中はいつも通り接してくれてたけど……帰りは私の方から声をかけた。

秋の夕暮れは、茜色の空に高い雲がたなびき、川沿いの通学路はススキが風に揺れていた。

私達は堤防に降りて、ゆっくり歩いた。

「五十嵐君、あのね」

私は言葉を探す。五十嵐君は黙って、次の言葉を待っていた。

少し俯きがちな横顔は、緊張に少し固かった。
「あのね私、五十嵐君の事、そう言う風に見た事なくて……」
やっぱり待って欲しいって言うのは、虫が良過ぎなのかな。
私は先生に言われた言葉を思い出していた。今、そう思えないならキチンと断るべきなのかもしれない。
私はいつしか足下ばかり見てた、顔をあげた。
「だから……」
「じゃ、これからは、そう言う風に見てくれるよね」
五十嵐君は私の言葉に自分の声を被せた。彼は私に二の句を継がせず、間髪入れず言葉を続ける。
「なら、答えはまだ出さないでよ。ちゃんと、僕を見てから……答えを、ください」
最後の敬語は、彼の真剣さの表れなのかな。私はなんだか少しホッとして、笑顔になると頷いた。

過去に縛られる恋　１１

結局、私自身何を直せばいいのか判らないまま、学園祭の前日を迎えていた。
学校全体がお祭り騒ぎの空気に、浮つき始めてる。
ボランティア部では展示物と、売り上げを寄付する名目のクッキーの販売。コイケンではお嬢のアイデアで、フェイスペイントとネイルアートをする事になってた。皆でローテで交代。不器用な亮太は客寄せや整理券配りで…十津川くんも助っ人してくれる事になっていた。
それぞれのクラスはたいてい劇をするから、本当に分刻みのスケジュールだ。
それでも、皆、明日くる騒ぎの予感にワクワクしていた。
私は最後まで残って明日の準備を終わらせ、教室の扉を閉めた。
ふと見ると、遠くで亮太の背中が見えた。
たぶんクラスの準備で残ってたんだ。久しぶりに一緒に帰ってやるか、なんて思って、私が駆け出そうとした時だった。
亮太は誰かに呼ばれて右に振り向いた。
そこに駆けてくる小さな影。……卯月さんだ。

ズキン

観覧車の光景が浮かんだ。
私はそれ以上足を動かす事が出来ず、遠ざかる二つの影を黙って見送るしかなかった。
そうよ卯月さんもコイケンのメンバーなんだもの、応援しなきゃ。亮太と上手くいく様に……。亮太だって、きっとその方がお姉ちゃんを忘れられていいに決まってる。いいに決まってるんだ。
拳を握り締めると、二人に背を向けた。

そこに、一つの影。
「よぉ。準備は済んだのか」
「先生」
先生は帰る所なのか、いつもの白衣じゃなく、スッキリしたパンツスタイルに身を包んでいた。
先生は教室を少し覗き
「いよいよ学園祭だな」
「はい」
私は俯いた。
何かもう、逃げ場が無い感じ。こういうのって、前門の竜に後門の虎って言うんだっけ？　って、あ～っ。私、何考えてるの！　そんなの考えてる場合じゃないじゃん。何とかしないと、学園祭でコイケン解散って事になりかねないんだもん。
「一之瀬、これから付き合えるか？」
「へ？」
意外な言葉に、私は先生を見上げた。でも、いつもと変わらない先生の顔からは何も読み取れない。
「はい。大丈夫です。……けど」
「なら、ついて来い」
先生はそう言うと、颯爽と風を切る様に歩き出した。
私はまだ、何一つスッキリさせられないまま、とにかく先生の背中を追いかけた。

先生の車は、外見には似合わないけど、内面にはなんとなく合ってる感じの、四駆のゴツい車。乗るのは、お嬢の件以来の二回目だ。
エンジンがかかると同時に、ユーロビートがかかった。意外に秋風にも似合うユーロビートに共鳴するエンジン音。流れるようなドライブに、私達は自然と無口になった。
卯月さんと消えた、亮太の背中が浮かぶ。
亮太はもう、お姉ちゃんの事忘れたのかな？　卯月さんと、あの

ままくっついちゃうのかな。……きっと、その方がいいんだよね。きっと、ううん、絶対そうだ。なのに、どうしてこんな嫌な気分なんだろう？　ううん。私だって、五十嵐君がいる。彼といたら、きっとこんな嫌な気持ちにならない。……はずだ。

車はやがて、知らない大きな駐車場に吸い込まれていった。

隣りには大きな建物。私はそれが何かを察して、先生の横顔を見た。

「先生？」

「着いたぞ」

どうして先生はこんな所に私を連れて来たのだろう？

私は車のフロントガラスから、その白くそびえ建つその病院を見上げた。

過去に縛られる恋　１２

先生は慣れた様子で病院の廊下を進む。私は病院独特の匂いと雰囲気に、すっかり萎縮していた。
先を行く先生の背中には迷いなく、いつもと変わらない、背筋の伸びた綺麗な歩き方なのに、なんだか、今だけは少し頼りなく見えた。
「ここだ」
先生はある部屋の前に立つと、軽くノックをしてその中に入った。
私は慌てそれに続く。
部屋に入って、私は息を飲んだ。
機械音が支配する世界。そのただ中に管に繋がれた男の人がいた。
人形みたいに動かない。ううん、機械音と共に奇妙に胸だけが上下している。
先生は、私を振り返ると、私に小さく微笑んだ。
「紹介しよう。私の夫の百崎だ」
私はすぐには理解出来なかった。
先生が私を連れて来た意図も、先生の背負うものも、そこにある彼らの想いの深さも……。
先生はベッドの近くまで私の手を引いた。
そこには、色のない、生きていると言うより生かされてる人間が横たわっていた。髪や髭何かは綺麗に手入れされていて、形だけは普通の人間と変わらない。でも、よくドラマでみる『眠ってるみたい』な感じではなかった。
私は言葉を無くして、ただ立ち尽くす。
「一之瀬、行くぞ」
私は静かに頷いた。
私達は病院の中庭にやってきた。先生は私をベンチに座らせ、す

ぐにどこかに行ってしまった。
私はぼんやりと、世話の行き届いた美しい花壇を眺める。ワレモコウの朱が揺れていた。その鮮やかさはあまりにさっきの病室とは違っていて……私は言葉をなくす。
機械音がまだ耳を離れない。
「ほれ」
先生が缶コーヒーを手に戻ってきた。受け取ると、その温かさにホッとする。
「……驚いたか」
私は素直に頷いた。
先生はコーヒーを一口飲むと、ゆっくりと自分の話をし始めた。

先生と旦那さんは大学の同期。卒業と同時に結婚を約束していた。けど、旦那さんの実家が猛反対。半ばかけおち状態で旦那さんは卒業前に家を出た。
卒業式の後、二人はその足で一緒に籍を入れに行くつもりだった。だけど、先生は相手の両親に掴まり、待ち合わせの場所には行けなかった。そして、事故が起こってしまったのだ。
旦那さんは待ち合わせの場所に突っ込んで来たトラックの下敷きになった。
その手には、結婚指輪がしっかり握られてたらしい。
「婚姻届を私が来る前に出してたみたいだ。たぶん待ち合わせに来ないから、向こうの親と鉢合わせしてるのを勘づいて、先に一人で出したのかもしれない」
先生は遠くを見つめながらそう言った。
旦那さんの回復の見込みはほぼ無く、あの機械、人工呼吸器なしでは生きられない体になった。
向こうの両親は延命を拒否した。
「私は諦められなかった。回復の望みはなくても、生きていて欲しかったんだ」

呟くような声は、冷たい風にかき消された。
先生は深い溜め息を一つついた。
「自分でも、エゴイストだと思う。向こうの両親は泣いて私に頼んだよ『これ以上、息子を苦しめないでくれ』って」
自嘲する。赤く熟れた太陽は、ビルの隙間に落ちようとしていた。その赤みさす光に、先生の横顔は泣いてる様に見えた。
「だが、決定権は配偶者の私にあった。……私は彼との約束通り、彼と生きて行く事を選んだんだ」
掠れた声が先生の苦悩を表してるかの様だ。
「けど、今も正解はわからない。ただ、後悔はしてるよ。私はただの一度も彼にキチンと自分の想いを伝えた事がなかったんだ」
静かに先生は瞼を閉じた。
「いつでも伝えられる。そう思い込んでいたんだ」
長い睫毛が揺れていた。
先生がどんなに辛く、悩み、後悔してるのか、私にはそれは深すぎて想像も出来なかった。
ふと、先生は小さく笑い、私を振り返った。
「だから、私はまだ夫に恋したまま、愛になれない恋のままなんだよ」
最後の太陽の一筋が落ちた。
空に残ったのは、太陽がさっきまでそこにあった証しを示す、微かな淡い色の余韻だけ。
「一之瀬、後悔しない恋をしろ。私が教えてやれるのはこれくらいだ」
私はこの静かな声を、自分の中に刻みつけるように頷いた。

過去に縛られる恋　１３

私は自分の許容以上の事実を目の当たりにして、なかなか理解出来ないでいた。
お風呂に入りながら、先生の横顔を思い出す。
両手でお湯をすくってみた。手の中の温かいお湯。先生の幸せは、いつも先生を包み温めそこにあるのが普通だった。でも……。
私は掌を閉じる。
その幸せを握り締めようとした時、それは指の隙間から零れ落ちたのだ。
そこにいるのが当たり前だった存在が、永遠に遠くに去っていく。
放課後の亮太の背中が浮かんだ。お姉ちゃんを想う亮太を見るのは、苦しかった。でも、私も恋してたら、その苦しみから少しは解放された。同じ様に片思いでいると安心できた。
―　私は何に、いや、何のために恋してたの？
先生が私に言いたかった事が、形になりそうになる。でも、私はそれをまだ認めたくなくて……。
空になった掌を、水面に叩き付けた。水滴は虚空に舞い、見えて来そうな答えは湯気と一緒にぼんやり浮かんで消えた。

「俺達さ、いつまでも幼馴染みのままでいられないと思うんだ」
いつにない、真面目な顔の亮太。私はまだその言葉の指す意味が判らず、じっと彼の顔を見る。
「だから……」
彼は、そっと近付くと優しく私を引き寄せた。彼の腕の中は広くて、私はすっぽり収まってしまう。私は込み上げる切なさに、吐息を洩らした。
「亮太……」
おそるおそる回した手に、力をこめ様とした……時だった。不意

に彼の体が離れ、間近に迫る瞳が私を覗きこんだ。
胸の鼓動は痛みを超え、締め付けんばかりだ。
「弥生」
「りょ……」
「さよなら」
「え？」
ぬくもりが離れていく。みると、亮太の遥か後方にはウェディングドレスのお姉ちゃん。
「俺、幸せになるから」
言葉を無くす私を置き去りに、亮太は無慈悲な背中を向け、お姉ちゃんの手をとる。
待って！　私まだなにも……。
二人の並んだ背中があの放課後の卯月さんにも重なった。
慌て手を伸ばしたけどもう届かない。
私は力無く膝をつく。後悔だけが私の傍にいた。

「あ～！　もう！　そんな顔してたら、来る客も来ないじゃない！」
お嬢がネイル作業しながらハイトーンな声を飛ばした。私は気怠く恨めしい目を向ける。
「寝不足なのよぅ」
あんな変な夢のせいで、夜中に目が覚めて以来ろくに眠れなかった。ったく、亮太は夢まで迷惑な奴だ。きっと、昨日色々見たから……あんな。
「大丈夫？」
メイド姿の乙女ちゃんが、顔を覗かせた。
学園祭も半ばに差し掛かり、賑やかさはピークに達しようとしている。
コイケンの『恋に効くネイル＆ａｍｐ；フェイスペイント』はなかなかの盛況で、お客さんは途切れる事はなかったが、私はまだ体のエンジンをかけられないでいた。

ちなみに、乙女ちゃんは陸上部の方でメイド喫茶のメイドしてたみたい。男装の凛ちゃんと、なかなかの組み合わせだ。
「大丈夫。大丈夫。もうすぐ交代だよね」
私は作り笑いすると、時計を見上げた。
「先輩」
「ん？」
振り向くと、着物姿の卯月さん。彼女は確か茶道部だっけ。
何だか顔を見るだけで重い気持ちになった。
「どうしたの？」
「次のネイル代わるんで、最後の私の番と交代してもらえませんか？」
それを聞いて、私はハッとした。たぶん彼女は、文化祭最後のイベント、キャンプファイヤー狙いだ。キャンプファイヤーで告白したら上手くいくってジンクスは、この学園の生徒なら皆知ってる。たぶん、亮太を誘うんだろうな。
私は塞ぎ込みそうになった。けど、私に断る理由なんて……あるはずない。
「いいけど」
「ありがとうございます」
卯月さんは礼を言うと、さっそくお嬢と交代に行った。
私はその弾んだ足取りに揺れる着物の蝶みたいな袖を眺めた。
「いいの？」
誰かが私をつつく。さっきまで十津川くんと客寄せしてた、むっちゃんだった。
私は平気を装って、むっちゃんを見上げる。
「どうして？　別にぃ」
「キャンプファイヤー狙いだよ」
「たぶんね」
私は肩をすくめてみせた。
「……五十嵐君はいいの？」

「あ」
忘れてた事に、自分で驚く。そういえば、学園祭までに答えを出すんだった。じゃなきゃコイケンの存続が……。
「ピンボケした事やってんじゃないわよ」
後頭部が誰かにはたかれた。って、こんなのするの、お嬢しかいないけど。
私は頭をさすりながら彼女を振り返った。彼女は呆れ顔で腕組みをしている。
「そんなをだから、万年”イイ人”なのよ」
はたかれた後頭部より、その言葉は痛く胸に突き刺さる。
「まぁ、今回は相手が弥生を好きなんだし、いいか。当然、ＯＫするんでしょ？」
お嬢の言葉に私は俯く。
正直、まだ決め兼ねてる。
「求めるより、求められる方が、弥生にはいいのかもね～」
むっちゃんまで……。でも、確かに、そうかもしれない。このまま、色々悩むくらいなら、いっそ、五十嵐君といた方が大切にしてもらえて、楽かも。
「そろそろ亮太のクラス、劇始まるみたいよ」
表から乙女ちゃんの声がした。
お嬢とむっちゃんは、顔を見合わせるとさ、ニヤリと笑う。
「せっかく時間空いたんだし、見て来たらぁ」
「……」
正直、気が進まない。今は誰よりも亮太の顔、見たくない。
「私達、これからまだ仕事あるし、コイケンから誰も見に行かないのも可哀相でしょ」
確かにそうだけど。
「さぁ、行って、行って！」
むっちゃんは私の背中を強引に外に押し出した。
廊下に放り出され、私はむくれる。なんなんだ一体。私がピシャ

リ閉められたドアを睨んでた時だった。
「あ、一之瀬さん」
今、二番目に会いたくない人の声。
叱られた子どもみたいに、そっと振り向くと、そこには五十嵐君が立っていた。

過去に縛られる恋　１４

私は五十嵐君と亮太の劇を見に行く事になった。何か変だけど成り行きだ、仕方ない。
講堂に入ると、もう中は暗く、観客もまぁまぁ入っていた。
「一之瀬さん」
五十嵐君が私の手をひいた。思いがけず握られた手に、私は俯く。
優しいけど、しっかり引っ張ってくれる手。でも、私はそれを握り返せないでいた。
「こっち」
五十嵐君は席を見つけて、私を座らせた。だけど、手は離さない。意外に舞台から近いその席は、きっと向こうからも良く見える。
「あの……」
私が五十嵐君に声をかけかけた時だった。
講堂にベルのけたたましい音が鳴り響き、劇の開始を告げる。
私は仕方なく、五十嵐君と手を繋いだまま、照明に明るい舞台を見上げた。

演目はオリジナルの時代劇だった。内容は村を襲う盗賊を、行き掛かりの浪人が倒すってもの。劇は進んで行くけど、亮太が出て来る気配はなかった。よく考えれば演者って決まってるわけでもないし、無口で無愛想な奴のことだ、裏方なのかもしれない。
私は何だか拍子抜けと言うか、ホッとした。
途端、薄暗いのと昨夜の寝不足が急にたたりだして……。
気がつくと、船をこぎ始めていた。何だか心地良い。昼休み後の居眠りみたい。しばらくまどろんでいたい気すらしてきた。
が、そこにいきなりの大音響！
「！？」
私はイスから落ちそうになるほど跳ね起きると、辺りを見回した。

暗い。
「まだ劇の途中だよ」
五十嵐君が囁いて教えてくれる。
意外な至近距離に私は恥ずかしくなって頷く。どうやら五十嵐君の肩に寄りかかって眠っていたらしい。
「あ、あぁ。そうなんだ」
気まずさを誤魔化すように舞台の上を見上げた。
もう佳境のは……ず。
「あ」
私は思わず声をあげた。
だって、そこにいた舞台上の亮太、侍姿のまさにその人と目が合ってしまったから。
亮太はすぐに目をそらすと、演技を続けた。
「一之瀬さん？」
五十嵐君の声に、血の気がひく。待って……亮太、いつから舞台にいたの？　もしかして、手、繋いでるのみた？　って、それだけじゃない！　私、五十嵐君にもたれかかってた。それも、もしかして見た！？
うそ〜〜〜！！！
私は泣き出したくなった。今すぐ、誤解があるなら、解きに行きたくなった。
でも、暗がりから見る光の中の亮太はまるで別世界の人間みたいで……今や誰よりも遠い存在だった。

私は明るくなるのを待って、講堂を飛び出した。
色々考えだしたらキリがないけど、何だか嫌だった。こんな、こんな……。
「一之瀬さん！？」
私を呼ぶ声。振り向く余裕もない。私は飛び出した廊下で、亮太を探す。

演目を終えた亮太のクラスの生徒達が出て来てた。たくさんの人込みをかきわけ、私は探す。でも、亮太はすぐには見つからなくて……。

やっと見つけた侍姿の亮太は、何人かの友達と話してた。私が呼ぶより先に、亮太が振り向く。

目が合って、ハッとした表情。私に気がついたみたい。良かった。ちゃんと話せる。そう思って私が駆け寄ろうとした時だった。

「……え」

亮太が、ゆっくり私に背を向けた。

『さよなら』

夢と同じ背中に私は立ち尽くす。

いつまでもそこにあるはずの……はずだった……当たり前の存在が今、離れてく。

「一之瀬さん？　どうしたの？」

私は五十嵐君に呼ばれるまで、自分が泣いているのに気がつかなかった。

過去に縛られる恋　15

「ごめっ、ごめんなさい！」
五十嵐君に謝ると、私は逃げる様に回れ右をして走った。
頭の中がごちゃごちゃだ。思考らしい思考も、言葉らしい言葉も、何も浮かばない。ただただ。胸が潰れそうなほど痛くて、息苦しかった。涙を堪えようとしても、頬が痙攣し唇がわなないてしまう。
しばらく走った後、廊下に響く学園祭の終了間近を伝えるアナウンスに、私はようやく足を止めた。ぼんやりとする頭に、戻らなきゃ、という文字だけが浮かんだ。
そうだ、戻らなきゃ……コイケンに、戻らなきゃ。
私はまだ早鐘を打つ心臓を押さえるように上下する胸に手を当てると、ゆっくりと顔を上げた。

テナントに着いた頃には、一般客はだいたいはけた後だった。
私の様子に真っ先に気がついたのは、むっちゃん。すぐに目配せすると、乙女ちゃんが新入部員の二人を連れ出してくれた。
私はツンと痛くなる鼻をすすり、お嬢が用意してくれた椅子に座った。
……脱力。
胸に空いたポッカリとした何もない空間に、成す術が見つからない。私はまだ流れる涙を塞き止める様に、硬く目を閉じた。
「どうしたの？」
むっちゃんが優しく背中をさすってくれる。お嬢の手が、私の握り締められた手の上に重なるのを感じた。
「私……」

五十嵐君と亮太の劇を見に行った事
繋がれた手を離すタイミングを逃した事

そのまま眠ってしまった事
亮太と目が合ったのに無視された事

思いつくままに話した。話しながら、私……やっと気付いた。
どんなに、どんなに、私が亮太を好きだったのか。
お姉ちゃんには勝てない。そんな気持ちから、逃げてた。亮太を失うのが怖くて、自分の気持ちを誤魔化して恋に恋する事で忘れようとしてた。
私の場合、イイ人止まりだったのは恋してたからじゃない。ただ相手に嫌われないようにしてた、それだけだったからだ。
私の本当の恋の相手は、きっとずっと前から、亮太がお姉ちゃんのチョコを大切にしてたのを、見てしまった……それよりも前から亮太だったんだ。
「私、馬鹿だ」
涙で揺れる声は、ガランとした教室の床に、虚しく響いた。
一通り話し終えたら、むっちゃんが冷たいお茶をくれた。感情の高ぶりにほてった喉に、それは心地良く降りていく。
「ったく、こんな事とは思ってたけどね～」
お嬢が私の額を小突いた。え？　どういう事？　私は瞬きして、二人の顔を交互に見る。むっちゃんは苦笑いして
「始めに気付いたのは、乙女ちゃんだよ。それから、私達も弥生を見てたら、なんとなくそうなのかなって」
そう言って、私の隣りに座った。
「だから、アンタが失恋してもさ、私達だぁれも心配してなかった。だって、アンタは始めから『失恋』してなかったからね」
辛口だけど、お嬢の言ってる事は正しい。
「だから、五十嵐君や卯月さんには悪いけど、わざと煽って弥生が気付けばと思ってたんだけどさ」
「帰りが遅いから、弥生の代わりにネイル入って、いい報告待ってたんだけど、まさか……こうなるなんてね」

二人もさすがに困った様子で顔を見合わせた。
「……遅かったのかな」
私は零す。失ってから気付くなんて……。先生もあんなに、私にヒントをくれてたのに。
悔しくて、私は顔を伏せた。
その時だった、いきなり教室の扉が開く。顔を上げた私の前にいたのは
「先生！　乙女ちゃん！」
先生は相変わらず両手をポケットに突っ込み優しい目で私を見つめてる。乙女ちゃんはゆっくり私の前まで歩み寄ると、膝を折って目線を合わせた。私の両手を包むように握り、じっと目を見つめる。
「弥生。もう言い訳しちゃダメ。逃げちゃダメよ」
「でも……きっと、私が言えば、亮太を悩ませる事になる」
私は語気を弱める。
今更こんな気持ちを話した所で、亮太には迷惑なだけだろう。それでなくても、亮太は私と五十嵐君を見てるし、なにより明日はお姉ちゃんの結婚式なんだから。
私は外を見た。夕闇迫る校庭に、一際明るい炎が舞い上がってる。
それにきっと、卯月さんは、亮太に告白する。今、亮太に話せばますます混乱させるだけだ。
けれど、乙女ちゃんは首を横に振った。
「弥生、恋は止められないものよ。無理に止めたら、必ず後悔する」
そして、私の胸をトンっと軽く拳で叩いた。
「勇気が出るおまじない」
優しく微笑む。続いてお嬢が私の後頭部をはたいた。
「じゃ、私からは素直になれるおまじない」
私は頭をさすり、苦笑い。むっちゃんが私の手をとった
「私からは自分を信じるおまじない」
皆、それぞれの恋をして、凄く強くてかっこよくなっていたのに、私は今気がついた。

皆の恋は上手くはいかなかったけど、真剣に誰かに恋をした、それは決して無意味じゃなかったんだ。
「譲れないものにくらい、わがままになれ」
先生が、微かに笑みを浮かべながら歩み寄る。そして、私の頭に手を置いた。
「私からは何もやれない。幸せは自分で掴み取って来い」
「はい！」
私は涙を拭うと立ち上がった。
そうだ、何もしないで後悔するくらいなら、ちゃんとケリを自分につけてやる。
気付けたんだもの。やっと、自分の気持ちに。
私は一度振り返り、一人一人を見つめた。
お嬢はパンチ。乙女ちゃんはガッツポーズ。むっちゃんは力強く頷いて、先生は腕を組んで微笑んでくれた。
私はしっかり頷いてみせると、炎が燃え上がる校庭へ亮太を探しに駆けだした。

過去に縛られる恋　１６

私は校庭に飛び出した。
すっかり日が落ちた空には、透明な輝きを放つ星々。そして地上では、それを焦がさんばかりに燃え上がる炎。たくさんの影がその炎が作り出す幻の様に、揺れていた。
それは学園祭っていう、日常であって、日常じゃない。当たり前の時間が少しの色をつけただけの非日常に、普段隠している気持ちの解放を許した人々の束の間の歓喜の踊り。
私はその、むせかえる様な熱気の中を駆け抜ける。
たった一つの影を、幻になってしまう前に掴まえる為に。
「……亮太」
私は肩で息をしながら、目をこらす。炎に照らされた顔の中に、彼はいない。
「亮太っ」
心の底から絞りだした声は、失うんじゃないかっていう不安に震えた。
「！」
視界の端に蝶が舞った。卯月さんの着物？
慌て視界を巡らせると、着物姿の二人が校門を出て行く姿が見えた。
私は再び走り出す。
もう、大切なものを見失わない為に。

私が追いついた時、二人は学校の前の河原に降りていた。
私は無意識に木の影に姿を隠す。
鼓動が悲鳴を上げている。
「先輩。私……やっぱり、先輩が好きです」
卯月さんの凛とした声が、冷たい秋風に乗って耳に届いた。

「……」
亮太は答えない。俯いて、何かを手に握り締めている。
「先輩！　先輩の好きな人には、もう相手がいるんでしょ？」
「……そうだな」
唸る様な声。そうだ亮太はずっと……。
悔しくて、切なくて私は唇を噛む。
「俺はずっと傍で、俺以外の人間を見ているその横顔ばかり見て来た。だから、お前の事は見てやれない」
亮太は小さく笑った。そして、掌の何かをそっと開く。
それは、小さな小箱。お姉ちゃんの婚約指輪だ。
そっか。亮太、間に合わせたんだ。
「でも！　私は……私は先輩を……」
「諦めてくれ」
「出来ません！」
卯月さんの悲痛な声が響いた。彼女は亮太に掴みかかると、うなだれて肩を震わせる。
「どうしても諦めろって言うなら、どうすれば忘れられるのか教えてください」
亮太はその小さな背中に、そっと手を添えた。
「それは俺には教えられない。俺も知りたいくらいだ」
亮太は小箱を見つめた。彼の想いの深さが苦しくて……。私は両手を胸の前で握り締めると、固く目を閉じた。
ダメだ。やっぱり言えない。こんなに強い気持ちを持つ亮太に私の気持ちなんて。
皆の顔が浮かぶけど……ごめん、私……。
何もかも、諦めかけた、その時だった。
「何よ！　こんな物！」
「！？」
慌て振り返る。卯月さんの手が勢いよく払われ、小箱が暗闇に放り出されていた。

「あ！」
それは伸ばした亮太の手をすり抜け、真っ黒な川の流れに飲み込まれる。
亮太は目を見開いて、それを見つめていた。
嘘。亮太のずっとずっと大切にして、やっと形にした必死の想いが、こんな……。
卯月さんは
「……先輩が、先輩が悪いんだから！」
震える声で後ずさると、亮太のへの罪悪感を振り切るように走り去ってしまった。
一人残された亮太は、力なく膝をつき、茫然とその川の流れを見つめていた。

過去に縛られる恋　17

亮太はしばらく夜の闇を吸収したような真っ黒な川を見つめてた。
私は出て行くに出て行けなくて、息を殺し亮太を見守っていた。
やがて亮太はゆっくり立ち上がると……
「……え」
川の中に入っていった。
秋と言えど、日が落ちれば十分涼しい。川の水だって冷たいはずだった。しかもこの暗さ、見つかるはずない。なのに……。
亮太は必死に探してた。諦めなんか少しも見せない。それほどまでに、あの指輪……お姉ちゃんが大切なんだ。
私は胸の疼きを抑えると、靴を脱いだ。
「亮太、手伝うよ！」
「弥生！？」
驚く亮太を見ず、私は川に足をつけた。想像以上に冷たい水に震えあがる。すぐに足先は寒さに痺れ、痛みすら感じる。
「お前……」
「いいから！　探そ！」
私は有無をいわさず探し始めた。
水につけた指先も、亮太の気持ちを知った心もジンジン痛む。
馬鹿かもしれない。無意味かもしれない。暗闇の中、流れる川底からあんなに小さな一カケラの石をこんなに辛い思いまでして、好きな人が他の人への想いを伝える、その為だけに探すなんて。
でも私は、見つけたかった。これが間違いだとしても、やっと見つけた自分の本当の恋を終わらせる事になったとしても。
私は……。
「あった！」
亮太の声。私は慌て駆け寄る。

二人ともびしょ濡れだ。でも、そんなこと、全然かまわなかった。
亮太の手の中にある、銀色の小さな小箱をじっとみる。亮太の大切にしてきた気持ちの結晶だ。
「良かっ……た」
亮太はそれ胸を撫で下ろすと、その箱をそっと開けた。
でも、指輪はそこにはなかった。
代わりに川の冷たい水だけがその中に満ち、星明かりを揺らしていた。
「……」
私達は言葉なくそれを見つめる。
背中に遠くから聞こえる喧騒が、別世界のものの様な気がした。
私の頬から一筋の雫が落ちた。
「は……はは」
亮太は首を横に振ると、川岸に力なく腰を下ろした。
私もうなだれながら、その隣りに蹲る。
足下にはあの小箱が開いたまま無造作に置かれていた。
「格好悪いな。俺、せっかく、間に合わせたと思ったのにな」
「……今日、渡すつもりだったの？」
私は小箱から目を離せないでいた。
今、亮太の顔をみたらきっと酷く泣いてしまう。そんな気がしてたから。
亮太は「あぁ」と呟くように肯定する。
しばしの沈黙。川のせせらぎが次の言葉を待つ。そして、その静寂は想像もしえなかった言葉に破られた。
「今日お前に、渡すつもりでいた」

過去に縛られる恋　１８

「え？」
私は耳を疑い、顔をあげる。すぐ傍にある亮太の瞳は、まっすぐに私を見つめていた。
「それって……どう言う……」
戸惑いに私は真意を探る様に亮太の瞳を見つめ返した。亮太は一呼吸おき、今度はハッキリ言い放つ。
「俺は弥生、お前が好きなんだ」
いきなり私の体が大きく揺れ、視界が変わる。
亮太の腕が私を力強く抱き寄せていた。それは夢なんかよりずっと確かで、広くて温かで……。
「兄貴達が一緒になって、俺とお前がただの幼馴染みじゃなくなっちまう前に、告白したかったんだ」
心が震える。亮太のぬくもりが、ううん全てが愛しくて、私はこのまま目を閉じてしまいたくなった。
でも、私の中のシコリが、それを許してはくれなかった。もし、これが本当なら嬉しいに決まってる。でも、納得できない。そもそも亮太が好きなのは……
私は溢れ出そうな想いを飲み込むと、亮太の胸を押して彼から離れた。そっと亮太の胸に手を置いたまま、見上げる。亮太の顔が僅かに曇った。
「あ、そっか。ごめん。お前は五十嵐が……」
「ううん。あれは違うの」
私は首を横に振る。
本気だから、キチンとしたい。うやむやなままは、何も終わる事も始める事もしたくない。
「あれは、ただ私が居眠りしちゃっただけで……。五十嵐君は違うの」

俯いて、呼吸を整えた。鼓動は治まる気配もなかった。私はお守りを握り締めるように、目を閉じて皆の顔を思い出す。
もう一度だけ、もう一度だけ皆の力をちょうだい！
私は顔を上げると、しっかり向き合った。
もう、何も誤魔化さない。もう、逃げたりしない！
「私、さっきわかったの。私は恋って言う名前の言い訳に逃げてた。お姉ちゃんを見てる亮太……から」
「だから、それ……」
私は亮太の言葉を遮る。最後まで伝えたい。
この気持ちは譲れないんだもの。
「私、亮太が好き」
亮太の目が驚きに見開く。
「じゃ、俺達……」
私は首をまだ縦に振れない。
「何？」
もどかしさに亮太の眉が寄せられる。
私は今までのわだかまりを一気にまくし立てた。
「亮太がわからない。だって亮太、お姉ちゃんが好きだったんじゃないの？」
私の言葉に、亮太は困った顔をする。たぶん聞きたくない様な言葉が返ってくるんだろう。そう、覚悟を決めた。けど、聞こえたねは意外なくらい拍子抜けした声。
「俺がいつそんな事言った？」
私は目が点になり口ごもる。
「え？　だって」
私は少しムキになる。
「た、確かに、聞いた事はないけど！　小さい頃のバレンタイン。お姉ちゃんのだけ食べないで取ってた。それにバイト始めたのだって、お姉ちゃんの指輪無くしてからだし。だから、指輪はお姉ちゃんにあげるんでしょ？」

亮太は完全に呆れ顔。私を見つめ口をへの字に曲げる。
「他に何かあるか？」
「えぇと……」
私は言い淀んでから
「卯月さん！　そう彼女がコイケンに来た時、亮太はお姉ちゃんが好きだって否定しなかったじゃない。それに観覧車よ！　キスしてたでしょ？」
そうよ、彼女が出て来て色々悩んだんだもの。
「それはどう説明がつくの？　嘘なの？　亮太の言動はコロコロ変わりすぎ、だからこの告白も素直になれないよ！」
私が全て吐き出し終えると、亮太は涼しい顔で溜め息をついた。
「それで全部だな。俺の気持ちはいつだって揺らいでないし、嘘もついてない。全部お前の思い込みだ」
亮太の目はそらされる事はない。今度は私が話を聞く方だった。

過去に縛られる恋　19

泣きたくなった。自分の馬鹿さ加減に。
柳の下の何とやら……話を聞けば、全部なんて事なかった。
指輪は、始め本当に弁償するつもりでバイトは始めたんだけど、二人にやんわり断られ、その時にお兄さんから私達が兄弟になるのを聞かされて、初めてそこでその事実に気がついた亮太は、そうなる前に告白するのを思いついたみたい。
それまでも私の恋愛を見ているだけで、言い出せなかったから、これを区切りにしたかったそうだ。
卯月さんの件は、先に好きな人がいるって宣言してたから、あの場でハッキリ言えなかったって。言えばその場で告白しなきゃいけなくなりそうだから、否定も肯定もしないで逃げた。
観覧車は……古典的。髪に付いてたゴミを取って貰っただけ。
そして、私が彼がお姉ちゃんを好きなんだって思い込むきっかけのチョコ。これが一番大きなシコリだったのに、一番何でもなかった。
お姉ちゃんって、おっとりしすぎでたまにヘマをするんだけど、きっかけのチョコも、父にあげるのを間違えて亮太に渡しちゃった、チョコレートボンボンだったらしい。だから、正確には、食べなかったんじゃなく、食べられなかったみたい。
私は事の真相に茫然とした。何？　私、こんなつまらない事で、ずっとずっと遠回りしてたの？
っていうか、私の臆病な気持ちが、色んなことをあんな風に思わせていたのかもしれない。そう、ずっと本当の気持ちに向き合うことのできなかった気持ちのせいで……。
「わかった？」
「……うん」
私は素直に頷いた。恥ずかしさに耳まで熱くなった。

亮太は、私の頭を撫でると、あの小箱を手に取り、ふたを開けた。
「ちゃんと、指輪渡したかったんだけどな」
空っぽの箱。でも……私には見える。どんな宝石より綺麗な……。
両思いの告白って、もっとロマンチックだと思ってた。だけど様にならないのも、私達らしい。小箱を持つ亮太の手に自分のを重ねた。
「ありがとう。でも、私にはこれで十分」
私の為に頑張ってくれた、すぐ傍にいつもいてくれた、亮太の手。その手と繋がる手はどんな綺麗な指輪で飾られた手より、誇らしくて……嬉しかった。
頭を撫でていた亮太の手が、止まった。
互いの瞳の中に、互いを確認しあうと、私達はそれを閉じ込める様に瞳を閉じて、ようやく、ゆっくり、引き合うように唇を重ねた。

かくして、恋愛研究部ことコイケンは解散する事になった。
コイケンっていう形はなくなっても、私達の関係は変わらない。何の約束も形もないけど、それは信じられる。
そんな私達にコイケンはもう必要なかった。
あの銀色の小箱みたいに、本当に大切なものは形じゃない、そう言う事なのかもしれない。
弱い私達はこの先も、物や形を求めてしまう事もあるだろう。
過ちだって、後悔だって繰り返すかもしれない。
でも……私は、私達は、その度に悩み傷つきながら、不器用でもきっと前に進んで行ける。
私はコイケン部長日誌に、最後の一言を書き記した。
いつか大人になって、もし恋する気持ちを忘れてしまったら、再びこの日誌を開く事になるかもしれない。
けど、今はしばらくのサヨナラ。

「ありがとう」

呟くと、私は静かにページを閉じた。
寂しさにひたってる場合じゃない。
私は顔を上げる。
そう、私の恋は今、始まったばかりなのだ。

過去に縛られる恋　１９（後書き）

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。
『コイケン』は廃部となりましたが、この後日談として亮太が主人公のお話と、彼らが大学生（社会人）になってからの話も続きますので、よろしければお付き合いいただけると嬉しいです。

後日談のタイトル『片思いのススメ～未来の見えない恋～』
大学生（社会人）バージョンのタイトル『女老い易く恋成り難し』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3473i/

片思いのススメ

2010年10月8日13時25分発行